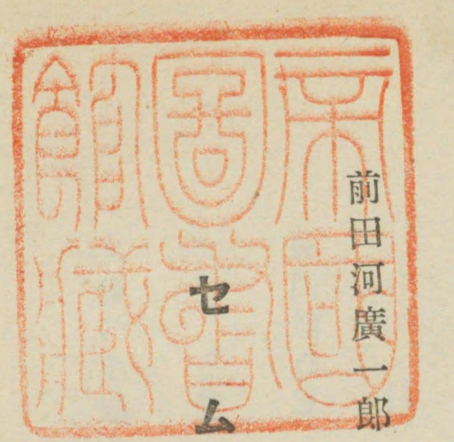
ガルた

113

前田河広一郎

596-244
1200501528000



前田河廣一郎

セムガ

日本評論社

日本プロレタリア傑作選集

596-244

目次

長江進出軍……1
セムガ(鮭)……三三
太陽の黒點……一二〇

長江進出軍（一幕）

——つとめて支那風に——

時　現在より程遠くない革命期を通じて

處　支那

人　（紳商

長江進出軍

外國人
- 軍人
- 宣教師

印刷工
苦力
インテリゲンツィア
紡績工
車夫 1、2
物賣り
乞食 1、2、3
娼婦 1、2
鍛冶屋
鐵道從業員
自動車運轉手
農民 1、2、3、4

支那人大衆

革命軍の將軍
- その妻達
- 子供

その幕僚 1、2、3、4、5
その兵卒(多數)
革命軍の政治部顧問
同政治部委員 1、2、3
同婦人政治部委員
土豪
劣紳
捕吏(數名)

舞臺とメカニズム

舞臺正面奥へ、稍蒼黄ろい大河の書割を一杯に張る。幕にても良し。裝飾は、これ以外に何もな

い。

各場面に應じて、大小の道具類は、すべて黑衣の道具方や、俳優自身が携帶して登場乃至は退場する。從つて、諸道具は、きわめて原始的なシムボルで事足りる。そして、あまり誇張らぬ方がいい。一例を執れば、馬は、竹を横へて跨がり、その尖端に『馬』といふ字を書けば良い。軍艦は紙で切拔いた船の形で結構。山は張子のブロック。都會は建築物のちよつとした遠見。門は布製にて竿にて張り二人の黑衣の道具方が捧げてゐるのを俳優が潛ればすぐ取り去ると云つたやうに、萬事は黑衣が甘くやる。花道の必要は認めない。オーケストラはつなぎ。演技なども、大體は無拘束である。唯、能に於ける場合のやうに、説明や獨白を挿む時、舊劇に於ける傍白、所作などを採用しても劇全體との均衡を度外視せざるやう注意される。

常に看客席へのアッピールを忘れないことが必須條件である。舞踊的要素の加味。登場人物のメーク・アップ及び扮裝は、新象徵的であらねばならぬ。リアリズムから、階級的色彩の最强度の特殊性を掴み出して、それを單純に明確に表現する。その點、グロテスクな隈取りの方法にまで還元してもいゝと思ふ。髯の種類によつて、階級性を出すなども面白からう。

在來までの舞臺上のリアリズムによつて、時間と空間との約束に、奴隷的に束縛された劇から看

客と俳優及び從業員を解放して、この一幕を通じて、作者は、出來る限りスポンタニイアスに漲山の場景を自由に築き上げ取り挫して見たいと思ふ。

（この事は、作者が兼ねてから論難してゐる子供らしい歌舞伎劇の活歴主義に對する寸毫の妥協でもないことを豫め斷つて置く）

一

物賣りが大聲で喚めいてゐる。

乞食三人、しきりに大地に叩頭してゐる。

印刷工はゲラを讀む。

農民四人は野菜物をかついで廻はる。

車夫二人、空車を曳いて、舞臺を入れちがひに縱横に駈け廻はつてゐる。

苦力は荷を擔つて通り、幾度も舞臺を廻はる。

自動車運轉手はゴム製の警笛とハンドルを持つて走り廻はる。

娼婦二人その間を縫うて歩るく。

（都會に漲るあらゆる喧騒、音響、機械の軋音などつゞく。すべて、人物は思ひ思ひの動作を、勝手に舞臺の各方面で營む。）

土豪と劣紳（都會の書割を持つて、いきなり飛び込んで來ると大聲叱呼する。）地主と役人だ、税金を出せツ！

（群集、沈默。一同礑と佇立）

車夫1。2。こいつらア、人喰鬼だ！　逃げろ！（去る）

農民1。あアーあ、わしはほんとに困る。こんなに税金ばかり取られては、わしらの食ふ物がない。

農民2。子供を賣るか、首を縊るか——どつちかだ。

農民3。嬶ア！（手を叩く）

その妻。おーう。（遠くから）

農民4。俺も嬶ア奴を呼んで相談しよう。嬶ア！（手を叩く）

（二人の農民の妻登場。農民達一團となつて低聲に相談を續ける）

自動車の運轉手（劣紳へ）また戰爭ですか？——貴方がたが税金と云はれる度に、戰爭がきつとあるのだが。

劣紳。いかにも、戰爭だ！

土豪。戰爭は、世の中の景氣を引立てる！

劣紳。支那人に愛國心を與へる。

土豪と劣紳。みんなお前達の爲の戰爭だ！　さア、警官達、こいつらを引連れて、役所へ行かうぞ！

（捕吏數名、一同を拉して去る）

2

（機械の音）

インテリゲンツィア、印刷工、鍛冶屋、紡績工、鐵道從業員等登場しながら話しつゞける。

インテリ。諸君、かう食へない世の中ぢや、何の爲に生きてゐるのか——わからんぢやないですか？

印刷工。私は今役所へ呼ばれて、やつと逃げ出したところなんだが、役人は三年あとの月給に税金を取つてゐる。

鍛冶屋。俺は昨日、來年の分を掠奪されたばかりだ。

一同。ひどい！　實にひどい！

インテリ。一番困るのは誰か？――農民だ！　次に、勞働者！

一同。勞働者と農民だ！

印刷工。私はこんな本を印刷中だが、この本には理窟がある。（ゲラを取り出す）讀んで見ようか――？

インテリ。誰の書いた本か？

印刷工。外國の反譯だ。

一同。讀め、讀め――大聲で朗讀しろ！

インテリ。待て。捕吏の干渉がうるさい。俺の下宿へ來い。

一同。よからう。

（黑衣、門を持つて來て、一同それから退場）

3

銃劍と拍車の響。モーター・サイクルの爆音。革命軍の幕僚達、兵卒を指揮して圓卓や椅子を運ばせて來る。會議室成る。

一同最敬禮。――革命軍の大將悠々と登場する。

革命軍の將軍（幕僚の一人へ）政治部顧問を呼べ！（幕僚1、去る）さあ、地圖をひろげい！

（大型の支那地圖が、兵卒二人によつて支へられる。遠くに大砲の音）

將軍。長江まで一直線に線を引け！（幕僚2赤いインキで曳く）次に、青い線をそれに並行して、海岸の方へ。（行はれる）

幕僚3。北西の方から、黑い線が到達するやうに思はれまする。

將軍。よし、それも曳け。まつすぐに、武漢三鎭へ？（行はれる）

幕僚4。桃色の線が、東南方面から湧いて來ないとも限りませぬ。

將軍。ふむ、その事もある。よし、書き込め！――次には、この度の戰爭の名義ぢや？――これは、何とするか？

幕僚5。恐れ乍ら、閣下、これはなるべく革命に關係のある名の方がよろしからうと思はれますが。

將軍。昔から大義名分と云ふ、支那は、名義のやかましい國だ。しかしあまり突飛でも……どうかのう？

幕僚5。その事につきまして、現在の支那民衆の思想的傾向が、どうやら、社會主義的になつて居りますので。

幕僚3。北伐國民軍――とは如何でせうか？

幕僚2。弱い。

幕僚4。北伐軍と簡潔には――どうだ？

幕僚5。中國革命軍は、如何でせうか？

將軍。よい。――しからば北伐革命軍、これが堂々として良いぞ。

幕僚一同。美名にご座りますな！

（政治部顧問、幕僚と登場）

將軍。（敬禮）只今、今回の戰爭の名義を、北伐革命軍といふことに決定しました。

顧問。北伐革命軍――なるほど、良い名です。だが、革命軍とすると、ほんとにその精神を持たぬと

駄目ですぜ。いままでの戰爭とちがふ。支那の民衆を軍閥と地主と外國資本とから解放してやる爲

の戰爭である。その軍隊にプロレタリアートの階級意識が缺乏してゐては、折角の美名も仇である。

將軍、よろしいか、その點をハッキリとされる方が急務ぢや。

將軍。（稍せき込んで）お言葉にも及びません。わしの軍隊は、これこの通り、靴の尖端まで支那革命

のために武裝して居る！　然らば、愈出征動員令を下して、支那は戰時狀態に入つたことに決す

る。政治部員の御活動におぬかりはありますまいな？

（此時、都會の書割を運びながら、支那大衆の群が舞臺奥手にひそかにしのび込む）

顧問。勞働者農民の軍隊は、支那に於て玆に最初の戰端を切る！　將軍、眞の敵をお忘れあるな！

（二人握手する。兵卒等、道具類を運び去る）

將軍。（劒を拔き）最後の閲兵式へ！（顧問大きく手を振る）

4

都會の騷音。電車のれきろく。自動車の疾走。工場のサイレンなど。都會の遠見の書割、群集に

よつて、ずつと舞臺の手前へ押進められる。但し大衆はまだ姿を見せない。政治部委員1、2、

3、及び婦人委員、思ひ思ひの方向から微行して來る。都會の書割に多くの傳單が貼られる。彼

等互に晌せして、別々に散る。

支那人大衆、一齊に、書割を押倒して、どつと舞臺前面へ躍り出る。書割は倒れたままで構はな

印刷工。來た！　我々の日が來た！

い。手に手に傳單。

苦力。三民主義の軍隊が動き出した。

インテリゲンツィア。國民軍を信頼しよう！

紡績工。俺達も武裝しよう！

一同。軍閥と地主と惡官吏をやつつけろ！

インテリ。先づ組織だ——同志達、組織を！

鐵道從業員。軍資金を送らう！

農民4。わしの娘を賣つても、この軍隊なら金を出すことにしよう。

農民2。(懷疑的に)だがよ、これも、やつぱりこの前の軍隊と同じこつちやねえのかの？

鍛冶屋。しかし、北伐革命軍とはいい名だぜ！　むやみにこんな名がつけられるもんぢやないわ。

農民1。贋物か、本物か、わしは暫らく匂ひを嗅いでゐよう。手に執るには、ちつと早いや。

乞食達。わしらはどつちが勝たうと、同じこつたよ。どうせ勝つた方が威張るにきまつてゐる。威張る奴は威張らせて金を貰ふに限るて。

娼婦達。わたし達もさうよ。

鐵道從業員。諸君、さういふルムペン主義はよろしくない。ロシアの民衆は……。

インテリ。まあ、いいぢやないか、この連中は文盲なんだからな。——新政府が出來たら、我々は無學者を失くなす運動を早速起こさにやならん。

印刷工。議論をしてゐる暇はないぞ！——直ちに我々は總工會本部へ集まらう！

(都會の書割を運んで一同退場)

5

汽車が轍を噛んで近づく。自動車のホンク・ホンク。

外國人、紳商と軍人、鐵道をシムボライズした車輪を小脇にして登場、暫らく舞臺を駈け廻る。

革命軍の將軍及び幕僚1及び5の三人、自動車をシムボライズしたハンドルを持つ自動車運轉手と共に登場して、汽車とばつたり出遇ふ。運轉手は、一隅に却く。

紳商。下らんことを始めたぢやないか！

軍人。我が國の權益を侵害しないと云ふだけで、君達が內輪喧嘩をしはじめたら、通商はどうなるか？　列國の侵略をどうする？——君達は、何時から果して獨立したのか！

紳商。こりや、どうしても、一つ交換條件にこちらの鐵器や食料品をうんと買つて貰はんと、な、君！

（軍人へ）

軍人。當り前ですよ。――革命は君達の商賣だから勝手にやるもいい。それがなけりや、恐らく君達も食つて行けまい。――だが、我々としては、默つて傍觀するわけには行かん。武力干渉――と出ても差支ないか？

將軍。何とも申譯がありません。しかし、支那は貧乏です。民衆は、ほとんど飢ゑ死にしてゐるのです。この際、地方軍閥を平定して、大地主や富豪を差押へ、支那に中央政府を建てないと、どうにも立ち行かないんです。暫らく眼を瞑つて見てゐて下さい。暫らく私達の借欵に應じて、軍資金を廻して下さい。

紳商。新しい時代の戰爭だから、新しい方法でやるのも結構だらうが、どの邦でも資本の持主の頭は大概古るいでな、革命軍なんぞといふ名目では容易に內地の資本家は動くまいよ。……

（この時、別な列車で、外國人宣教師が登場する。大きい金の十字架をぶら下げてゐる。紳商と軍人とに向ひ）

宣教師。大變、大變！　貴方がた、お聽きですか？――この連中は、愈ボルシェヴィキと手を握つて、事もあらうに、私達の宗教を阿片だなんて、飛んでもない惡態をつきはじめましたぜ。調べたところによると、北伐軍の中の政治部といふのが、そのボルの連中でしてな、そいつらは、今度の戰爭は、階級戰爭だ、外國人でも支那人でも、ブルジョアは皆やつつけるんだ、――などと大それたことを宣傳してゐる。

軍人。何、そりや、容易ならん！

紳商。恐ろしい企みだな。借欵には斷じて應じることならん！

軍人。本國政府に打電して、艦隊と陸軍の出動を乞ひませう！（手套をもつて發矢と佩劍を拍つ）

（忽然、空想が實現されでもしたかのやうに、空中に、飛行機、大砲、軍艦などの配列がそれぞれの示威的な音響を伴つて出現し、將軍と幕僚達の頭上にむらがる）

宣教師。地上に平和、人類に愛――これこそ支那を永遠の安泰に置くものですよ！

幕僚5。（憤然として、劍把を握る）馬鹿にするなツ！　ベルサイユ講和會議以來、支那は昔の支那ぢやないぞ！　よし、武力を持つて我々を脅すなら、我々四億の民に愛國の血がある、熱がある――潔よく鬪はう！

將軍。まあ、まあ、さう殺氣立つな。度量を大きく、な。これ、ここが卽ち大陸民の肚の示しどころぢや。――云ふも涙の種だが、あの法螺吹きとまで漫罵された故孫總理の大腹中を忘れるでない！

御遺訓を實現しようとすれば、このところは、じつと忍びなさい。

幕僚1、5。はい。

紳商。どうぢや。我々近代人はスピードを尊重する、東洋流な肚の探り合ひは眞平だ。借欵に應じても良いが、これだけの優先權をこの口とこの口と、それからこの線路とに與へて貰はう。次にこの鹽稅阿片稅は俺達の方で利子として受取る。署名さへすりや、いつでも金は融通しよう。但しいかね、但し附だよ。——この國とこの國とからの財政的乃至は武力的援助は絶對に除外して貰はねばならん！（文書を掌で叩いて見せる。軍艦其他宙から消える）

將軍。——この國もですな？（無念の思ひ入れ）

幕僚5。將軍、こんな屈辱的なデクテークアシップにまで私達は首を垂れるのか！

宣敎師。それ、それ、ここが、支那の運命の決定するところですよ。——それとも、貴方がた四億のモッブが、天にます神と世界の新鋭最高能力の武器とを向うへ廻はして鬪ひなさるとでも云はつしやるか。よう考へて、言葉を口に出される前に、十字を三度切りなさるがよろしからう。對手が惡るい。何しろ、對手が……。

將軍。事ここに到つては、急を要する。したが、お承知のとほり、現在東亞の政局は、お談のやうに簡單には參らんのです。同じく新興支那に興味を持たるる邦と云つて、ひとり、貴國には限りませんのでな。國際事情通の誰しもが云ふとほり、世界は、まさに支那を中心とし、均衡狀態にあると申すもの……いや、實を申しますとな、この國と、この國とから、もうすこし不肖等に對して有利な條件で、最大限度の援助をまで誓つて來て居るのですよ。

軍人。仲々あんたも上手になつたよ。そんな事情位はわしの方で、ちやんと調べてある。その代り條件の徹底的履行を迫まられた時には、あんた方高官の首が飛ぶやうになりはしないかな……？

將軍。問題は、そこぢやなくて、民衆ですよ。支那の民衆はさうは行きませんのでな。

紳商。民衆——ペッ、民衆と貴方の云ふのは、あの、わしらの建てたセットルメントへ油蟲や赤蟻みたいにたかつて來る苦力のことかい？　あれなら、樟腦と煙硝を嗅がせりや、すぐ逃げるよ。

將軍。いや、今度は、ちがふ、民衆は醒めてゐる！

宣敎師。神樣を祭壇から便所へ突き轉ろがしたロシア人のプロパガンダに醒めて居るのでせう？（外國人達詰め寄る）

（變裝した政治部婦人委員そつと登場して耳を峙ててゐる）

將軍。よろしい、緊急、幕僚會議を開きませう！　返事は、後刻。自動車を呼べ。（幕僚1、運轉手を

促がす。汽車の音、自動車の警笛、外國人一行と將軍達、舞臺を大きく一周して、右左へ退場する)

婦人委員。(被り物を脱いで)飛んだランデ・ヴーをみつけつちやつたわ。四人五人の男に、一度に求婚されるのは、女だけに限らないわね。——それにしても、もう婚約してしまつた方の男はどうするのでせう? ああ、氣が揉める! ひとごとぢやない——どれ、委員會へ報告しなくちやならない! (急ぎ去る)

6

舞臺、ちよつと空虛。哀調を帶びた音樂。

突然、半裸體にされた苦力、車夫1、2、鍛冶屋、鐵道從業員、物賣り、印刷工などが、舞臺の中央めがけて右から投げ飛ばされる。農民1、2、3、4もそれにつづく。

一同舞臺の上を毬のやうに轉ろがり乍ら、わんわん喚き立てる。

娼婦と農民の妻達、泣いて手を合はせながら、あと退りして出て來る。

捕吏を先立た土豪と劣紳、手に血みどろの銀貨を握つて、女達を足蹴にしながら濶歩して來る。

土豪。自動車を! (捕吏の一人、走り行く)

劣紳。して、これから、何處へ行かう?

土豪。知れたことだ、巴里よ!

劣紳。どうして巴里か?

土豪。あすこにア、わしの兄貴の怨意にしてゐたケレンスキーといふ男がゐるわ。

劣紳。どうしても、五省聯盟の方に勝味はないかの?

土豪。兎も角、かう天下が騒がしくなつちや、どちらが勝つても安心して居られんわい! (自動車運轉手登場、二人乘る。捕吏等最敬禮して退場。舞臺を一周して、自動車左端に入らうとすると、突如、兵卒二人に捧げられた稅關の門があらはれ、その内から革命軍の幕僚2、3がピストルを擬して土豪劣紳を誰何する)

幕僚2。降りろ!

幕僚3。これだ、札つきの反革命運動者は!

幕僚2。よし、恰どいいところだ。有り金を全部出せ。それから、我々と同乘して裁判所まで來い。

(四人自動車運轉手を促して、もと來たとほりを引返へす。民衆、二人を見て駈けつける。

前後左右からすがりついて、土豪劣紳を引摺りおろし、手取り足取りして、忽ち赤裸にしてしまふ）

幕僚2。よし、二人は、この連中に任かせて、我々だけ本部への報告を急がう！

幕僚3。何しろ、大金を没收したのだからな。

印刷工。その金は、俺達のだよ！（すがりつく）

幕僚。いや、これは、民衆の膏血を絞つた稅金であることはわかつてゐる。しかし、これを貴方がたに返還するまでに、一應我々の革命機關を通じて調査しないと、お渡しは出來ない。

幕僚3。そして、在來までの壓政に對する報復は、ソレその二人に十分に加へられるがよろしいでせう。（去る）

車夫1。なアんだ、ちよつと可怪しいぢやないかね？

鍛冶屋。一應我々の革命機關を通じてツてなこと云つたかと思ふと、ソレその二人に十分に加へられるがよろしいでせう、で、げんなまはない——畜生ッ、そんな革命政府が、どこにあるかい！

土豪。あいつら、わし達よりも體の良い騙取漢だ！

劣紳。そこをゆるめろ、聲が出ない。——お前達、もともこも無くしてまで、あの小悧巧な若僧どもの口車に乘りたいか？

土豪。いまにどえらい戰爭になつて、あいつらア敗けるんだぞ。その時、お前方の生命は——ああ、思つても竦とする！

印刷工。諸君、騙まされるな、こいつらのデマゴギーは北京外交團そつくりなんだ。——それよりも、今の將校二人の始末をつけよう！（右へ行かうとして、ちよつとたぢたぢになる）

（右奥から、夥しい群集歡呼の聲がする。それに軍樂團のバンド。ばらばらと、政治部委員達が、傳單を撒きながら走り出る。政治部委員達、まんべんなく舞臺一圓に傳單を撒き終つた頃、『萬歲！』の聲に送られて、高い幟が肅々とあらはれる。大きい布へ『北伐革命軍』と書いてある。兵卒大勢。幕僚、1、2、3、4、5等馬に乘つて登場。政治部委員1、馬上から演說をする）

政治部委員1。市民諸君！　今や、諸君の手によつて築き上げられた北伐の大軍は、ここに鮮かな旗を揭げて、長江まで進出することとなつた！（旗は中央に進む。群集それに見とれて、恍惚となつてゐる）この北伐革命の大義名分と、併せて、我々は、ここに青天白日の黨旗を揭げる！

（幕僚達や政治部委員皆手に隱くし持つてゐた青天白日滿地紅旗を揮ふ。わ——ッといふ動

揺めき。樂隊）

政治部委員2。――もともと、我が革命軍は、これ諸君の血と肉とから成る、プロレタリヤートの戰鬪組織である。これを維持するのは諸君自身であり、その統制に服するのは我々軍人の本務である。諸君と我々との間には常に吉凶勝敗、何に拘らず、事情を共通しなければならない。今日、我々革命軍は、ここに最大なる吉報を諸君の前にもたらす。――湖南に於ける我が革命軍の前敵總司令唐生智の軍隊は、この十四日に完全に敵を追討して、長沙に入城した。しかして、我總司令本部からは第四軍第十師、陳銘樞軍と、第四軍第十二師、張發圭軍とが、湖南の宣章にまで進軍した！北伐軍の第一戰は、ここに、殆ど矛に刎らずして勝つたのである。――市民諸君よ、さういふ次第であるから、我々の軍團はこれから、ぞくぞくと長江まで進出する。すでに、その爲には魯滌平の第二軍、朱培德の第三軍、程潛の第六軍、合して一萬五千人は、劍を磨き銃に油して、動員に備へてゐる。だが、悲しい哉、先立つものは、いつも金である。軍費の調達が出來なければ、近代の軍隊は進軍出來ない。何故か？――我々の軍隊は、市民諸君の軍隊である。我々は、市民諸君を片つぱしから掠奪して、村から村へ、馬賊のやうに押進む奮軍閥とは、その組織から根本的にちがつてゐるのだ！　で、ここに、革命政府は、新しい有奬公債五百萬元を發行することとなつた！　この公債は、ブルジョアに賴らない我々としては、勢ひ、同志市民諸君の應募によつてのみ調達されるのだ。公債に應ずるか、それとも、諸君は自分の勝利をみすみす捨てて、再び支那を軍閥と土豪劣紳と外國資本の盜賊の巢とするか、これは偏へに懸つて諸君の判斷力と愛國心とに待つものがあるのだ！　（兵卒達二三に眴せして）ソレ！

（兵卒達數人、鐵線を持つて來て、群集を大束に三つ四つに縛りつける。群集それと氣がついて驚くが、もう遲い。女達だけ、そのそとにうろうろする）

印刷工。拉夫だ！　拉夫だ！

鐵道從業員。怪しからん！　こんな古手なことをするとは思はなかつた。

政治部委員1。市民諸君、金か――それとも强制的に兵役に服從するか、どちらか？　諸君のうち、公債に應募する人は、兵役に服する義務を免じよう。さうでない人達は、奮つて我々と同じ軍務に服役して貰はう。戰爭は火蓋が切られた、人間はいくらでも要るのだ！

（『萬歲！』の聲、樂隊）

政治部委員1。兵卒達、急いで本部へ！

（鐵線で圍まれた男達、わいわい云ひながら、銃劍の尖端で押しこくられて退場する。幕僚

達、政治部委員達もそれにつづく。政治部婦人委員と女達だけ、顔を見合はして嘆息する）

農民1の妻。わしのところは、逆に釣るされたつて銅貨一つ出て來ねえだから、きつと兵隊になるだよ。

農民4の妻。おう、おう…やつぱり、あの人達だつて、新しいことを云ひながら、もとの惡漢と同じこツたよ！

婦人委員。みんな、これからが大事な時です。女は、お互にしつかりしませう！（一同退場）

7

一瞬時、舞臺暗くなる。

と、高い洋館の一つの窓のカーテンとシェードの彼方が明るくなつて、二人の男の握手してゐる影畫が描き出される。

その一人は、外國人の紳商であり、もう一人は革命軍の將軍である。

小間。

パンパンと二發の銃聲。

光消えて——闇。あとはしいんとする。

8

政治部顧問、急がしそうに、卓の地圖を見ては、その上へ赤い紙片のついたピンを刺してゐる。

ドアをノックする音。

政治部顧問。誰か？

衞兵。政治部婦人委員であります。

顧問。よろしい、お通し。

婦人委員。（息を喘ましてゐる）た、大變です！——例の秘密提携が、たうとう成立しました！

顧問。（口から葉卷を落とす）しましたか？

婦人委員。只今、あのホテルの奥の間で！——それで、わたし、あんまり腹が立つたもんですから、二發放つたの！　でも、あんまりですもの——この前の軍艦事件と云ひ、今度の事でも！

顧問。（地圖を揉みくちやにして）あいツ、ピンがあつた！　よろしい、同志。ひそかにお歸へりなさい。今後もようく目を開いてゐて！

（婦人委員、恭しく敬禮して去る。顧問久しく腕組みして考へ込む）

顧問。（長嘆息）個人の資格で、俺が顧問になつたから、さほど響くところは拙いんだが――あゝ焦心つちや駄目だな、支那といふ國は！（ダーク・チェンヂ）

9

光線は、正面奥の大河へ集中される。

河身は金色を帶びて、仄蒼い夏の夕靄のうちに、燦として遠く輝いてゐる。

無數の軍靴の音。

時折、士官の號令の聲が、水鳥の啼聲のやうに單調な跫音の連續をとぎる。

馬の嘶き。

薄暮の底を、ぎらぎらする軍隊の銃の尖端だけが見える。無限につづく。

遠くの砲聲――一門、二門、三門。いんいんと響く。

急速な號令。靴音、速くなる。砲車の轟き、小銃の小忙しい爆音半打ほど。――

舞臺一圓に白い煙が漲る。

聲。捕虜だ、捕虜だ！

（舞臺明るくなる。野營天幕の前。二人の兵卒、他の兵卒達に銃劍を突きつけられながら立つてゐる）

兵卒1。なんだ、君達か、脱走者は？

印刷工。俺達だよ。戰爭なんて、馬鹿々々しい！（銃をすてる）

苦力。してもいゝが、大體、何のためにこんなことしてるのか、考へると、つくづくもとの勞働の方がえゝやうな氣が起きるよ。

兵卒2。謀叛罪だぞ！

兵卒3。銃殺だね。――

兵卒1。兎も角、政治部委員に報告しろ！　俺達は二人を警戒してるから。

兵卒3。よし。（去る）

印刷工。暑いね、何しろ。……。

兵卒1。暑いさ、夏だもの。

苦力。それに、この蚊はどうだい？……

兵卒2。餘計なことをしやべるな。

印刷工。茶が一杯呑みたいね、かうたぎつたお茶をな！

苦力。それに熱いタオルで、きゆうと首のあたりが拭きたい奴よ。——

兵卒1。うるさいね。——まるで、君達は、この俺達にも同じことをせえと薦めてるやうなもんだ。

苦力。まあ、そんなことはないがね——ともかく、女つて奴も悪くはないからな。

兵卒2。馬鹿云ふな。軍規を紊だす奴だ！（毆ぐる）

苦力。痛いよ。よせ。人間だぜ、俺だつて！

兵卒2。人間か——君達は？

印刷工。人間か、は御恐れ入つたね。人間だからこそ、かうやつて夜中の行軍をやめたんだ。——あ——ア、何だか、妙に物を考へる晩だぜ。（兵卒3、武裝して政治部委員2を連れて來る）

兵卒3。この二人です。

政治部委員2。この二人か——よし、歩ゆめ！　道がすなよ。ついて來い！

（一同左へ退場）

舞臺明るくなる。

脱走兵の二人、政治部顧問の前に直立してゐる。

顧問。ふむ、さういふわけかね。——よし、わしがいいやうにしてやる。直ちに、疾病扁をして、後方部隊の病院車に送る。途中で脱走したりしてはいけないよ。こちらは、婦人委員一人をつけてやるのだが、婦人と侮つて、隙を狙つて逃げたりして、その上、各自の屬する總工會へ舞ひ戻つて、軍隊には必要のない共産黨の活動なんかしちやいけないぞ！　はつきりと云ひ渡して置く。——君達は、まだ、明確に、この北伐革命軍のイデオロギイを把握して居らんやうぢや。プロレタリアートの軍隊であればあるほど、軍律は嚴肅なものだ。何故、プロレタリアート自身で、この軍隊を組織したかといふに、それは、決して、一將校や、一地方軍團の榮達を計る爲ぢやないのだよ。それは、實に、このもがき苦しむで居る諸君の祖國を、諸君自身の手に戻そうが爲なのだ。その爲には軍隊といふ組織も當面の必要であり、又、それに呼應して立つ民衆の勞働運動も必要なのだ。いづれも、同じ戰線の一兵卒たることに變りはない。したが、一旦入營した以上は、軍務といふものが

ある。それは、總工會に、工會の鐵則があると同樣ぢや。どちらでも、自分の職分に適した方へ働けば、階級闘爭の戰士たることに變りはない、その方が有効だ、さういふ組織を持たねばならぬ……と、サ、かう考へてはよろしふない！　いいかな、わかつたか。早く病氣を癒して、戰線へ參列するやうにしないと不良！　決して脫走などするな。（天幕の陰にゐる婦人委員へ向つて）同志、この二人を、後方部隊の病院列車へ護送して下さい。

婦人委員。はッ！（敬禮、三人去る）

顧問。（電話機を取り上げ）あ、もしもし、將軍へ繼いでくれ。こつちは政治部だ。――將軍、目下御多忙ですか？　ちよつと急に御目にかかりたいことがあるのですがね。――よろしい、いや、參りませう。（受話機を架ける。立ち上がつて、ピストルをあらためて見る。終ると、自分で馬鹿々々しさにてれたやうに、大きい肩を搖ぶる。大股に歩るき出す）

11

總司令本部。左端。

いくつも黑衣によつて揭げられる天幕を潛つて、顧問は將軍の前に着席する。

將軍。何ぞ、急にお用ですか？

顧問。――いや、急、と云ふことはないが、ちよつと退屈したので、陣中の無駄談でも申上げたいと思つてね。（葉卷に火をつける）

（二人白つぽく笑ふ。從卒茶を汲んで來る）

將軍。（從卒に）わしの分はいつものとほり、白湯を持つて來てくれ。（從卒去る）――で、無聊のひまのお話といふのは？

顧問。將軍、貴方は、プロレタリアートを信じますか？

將軍。（ぎくつとして）勿論！

顧問。支那の急激なる革命も？

將軍。無論のこと！

（從卒白湯を運んで來て、退場）

顧問。わしは、必らずしも、貴方の仰有るやうには信じませんよ。……。

將軍。（激して）そ、そんな弱音を吹かれちや困りますね。長江まで一路驀進！　敵を滿洲へ追ひ遣れば、もう支那は我が政府の物です。――あとは、顧問、貴方の御意見に從つて、鞏固なる民衆の政

府を建てるまでですよ！（むやみに白湯を啜る）

顧問。あ――ア、貴方は偉らい。わしの考をほんとにお話しませうか？――支那に、プロレタリアートの革命が起きる前には、世界にもう一つど偉らい戰爭があるでせうよ。その前は駄目！

將軍。ど、どうしてですか？

顧問。それは、わしよりも、貴方お自身でようく考へてごらんになればわかる。――いや、閑なもんだから、こんなつまらん議論を戰線の情報に忙しい將軍に吹きかけるなんて、失禮しました。――ほんの、コムミュニストの例の屁理窟ですよ！（淋しい笑ひ）

將軍。（空な笑ひ）いや、面白い議論です！

顧問。今更、つまらん議論をしたと思ひますね。さようなら……。（去る）

（天幕の蔭から、ピストルを持った幕僚1と兵卒二人顔をあらはす。顧問、再び取つて返へす。幕僚と兵卒急いで引込む）

顧問。わしも、よほどどうかしてゐる。自分の葉卷の吸ひ差しをこんなところへ忘れるなんて！――どうも、失禮。（去る）

（將軍、立ち上がつて、兩手をポケットへ捻ぢ込みながら、機械的に歩るき廻はる。長いこと、煩悶してゐるこなし。稍あつて、大聲に叫ぶ）

將軍。誰か、歌曲の上手い奴を呼べ！

12

支那歌曲の嫋々とした音律につれて、農民の妻達畑で働いてゐる。婦人委員、その一人一人の背へ傳單を貼つて、影のやうに消え去る。

農民2の妻。ああ、暑いね。なんて、汗だろ！

その子供。おつ母、背中さ紙がくつついてるぜ。

農民3の妻。あれ、ほんとだ。

農民2の妻。わたしかい、あんたこそ紙を粘ばしつけてるだに。

農民4の妻。ほんとだ。

農民1の妻。そんなこと云ふあんたも！

子供。やアーい、みんな紙が貼つてあらア！

農民の妻達一同。あ、ほんとだア……（哄笑）

（一人づつ互の背中の文字を讀み合ふ。四人は輪になつて、最初の一人から聲を張り上げる）

農民2の妻。『ほんとに世の中に貧乏人のなくなる時代になる爲には――。』

農民3の妻。『村のお百姓衆が先づ眼を醒まさないといけない！』とさ。

農民4の妻。『それにはお百姓衆の女達が、男の力をあてにせずに、みんな集まつて、村の收穫のことや地代や小作料、税金などのことを相談しないと駄目です。』

農民1の妻。――『支那は、人口の大部分が農民です。だから、國の本はお百姓衆の働きに懸つてゐるわけで、ほかの働き人がどんなに都で何をしようと、お百姓がうんと云はなけりやほんとの事は出來ません。貧乏をやめる運動も、お百姓からはじまらないと駄目です。』

農民2の妻。『――農村を自治せよ。この言葉は、何を云ふのか？……』

（突然、三人の兵卒が駈けて來て、女達を驚かす。女達、背から傳單を毟り取られてゐる自分達を發見する）

農民1の妻。何をするんだな、お取さん方は？

兵卒1。これを貼つた婦人は何處へ行つたか？

農民2の妻。知るもんかい。

農民3の妻。誰が貼つたか、いつの間にか、わたしらの脊中にちやんとこれがつけてあつたんだよ。

兵卒2。こんな物讀んぢやいかん！　これを貼つた女は、惡るい女だ！

農民の妻達。へ――え。そんな惡たれめが、こんないい事を書くのかね？……

兵卒達。馬鹿ッ！（荒々しく土を蹴つて去る）

農民1の妻。せつかく讀みかけたのを、あれまあ、みんなひつたくつて行きあがつた。

（と、子供の背中を見る）おや、ここに一枚殘つてゐた。――さあ、みんな集まれ、して、どこで終つたつけな？……

（女達、女供の背中を取り圍んで首を鳩める）

13

進軍喇叭の響。

無數の砲車、馬蹄、靴音などの交錯。

白晝の平原を、北伐革命軍の軍團が横切つて行く。

その先頭に立つた晴天白日旗が、舞臺の中央まで進んで來た時、勞働者の一群が、都會の書割を携へながら、右端の方から、軍隊を歡迎すべく現はれる。手に手に青天白日旗を振り翳してゐる。遠近に、花火爆竹の音など。

勞働者の1。當市總工會を代表して、我々は、革命同志の軍隊を歡迎する！

幕僚の3。（劒を拔いて高らかに挨拶する）勞働者農民の保護の下に、我が軍は、茲に勇ましく貴市城內に行進する光榮を持つ！

（『萬歲！』の聲舞臺をゆるがす。軍隊、高く掲げられたる城門の書割の下を、續々と練り込む。——その行進中に、突然、一大爆音と共に、舞臺前面へ眞つ黑な幕が下りる。そして、次ぎの場景へと無數の罵音がつゞく。……）

14

外國人の宣教師、暗黑な舞臺から、胸の十字架だけを光らして躍り出る。

身體中に火のついたやうに、彼は獨りで右往左往する。

宣教師。爆彈だ！——おお、神樣、なんて恐ろしい！　平和を說く神の祭壇に、この眞つ黑なサタンの群の襲來は！

（蔭にて大聲で笑ふ聲）

宣教師。ああ、これこそ世の終りが來たのかも知れない！　大地は裂け、默示錄の豫言は、つひに、豚のやうな支那人のうごめくこの支那で實現されたのか！——祈らう！　祈禱をしよう！——天に在します我等の神よ……

15

外國人の紳商、卓の下敷きになりながら呻いてゐる。

紳商。畜生ッ！　支那人！　外道！——こ、このモルガン銀行の金庫よりも重い卓を、金目のかかつた俺の身體から退けてくれ！　おうーい！……誰もゐないか？　誰か居ないか？　畜生ッ！——誰か來ーい！　皆死んぢまつたか？

（蔭から暗黑をゆすぶる哄笑）

紳商。誰だ、笑つてるのは？——誰でもいい、金が欲しけりあ、ここへ來てこの卓を退けてくれ！　胴腹が、貴婦人の腰よりも細くなつた！　金が慾しけりあ助けてくれ！……

（政治部委員3と兵卒三人現はれる。屋外には無數の靴音）

政治部委員3。何だ、どうしました？

紳商。助けてくれい！　もう、腰から下は死にかかつてゐる。頭もそろそろしびれて來た。金はいくらでも上げるよ！

兵卒1。いくらくれるかね？

紳商。金に代へられない儂の生命だ、千弗出そう！

兵卒2。金に代られない生命なら、千や二千ぢあ問題にならないな。

兵卒3。金庫を出せ！　どうせ死んだと思へあ金庫なんざあ何でもあるまい！

政治部委員3。支那から絞り取つた富だ、外國人に保管さして置くのもつまらない。——それもよからう。

紳商。ぢや、ぎりぎりのところ、一萬弗出そう！

兵卒1。齒を喰ひしばりながら、まだ掛引きしてやがる。圖々しい奴だ。金庫を出せ！

紳商。ああ、苦るしい！　いや、ちつとも苦るしくない。馬鹿にしてあがる、金庫をやるぐらゐなら、死んだ方がいい！（兵卒3、この時右端へ廻り、奥から）

兵卒3。金庫はあつたぞ！

一同。あつたか？（三人惶しく右端へ駈け込む。紳商痛みを怺へながら暫く待つてゐる。誰もふたたび出て來ない）

紳商。おう——い！　誰もゐないか？　ああ、行きあがつた。金庫をさらつて行つちまつた。こんなことなら、最初から金庫をやるんだつた。……おう——い、俺は死ぬ、死ぬ……。

16

移動中の總司令本部。

外國人の軍人、しきりに爪立てしながら、將軍を見下して、威丈高に怒鳴り散らしてゐる。

軍人。——何故あつて、君は、部下の者を使嗾して我々外國人の生命を奪ひ、財産を破棄し、かかる敵對行動に出たのであるか？　さあ、はつきりと確答せい！　君の返答一つで、三哩向ふの軍艦はこの都會を、十分間で灰にしてしまふぞ！

將軍。いや、閣下、さう激昂なさつても問題は解決いたしません。そもそもの事の發端は——

軍人。何が、そもそもの——だい！　君は大體が狡猾でいかん！　軍人なら軍人らしくはつきりとも

のを言ひたまへ。それとも、支那には、ピストルを吊した、狐か狸でもが今流行してゐるとでも云ふのか！　言葉を濁さずに、はつきり云ひたまへ！　我々の間に提携された内約はどうするのだ！

將軍。（苛々して立ち上がり）共産黨です！　彼等です！――私と貴方がたとの提携を裂かうとして策動したのは、憎むべき彼等です！

軍人。それと、淫賣婦のやうに醜關係を持續してゐたのは誰か？

將軍。斷じて、私ではない！　よし、あつたとしても、それは一時の方便。もう私達は彼等と敵對關係にあるのでず！

軍人。ほざいたり、狐軍人！　然らば、この矛盾を何と解釋するの、――君達の先生に當る孫文は、聯俄容共を遺訓したぢやないか、それを君達は、今日も陣頭に掲げて、鬪ふ敵もない進軍のスローガンにしてゐるぢやないか！　恩師を罵倒されて口惜しいか？　口惜しけりあ、はつきりと彈丸を持つて返事をせい！（小間）

將軍。よろしい。ここ數日を出でずして、わしはこの北伐軍の國際地位が那邊にあるかを、サッパリとお目に懸けよう！　それまでは、お互ひのために、暫時平和を維持しませう！

機關銃の連續的な彈音。

空林を梳る烈風のやうな群衆の悲鳴。

舞臺の一半には、落ちかかつた天井が、黑衣の道具方によつて擡げられてゐる。その下を、兵卒達、勞働者及び農民の群が、追ひつ追はれつして走り廻つてゐる。

暫くして、舞臺空になる。

政治部顧問、その下を急ぎ足で通り拔けて退場する。

將軍とその幕僚達、事務的な歩調で通りかかる。

將軍。それで、顧問はどこへ行つたか解らんのか？

幕僚1。あらゆるホテルや工會事務所、外人邸宅などを手分けして搜しましたが、皆目その行衞が知れませぬ。

將軍。仕方がない、ぢや、見付け次第捕縛するといふことにして。――それで、共匪の巢窟は、大部分擧げてしまつたといふのかね？

幕僚2。たしかに、もう、今日といふ今日は、五・三十事件よりも、記念すべき革命記念日ありません。

將軍。(擽ぐつたさうに)と云ふ理由は？

幕僚2。中華民國に、完全なるデモクラシーの實驗のあつた日であるからであります！(蔭から、ヒステリックに女の笑ふ聲)

將軍。それ、まだ、共匪の殘黨がうろついてゐる！(一同ぎよつとしてピストルを構へる)

18

楊子江を下る筏の上。舞臺全體が、一つの大筏である。正面奥の大河の書割に、永遠に流れ流れる黄濁した水の動きが見える。底鈍い水聲。蘆のそよぎ。

インテリゲンツィアと婦人委員の二人、筏に坐つてさいぜんからの話をつづけてゐる。

インテリ。驚いたものですよ。あの革命を知らないのんきな人間もゐるんですからね。(右奥へ向つて聲を張り上げる)ねえ、船頭のお爺さん、お前さんは、一年この方の支那の騒動をちつとも知らんと云つたね？

聲。(奥から)あ、知らねえだよ。俺、この筏さ乘つてから、三年になるだからな！

婦人委員。(片手を繃帶で釣つてゐる)ほんとに、支那革命も、あこがれの長江まで來て、顧問ボローヂンの云つたことがやつとわかつたでせうよ！

——(幕)——

セムガ（鮭）

1

寒むい。

髯だらけなロシア人が、降參するやうに兩手を擧げて、丘のむかうへあらはれた。

つづいて、三十疋ほどの犬どもが、灰色な列をつくつて、海へ吠え立てた。

犬も、その主人公も、長い冬籠りから、相貌がよく似てゐた。

ロシア人は、鐵具を重く墜したやうに、犬どもを呶鳴りつけた。

百七十人の日本人は、一團になつて、寂寞とした土地へ、歩をすすめた。古腐つた一軒の小舍が、丘のわきにある。新しいゴム長が、ぎこちなく鳴つた。

丘のてつぺんへ來ると、百七十人のうちから、一番背の高い男が、二三歩前へ出た。この男は、太い樫の棒を突き、犬の毛皮の外套を着てゐた。彼は、片手を擧げて、

「ジイマ――ドロゴ・スパシェボー！」

といふやうな、異樣な言葉を叫んだ。ロシア語にちがひない。

百六十九人の日本人は、眼を睜つて、突然自分達の仲間から傑出したこの人物の行動に注意した。今まで「船頭」と呼んだ、のんきさうな外ツ齒の四十男であつた。

ロシア人は、そのロシア語を聽かなかつた。彼は言葉を忘れた人間のやうにむやみに笑つた。涙が見えるやうな笑ひであつた。次には、兩手を蟹のやうにひろげると、對手に組みついた。そして、又笑つた。組みつかれた方は、日本人らしく、横向きに苦笑すると、二人のまはりに吠え狂ふ犬どもを軟かな長靴で蹴る眞似をした。

「ロスケだな……？」

「喧嘩か――喧嘩ぢやあるめえ。」

「番人だよ――嬉れしがつてやがる。さうだらうよ、九ケ月も、向うの小舍に番をしてるんだから、な！」

あとから蹠いて行つた連中は、煙草くさい口で、囁き合つた。

と、ロシヤ人は、氣狂ひのやうに二三度腕を振り廻はして、何かを一同へ向つて告げた。それから

船頭が無言でポッケットへ押込んだ物を、外套の上から輕るく叩いて、こんな言葉で、彼れの手を握つた。

「ダ、ダ、ダ！　ド・スウェダーニア！　パイジョイエ・ペトロパウロスク」

そこで、もう一度、犬どもを叱ると、髯の中でにやりとして、出て來た方へ取つて返へした。枯草の平原のむかうに、骸骨のやうに曝れた、低い小舍がぽつつり立つてゐる。いつの間にか、犬どもも大地へ吸ひ込まれたやうに、その方へ姿を消してゐた。

百七十人の日本人は、しばらく無言で立つてゐた。――ロシア人の碧い眼と、身振りとが、幻覺のやうに、彼等の頭腦に刻まれた。ダ、ダ、ダ……一體、彼は、何を話したのだらう？

そこに、妙な氣持のとぎれが生じた。

この土地には、ひとりでに、人間を默らせる何かがあるにちがひない。悲しみでもない。笑ひでもない。それとて、絶望でもない。さういふ人間の營む心理活動を、まだはつきりと當人さへわからぬうちに吸ひ取つて、何處かへ運んで行つてしまふ、重力のない壓迫のやうなものだ。それは、生きてゐて、同時に、死を味はつてゐるやうな氣持――錯覺である。

「――ここが、ロシアかね？」

一人の男が、先刻から口をあけ放つてゐるやうな聲で云つた。

空は、鈍い双物のやうに光つてゐた。四邊には、白々とした、空つぽな土地が、むやみに擴がつてゐた。よくもこんなに平らに擴がつてゐるもんだ、と思はせるほど、無限の平地が續いた。その上に木片や、枯れ草や、曝れた丸太棒などが、洪水のあとのやうに、淋しく光つた。土地の涯に山脈があつた。山々の上には、冴えた氷の塊がしがみついてゐる。それが、非常に遠いやうでも、亦、わりに近いやうでもあつた。平原のどこから山脈になるのかがはつきりしないからだ。このどこまでも擴がつてゐる恐ろしい土地の氾濫を、二つの單調に動くものが堰き留めてゐた。一つは黑い海で、その上には、百七十人をここへ運んで來た第三函館丸が、盥の中のボートのやうに泛んでゐた。渚には、磯舟や、まだ水に漬からぬ川崎船などが、ごたごた列んでゐる。もう一つのものは、北と南とに彎曲した海岸線を押包んでゐる、冷めたそうな濃霧であつた。この濃霧は、氷よりも乾き、砂片よりも白く、空漠とした厚みをもつて、それ以外の地域を人間に見せまいとして地平をふさいでゐるのだ。そして、この限られた空間には、木も、青い物も、物音も、時間も、生命ですらも、すつかり根絶やしに逢つたやうな、深い、冷酷で殘忍な沈默の層が漲つてゐた。

「ここは、露領カムチャッカ、と云ふのさ！」

しばらく經つてから、思ひ出したやうに、一人の老人が、誰かの言葉を訂正した。惧れに震へたやうな聲であつた。

それにつゞいて——

「こんな寒いとこたア思はなかつたが」

「鮭を取る會社は、何處にあるのかね？」

「今夜は何處へ寢るんだね、一體？」

「何時頃かな、今？——ここにア太陽さまなんてものアないのか？」

「これで、一體全體、どこから魚ア捕るんですかね？」

などと、各自が、遠い記憶から探ぐり出すやうに話しはじめた。だが、その言葉のいづれもは、極北の單純な自然に對する原始的な疑惑であるかのやうに、誰によつても答へられない質問に終つてゐた。

「ほおう——ッ！」

突然、誰か、剽輕な男が、山の方を向いて、口に兩手をあてがひながら、長く聲を曳いた。

「さア、みんな、荷物を小舍へ入れて、列を組むんだ！　列だ、列を！」

船頭は、反射的にかう叫んで、砂の中へ樫の棒をぐんと突立てた。遠くの方のこだまの音が、彼れの鋭げ鋭げした命令で、ぎざぎざに截られてしまつた。

この男の樫の棒は、だてや嚇しに地上に突立てられたものではなかつた。何となれば豫めの約束でもあつたかのやうに、彼れの憤つた動作の結果、そこに、百六十九人の間から、六人の「小頭」が、忽然扮裝を脱いだ役者のやうに、人達の前に出現したから。——そして、即座にその一人は、副船頭、他は人夫廻しといふ名で呼ばれた。これら七人の「幹部」達は、ほかの誰もが氣づかないうちに、急に殘忍な表情を顏に出して、軍隊の拂ひ下げに着膨れて、家鴨のやうにまごまごしてゐる連中を、片つぱしから叱り飛ばすと、三つの大まかな組に分離させてゐた。

「これから、各自の荷物を置く。組がきまつたら一と組は、船から、荷役だ！　片方は小屋掛けに從事する。もう一と組は、砂へ埋めてある釜やボイラーを掘り出すんだ！——いいかね、みんな、今日の働き振りで、この夏一杯の成績もわかると云ふもんだ。それが、みなさんの賞與に關係することも無論の話だが。」

嘲けるやうにかう云つた船頭は、寒むそうに露出してゐる外ツ齒を、動物が牙を隱くすやうに、陰險に上唇で包んで、百六十三人の船から上陸つたばかりの勞働者を、じろりと一と亘り睨め廻はし

た。

かうして、カムチャッカ第一日の勞働がはじまる——。

2

百六十三人は、大きい地滑べりにあわを食つた村のやうに働いた。

十二晝夜も鹽叺の上へ積み込まれて、しけと濃霧の下に、窖の馬鈴薯のやうな生活をして來た彼等が、暗黑と粗食と嘔吐と炭酸ガスと惡臭とから一歩外へ出ると、もう慈悲も容赦もない「契約」がピストルや棍棒を持つた幹部の形で、息もつかせぬ激勞の中へ、彼等を擲き込むのであつた。

冬の間かこつてあつた六艘の川崎船が、砂や古蓆の下から掘り起こされた。本船のハッチ・カヴァは撥ねのけられて、ウィンチが惡魔のやうに高笑つた。水夫達の罵倒の下で、動搖する甲板の上に、無數の箱や俵や叺やズックの袋が、俄か仕立の、へろへろの沖仲仕の頭上にうづ高く盛り上げられた。

滿潮で、本船は鯨のやうに、人間を彈き返へす。傳馬は、子供が醉つたやうにくらくらする。波濤は、すべての物を顚倒させながら、高いところの物を急に谷底へ蹴墜す。無力な、泣くやうな、死に

もの狂ひな漁夫達の掛聲だけが、海の上に反響する。たまに、口惜しそうに、せつぱつまつた聲で笑ふものもある。

「うわツ、滑りやがつたッ！」

水音といつしよに、鹽叺が白い氣泡を散らして、見る見る蒼黝い水面に閉ぢ籠められてしまふ。叺の下に、田中といふ秋田ものがゐた筈だ。叺が沈みきつた頃に、海豹のやうに、顏を上へ向けた人間が、だんだん大きく海の表面へ向つて手足をもがいて來るのが見えた。引上げる。濱で古蓆を擦やした火にやつと正氣づくと、さんざんに船頭に毒づかれる。田中は、ゴム長を逆さにしながら、それでも、敗け惜みを云ふ。

「あんな冷めてえ水さ今まで一度だつて這入つたことはねえしは。體アしびれるからは。」

米俵といつしよに、どしんどしんと人間がぶつ倒れる。四十男が、い、い、い、くぞう蟹のやうな髯を生やしながら、俵の下でぼろぼろと涙をこぼしてゐる。

「迚も、體がつづかねえや…」

叺を下へ置いた二人の男が、水つぽい眼をして丘の下でお互を慰み合ふ。

「地獄みてえだよ」

そこへ三人目が、水母のやうに、足から先きに壞れて來る。

「荷役の時が大切だよ。今日なまける奴ア、ちやんと親方に睨まれるぜ」

親切ごかしに、人夫廻しの老人が、棒の先きで砂を敲きながら叱りつける。

「親方、何時ですかね？」

通りすがりの船頭を摑まへて、かう訊くものがある。腕時計の手前、時間を敎へぬわけにも行かずさうかと云つて、高聲で告げるわけにも行かぬ彼は、咎めるやうに對手を見据ゑたのち、低い呻り聲を擧げながら、右の腕首をちらと捲くつた。

「七時――ほう！　晩の七時だ！」

その男の驚きを、船頭は威嚇するやうに、あとから追ひ立てる。

「貴樣、そのストーヴは小舍へ運ぶんだぞ！」

午後の七時で、うす曇りながら、太陽の見當は、內地の三四時頃の場所にあつた。山脈の氷とその白つぽい圓光が、いつしよになるまでには、五六尺の距離があるのだ。

「おい、もう晩の七時だよ！」

「なに、七時だ？」

「七時よ、夜の七時さ！　道理で腹が減つたと思つた」

この囁きが、濱から傳馬へ、そこから逆に渚へ、丘の上へ、小舍の中までも、いつの間にかひろまつてゐた。

小舍の古蓆や板の間を掃除してゐた三人の若い女達は、かはるがはる、入口の蓆の間から首を出して、夜にならない午後七時の氣象を觀測した。だらりと垂れた、入口の蓆の前で、船から來る食料品を選り分けてゐた。ほかの五人の女達は、出稼ぎに慣れた女漁夫なので、若い女を嚇すやうに、聽こえよがしにぺちやついた。

「あゝここは夜ちうものはねえ國だよ」

「寢るのは、ほんの一刻だからな」

「ここぢや、一年に二つ年齡を取ることさ！」

一方、丘の上では、不思議な採掘が行はれてゐた。

羅紗の外套にくるまつた副船頭は、體操の敎員みたいに小舍の西隅の柱から歩み出しながら、

「ひい、ふう、みい、よう――」

と口の中で呟き、膝を直角に折つて、砂の上を南へ進んで行つた。

一團の勞働者が、シャベルや鍬を持つて、彼れのあとからぞろぞろ蹠いて行く。

「よし、二十五だ。ここを掘れ！」

この歩行の數によつて、十五人ほどの腕が、がむしやらに大地に對して活動を開始する。しばらく土層を搖がす地響と、苦るしそうな呼吸と、無限に滴る汗とがある。

「なに、無い？——そんな筈ア無いがな。よし、そんぢや、ここを掘れ！」

副船頭の記憶が正確であつたとすれば、たしかに釜やボイラーが、一年間にもう五歩ほど南へ移つて行つたものだらう。

「釜が出ねえと、みんなめしが食へねえぞ！」

掘り方が疲れると、彼はかう原始的な食慾を唆る。そこで、シャベルが鏡のやうに光るまで、砂を削つては掘り、削つては掘り出す。——ガチリ！　釜ではない。罐詰部の大釜だ！

再び、副船頭は、小舎を基點として、稍西南に角度を保つて、膝を折りながら、

「ひい、ふう、みい……」を繰返へした。

そして、その刹那、午後七時說が、誰の耳からともなく、一同の中に傳はつた。

「七時だ？」

聞咎がめるやうに、細い眼を眼鏡の下から擧げた。肥つた青年は、自分の手首に食ひ込んでゐる時計をじつと見返へした。

「嘘つけ。八時十五分前だよ。こりや、先刻、針を船で合はせたんだ、まちがひはない」

かうきつぱり云ふと、手にしたシャベルを、孔の中へ捨てたまま、彼は立ちあがつた。

「おい、晩の八時か？」

砂との格鬪に夢中になつてゐたほかのものも、一齊に顏を擧げた。時間について、勞働者は敏感だ。

「うむ、八時十五分前だ」

青年は、鳥打の廂を、三日月形の額の上へ撥ねかへして、永久に足踏みしてゐる副船頭の方へ、義憤を感じたやうに、がつがつ歩るいて行つた。

「馬鹿々々しいツ、おいらア孔掘りにカムチャッカくんだりまで來たんぢやねえや！」

もう一人の頬冠りが鍬をずでんと土の上へ投り出した。鍬は、土を吐きながら宙返へつた。

「夜の八時まで働かせる奴があるもんか！」

二人が三人、四人になつた。もう仕事終ひかと思つて、手拭で土をはたきながら、にたにたして這

ひあがる男もあつた。

副船頭は、小舎の南隅の柱から、十二歩目で、青年によつて、その軍隊式の歩調を遮られた。

「親方、もう八時なんですが――腹ア減つてしようがありませんよ。」

しかし、彼は自信を持つもののやうに歩みつづけた。

「十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三――」

そこで、彼は手にした棒を、心持、顔を赧らめながら砂へ突刺すと、はじめて、無斷で勞役を放擲した、坊ちやん面の鳥打へ振り向いた。

「こいつ、書生ツぽうめ！」

勞働者上りの本能から、彼は眼鏡といふものが殊の外嫌ひであつた。

「八時がどうしたい？」

彼は唾を飛ばすやうに言葉を切つた。彼れの軍隊式に歩るいた十歩の距離を、青年は刻み足で近づいた。

「無茶ぢやありませんか！　内地だつて、八時になりア晩めしぐらゐは食はせまさアね。僕達ア腹が減つて、孔どころぢやないんですよ！」

鳥打は、もう再び時計の存在を對手に知らせながら、前よりはすこし和かに切り出した。副船頭は小さな瘤のある、圓々とした脂鼻に、肉慾的なくびれを深めて笑つた。

「――だからよ、俺あ早く釜を掘らねえと、めしにありつけないと、先刻から云つてるでねえか。」

「しかし、ですね」青年は、自分のまはりにうつそり聚つて來てゐる仲間を意識した。その意識は、彼をもう一歩だけ對手に肉迫させた。

「釜を掘るには力が要るでせう、そこで、めしを食はなけや力が出ないといふ理窟になりませんか。それに時間が時間ですよ。いくら北極だからつて、時計を一時間も遲らして置いて、勞働時間を胡麻化すのは非道いや。――何とかなりませんか、例へばですね、船から握り飯を取りよせるとか、」

副船頭は、この小肥りに肥つた若い者の、どこからさういふ理窟が出て來るのかを訝かるやうに、笑ひつづけながら、その頭から爪先までをじろじろ眺めた。彼れの奇妙な笑ひは、あまり永いこと持續されてゐるので、今は、すこし無氣味に、動物的にさへ見え出した。周圍の勞働者達は、あきらかに、窮地に追ひ込められた親方を見た。

青年は、すこし昂ぶつた。彼は鼻先で、せせら笑ひながら、もう一度、腕時計に眼を遣つた。

が、彼れの冷笑と、對手の痴呆的な笑ひの延長とが結びついたときに、副船頭は窮地から猛獸のや

うに彈ね返へつてゐた。

「待て、野郎、ふざけんなッ！「例へば」だつて！　畜生ッ、ここで指圖するんなア誰の役だと思つてけつかる！」

この奥州訛の勝つた呶鳴り聲は、空氣枕を石疊の上で毆ぐつたやうな響と、仔犬そつくりな悲鳴とを伴つて、濱の下までも、不穩な餘韻を曳いた。

青年の眼鏡は、足元に二つに折れて、その持主は胃痙攣にかかつたやうに、悶絶する手で腹腔を抱へた。

「この上生意氣をぬかしたら、ぶち殺してすまふぞ！」

副船頭は、圓るい鼻から荒い息を吐いた。

「どうした、青木――？」

突然、五六人の人間が、吃驚して飛び退いた。犬の毛皮の外套が、いつの間にか、群集の中に立つてゐたからである。

「や、奥野さん、見てゐしたか？……何、この書生つぽがね、いやに口幅つてえことを拔かしやがるんで、すこしばかり狎らしてゐたところなんで。」

船頭は、かすかに頷いて見せた。

「これか？」

彼は、臂を伸ばして、青年の襟を掴むと、乾いた外ッ齒を舌で濕した。

「全く俺らを舐めてかゝつてやアからね、えげ癖になる！」

「さうか――見せ示めだ、やッちめえ！」

船頭は、凛とした聲で云つて、鳥打帽を突放した。副船頭は、それを荷物のやうに片手で支へた。

「よがすとも！」

先づ青年の鳥打が飛んだ。次には、體軀を三つに折つた彼が、どさりと倒れて、したたかに頭蓋骨を大地へ撲つた。倒れたと同時に、熊のやうな青木の前半身が、それに向つて突貫してゐて、左右から猛然と動き出した鐵桿とも思はれる二本の腕は、殆ど無抵抗な對手の體に、べきべきと骨を鳴らせた。

「喧嘩だ、喧嘩だ！」

殺氣立つて渚から、砂地から、小舍の方から押寄せた群集は、油斷なくその場を警戒してゐる船頭のけはひに怖氣がついて、仲へ割込まうともせずに、他人の肩越しに、或ひは脚の間から、木偶人形

同然の青年が、食肉獣のやうな壯漢に、血みどろな玩具にされるのを、わいわい云つてるより外はなかつた。

「もう、いい、青木、それで澤山だ。その邊へ投つときや、獨りで息を吹き返へすよ。さア、みんな仕事に就いた！　早くしねえと、何時まで經つても夕飯にならねえぞ！」

かう冷然と云ひ殘した船頭は、靭かな靴音と共に、丘を急ぎ足で降りた。

「これが、この漁場の掟なんだぞ。惡るい事をする奴は、みんなこんだから――は。」

青木は、見てならぬ殘忍なものを見たやうな群集に對して、勝ち誇つた赭ら顏を向けた。

嫌な思ひをした人達は、疲れた足を曳ずつて、ぞろぞろと滑るやうに砂地の傾斜を下つた。

「非道い！」

「あの田舍者、卑怯だなア！」

跛を曳いたり、體軀の恣を拔かれたやうに猫背になつたりして行く荷役の連中は、海岸へ辿りつくと、ぺッと砂の上へ唾を吐いた。新しく傭はれた漁夫達はしばらく蒼い顏をして、深く考へ込んでゐた。

四五人の男と女とだけが、見るに見かねて、氣絕してゐる青年へ、小舍のバケツの水を掛けてやつた。

そこへ、もう一度副船頭が、づかづかと刻み足に近づいた。

驚いて逃げる小舍の前の人だかりを尻目にして、彼は、くたりとなつてゐる青年の腕から、貝殼をひッ剝ぐやうに、腕時計を毟り取ると、片脚を擧げて、それを二度に踏み碎いた。そして、魯鈍な微笑を含んで、それを耳へあてがつて見て、はじめて滿足したのか、毀はれた機械を、正體のない持主の前へ、ぽいと投り出して行つた。

3

荷役は、四日間續行された。

四日とは云ふが、內地では、八日と云ふべきであらう。

この不思議な大陸の一角では、朝は午前二――三時から始まり、晝は午後十一時頃に終つた。勞働は、時間では計量されずに、曆の日數だけでかぞへられた。

船艙から、巨人のやうな腕でウィンチが摑み出すものを、手あたり次第に、傳馬で運んでは濱へ捨て、捨ててはまた漕ぎ戻つてゐるうちに、漁夫達は、丸い、四角な、長方形な、重い、糯れた、各種の

物體のけじめが見えなくなつて、ただもう、貪婪な黑い船腹を空らにしてしまはねばならぬやうな狂人じみた作業の自然狀態に擲き込まれ、五日目の晝、汽船が、聞き覺えのある偏平つたい汽笛を殘して、南の方へ歸つたあとには、こんなにも自分達はいろいろの貨物を運んだのかしら、と思つてゝスタンダード石油會社」の箱や、味噌樽、醬油樽、漬物樽、米俵の山や、累々とした鹽叺や、無數の空罐函や、蓆の丘などを、舌を卷いて眺めるのであつた。

それらは、不慣れな勞働者があわてて築造したバリケードのやうに、彎曲した海岸線を遠くまで緣取つた。

百七十人の日本人は、彼等を一と漁期だけ、北極の一隅に殘して行く第三函館丸に對して、愛情を表示しなかつたらうか！……

たしかに、汽船は、彼等全部を日本から積んで來て、日本に關する彼等の生活、思ひ出、空想、聯絡のすべてを運んで、再び日本へ去らうとするのだ。汽船がゐなくなると、彼等は全く外國に在る外國人になつてしまふ。それが歸航した瞬間から、彼等の生活は、どんな困難にむかつても、自分達だけの力で切り開いて行かねばならない。

單純な彼等は、汽船といふものゝ持つ女性的なセンチメンタリズムに誘惑された。彼等は汚い、汗と埃にまみれた手拭を振つて、泣いた。十分に、百七十人が何をするために、この犬の穴のやうな隅ツこへ流されて來たかを知つてゐる、汽船の勞働者達も、デッキへ出揃つて高く手巾を揮つた。かういふ刹那にこそ、勞働者達は、誰に敎はるでもない自然發生的な友愛と階級意識を發揮する！

荷役が終るまでには、もう一組の勞働者達が、幹部部屋、倉庫、飯場、罐詰工場などの小舍掛けに忙殺された。

第一に出來あがつたのは、飯場である。これは、主として、炊事係の三人の老人の設計によつて建てられた。單純な丸太の組合せに、蓆を圍ひ、その蓆の壁へ木造りの高い臺を兩側へ凭げたものが食堂で、めしはすべて臺の上へ釘附けにした長方形の八つぼかりの箱へ盛り入れられた。この原始的な食堂の入口に、太い鐵枠に支へられた釜と汁鍋とが、この飯場のただ二つの厨房具を代表して控へた。食堂と稱せられる蓆と棒との奥は、食料品の倉庫になつてゐて、味噌樽や澤庵の樽の類が、暗闇から殺人的な臭氣を送つた。

すべて、「倉庫」とか、「飯場」とか、「機關部屋」とか、「罐詰工場」とか、頗る大袈裟な、まるで同じカムチヤツカでも、オゼルナヤやウス・カム邊の日魯の工場や、ロシア國營工場のエスカレーターやアイヤン・チンクなどを使つて、高い煙筒から北極が曇るほど煙と能率とを擧げてゐる大工場のや

うな術語で呼ばれてはゐるが、その實、この個人經營の漁場では、すべては遍在的な丸太と蓆とをもつて築造され、必要も絶對性を帶びた場合でなければ、亞鉛は使はれない。

これらの小舍も、次第に、丸太のコンクリートと、蓆のセメントを集成して、一棟の土蜘蛛式建築を殖やすごとに、工場らしい「名目」だけを增して行つた。

機關部屋が出來あがる。

罐詰工場は、大きい鐵蓋のついた釜を据ゑたあとで、その上へ蓆の屋根を置き、三方を蓆で圍ひ、入口には、同じ蓆をだらりと下げればよかつた。

幹部部屋——これだけは、特に「事務所」と呼ばれたほどあつて、四邊の封建主義に對立した近代的裝置が施されてあつた。同じ蓆張りでも、この方には、しつかりした昨年からの骸骨が殘つてゐてそれに壁は窓際まで高く土盛をし、窓には文化的なガラスといふ贅澤品さへ嵌まつてゐるのだ。ここには、七人の幹部が寢起きするばかりでなく、軍手（軍隊拂下げの手套）や、煙草、股引、靴などの必需品の、煙草を除いては原價の幾パーセントかの高價で取引されるカウンター兼用のテーブルがあり、壁には極東全圖、汽船の寫眞、カレンダー、人名表などが、頗る非事務的な手で貼りこくられてあつた。

この幹部部屋を、最も幹部部屋らしく見せたものとなると、何を措いても、物々しく正面の壁に吊るされた三挺のピストルと、二挺のモーゼル銃を擧げねばならない。これらは、朝晩の濃霧と、鹽分の多い零圍氣にも拘らず、裝飾的に磨き上げられてあつて、それらを、單に外見だけの裝飾品に終らしめないために、いつも實彈が籠めてあつた。

粗雜な木製の「馬」と、寢床と、行李類と、二册の帳簿と——それだけが、幹部のゐない場合の幹部部屋を構成してゐた。

この行政執行機關の本部は、濱一般を三角形に見た絶頂點に在つて、飯場、番屋、機關部屋、罐詰工場、井戸、倉庫などの營造物へ、おのおの最近距離によつて達する通路を持ち、窓からは居ながらにして、ガラスと云ふ物の特質から、一目でベーリング海の沖模樣が展望された。ここだけは、ほかの砂地とちがつて、ツンドラ地帶を初り開いた、しつかとした地盤に立つてゐた。

かうして、大都會の失業者や、寒い日蔭の縣の貧農を、大急ぎで掻き聚めたところの彼等百七十人が、ものの一週間も働いてゐるうちに、ともかく水産業の工場町に近い部落を、殆ど古井戸と曝れた棒杭の列しかなかつた砂濱の上に建設したことは驚くべき事實ではなかつたか！

それは、たしかに、荒削りで、急場凌ぎの、間に合はせだけの建物群であつたにはちがひない。し

かし、この妙な部落からは、いつも炊事の青い煙が揚がり、罐詰工場の背後には八人の女達の赤い腰巻が乾してあり、鍼力罐からは飴色の重油や、五色の紋様を散らす石油が滴り、通路通路には靴の跡にまじつてバットの吸殻があり、殘飯と尿臭との雰圍氣にも、海の勞働者らしい、肺量の强さうな笑ひ聲が聞えたではないか！　それから、又、めし刻の茶碗や器物の音、我を爭ふ海めき、仲の良い唾み合ひ！

事務所の棟には、汽船が着いたら、いつでも合圖の出來るように、フラッグ・ポストさへ樹てられてある！

もし、一週間にして、

「又やつて來るよ。……」

と云つて去つた、髯だらけなロシヤ人が犬の群と再びここへやつて來たとすれば、彼は、たしかに日本人といふ國民の安價な模造工場の即製にかけては、世界一の手腕を持つてゐる、といふ擽ぐつたいお世辭を振り撒いたにちがひなからう。この漁場は、どこか、曲馬團の天幕に似てゐた！

これまでの第一次の準備期間は、迅速に、第二の整理期によつて代はられた。

この第二期に於て、百七十人は、それまでの「成績」に應じて、それぞれの等級と部署とを定められた。

七人の幹部は、動かぬところであつたが、機關部屋と筋子部屋と飯場は、特殊な技能の要求されるところから、機關部二人、筋子部屋三人、飯場の炊事番の老人三人にもう二人の助手が加はつた。そのほか、男子と隔離されて罐詰工場へ寢泊りしてゐた女漁夫達を除いて百四十五人から、二十人は雜夫として、漁業に直接從事しない、一段と賃銀の安い組に廻はされて、あらゆる急場の走り使ひや雜用を辨ぜしめられた。殘餘の百二十五人の頭には、一隊四十人ほどの編成で、漁夫として、晝夜三回交替の三部組織が割りあてられた。

その編成が定まると、漁夫のうちの老人組は、濱へ出て網繕ひに廻はされた。

中年組は、まだすつかりは出來上らない小舍々々の建て增し、若い者達は一と山百二十叺づつ積む鹽の配置や、倉庫の整理などに使はれた。

これらの縱斷的な人員の組合せに、この個人の營利會社にとつて人間の勞働力を搾取して行く上に最も都合のよい役割を果したのは、各部に必ず舊くからの定期契約勞働者を編入して置く牽制策であつた。

新しく募集した漁夫達の間に、舊くからこの漁場で、夏場を稼いだ漁夫達は、しつかと楔のやうに

食ひ込んでゐて、いつも、彼等の不平をなだめ、事件の發生を未然に防ぎ、時には傭主側のためのスパイの役をも演ずるのである。かういふ故參勞働者は、大概、寒い『白米の食へぬ』村の貧農の、會社からの計略的な前貸金に釣られて雇傭關係を結び、それがつい度重なつて、毎年の定傭ひにすると云つたものが多く、一日一人當八合の白米を、この漁場でやつてゐるやうに、日に五回に食ふために、二十時間の激しい勞働を、一時間八錢足らずの賃銀で厭はない――といふ、愚鈍な殉教者、白米だけを悦ぶ馬鹿な神樣なのである。

絶對窮乏の背景から抽出されて、北へ、沖へ、カムチャッカへと、自分の勞働力を捨賣りに移行する、かういふ勞働者は、無智と、利己心と、迷信とで、いつの間にか、傭主側の利害と自分の利害とに必要以上の一致點を見出し、會社や資本家のために、頼まれもせぬ忠節振りを發揮する、隱密的人物となつてゐる。一日五回の食事を給與するといふ慈善的な名目で、五回の食事を取らねばならぬほど長時間の勞働を「日割」で强制する資本家にとつては、かういふ義勇兵は、願つてもない幸ひであり、襤褸にくるまつた「金」なのである。彼等は、年一年と、げつそり精力を消耗して行く傍ら、資本家の大きい算盤から見れば、殆ど顯微鏡的な昇給をゆるされる。

百七十人のうちにも、かういふ古株の漁夫は百人からの過半數を占めてゐた。そこで、この蕭張りの部屋は、傭主側にとつては、多少の摩擦損を見越しても、安全な、能率的の善い漁場であつた――が、問題は、いつも資本家側が、勞働者といふものに動きも進歩も知識慾もないものだと、機械視してかかることから起こる。

この漁場にも、意外な事から、資本と勞働との對立が、百七十人の頭にはつきりと意識されるやうになつた時が來た。

きつかけは、頗る地方色に富んでゐた。

それは、誰かが、ここへ來て、はじめてオーロラといふものを發見した夜から起つた。

4

犬が吠えた。

北極の平原を響いて來る犬の聲には、それの響いて來るだけの、荒寥とした廣さを思はせる、無限の淋しさがある。

最初の一疋の悲嘆が、二疋、三疋の共鳴から、次第に數を增して、夜を隔てながら、數十疋の慟哭の合唱にまで移る間に、勞働者はさまざまなことを考へる。

彼等は、投げ出した脚を抱き締める。或る者は、しみじみと、肉刺だらけの自分の掌を眺める。ストーヴのまはりの猥褻な雑談から遠ざかる者もある。又、二三人は、靜かに考へるために、番屋を脱け出す。彼等は、有り剩るほど考へることを持つてゐる。しかし、暇がないのだ。

「なんだ、ありや？――」

かうして、番屋を出た一人が、眞北を指して、同僚に訊ねた。

「探海燈かね？」

もう一人が暗示する。

「あれか――ありや、北極光さ！」

土地に慣れた者が、説明する。

「あれが、オーロラといふのかね？――凄いもんだねえ。」

「どうだい、あの山を見ろよ！」

カムチャッカ半島の脊髓である、連山の一つが、光の中に、圓錐形の頭を擡げてゐる。それは、山といふべく餘りにも青く、透明で、水際立つて地平線から泛び出してゐる。白く熱した熔鑛爐の中で不滅の水晶が燃えてゐるやうだ。

その山嶺を中心にして、數十條の照空燈を天心へ向けて放射したやうな、無色に近い、まつ直な光茫が、北の空を一圓に晶るくしてゐる。じつと見てゐると、客の無い大きな何かのホールに、かんかんと灯をともしてゐるやうで、妙に不安な、虚無的な氣持に撲たれる。

靜かな、太古からの沈默に押ひしがれた地平線には、動くもの一つなくて、ただ、しきりに犬の遠吠えが聞える。

「あれが、つまり、いつも照つてるお太陽さまなんだなア……」

「――行こーか、歸へろーか、

オロラの下アに。……」

一人が、嗄れたテナーを鼻聲で胡麻化す。それ以上は知らぬらしく、すぐ默つてしまふ。それほどこの皎々とした、無慈悲な、自然の魔術には、カフエ情緒と非妥協的な何かがあるのだ。

誰かが、思ひ出したやうに、番屋へ走つて行つて、仲間を呼んで來た。

一と塊りの群集が番屋からぞめき出て、煙草の火が、褞袍や軍艦羅紗のもじりの間に閃めく。どの顏も、どの顏も、あんごりと口を開いて、蒼白い、非現實的な四邊の夜氣に、醜い魚族のやうに見えた。

短かい讃嘆の辭があつて、それが止むと、深い吐息のあとに、深酷な靜けさが一同の上に横はる。——極度に雄大な物に押潰された刹那、人間は、手足をもがく暇もないのだ。彼等は、默りつづけてあつけなく飯場の横からもとへ歸へりかける。

「おお、寒む！ヤッパリ火の側がいいや。」

「明日は又早いぞ！」

異樣なオーロラの光は、彼等にとつて何のつながりも、何の聯想もない、親しみ難いものであつた。鼾と、齒軋りと、寢言と、石炭ガスとの人間的な溫みを求めて、彼等は席の下アから、ぞろぞろと番屋の中へ戻る。

その時である。

突然、ばたばたと彼等の歸つたと反對の方から足音がして、一人の男が小舍へ這入りかけた漁夫へ呼びかけた。

「もし、もし、ここは日本人漁場ですか？——」

振り返つた漁夫はぎくりとして立停まつた。全く見も知らぬ人間である。ロシア人の着るルパシカを着て、ひどく息を喘ましてゐる。

「誰だね？」

「わ、私朝鮮人です。——今遁げて來たのです。ロシヤ人の漁場働く、非道い目に會ひました。助けて下さい。ここは日本人漁場でせう？」

「えツ、鮮人だつて？」

もう一人の漁夫が近づいて、入口の席を揭げた。三分蕊のランプから、黃ばむだ、ほそぼそとした光が流れて、陽に燒けた、土器色をした、その男のやや窪みを帶びた額に、小深かい陰影を拵へた。

「尹——といふものです。別に怪しいものでありません。」

朝鮮人尹は、寒さうに唇を鳴らした。

「まあ、這入るさ。そこにゐたつて、凍えるだけだ。」

彼等の一人が、大きく手を振つた。

「かういふのは、どうするのかな？」

最初に尹に呼び掛けられた男は、誰へともなく訊ねた。

「船頭さんに相談するんだな・・・」

奥から欠伸まじりで、太い聲が答へた。

朝鮮人尹は、怖づ怖づストーヴの前まで進んだ。

小柄な、痩せこけて、空腹そうな、如何にも、北國の夜から飛び込みそうな胡散な青年であつた。長い道を、海岸に沿つて逃げて來たものらしく、ヅボンの處々に潮を浴びたのが目についた。コール天の、禿つちよろの、耳かくしのある帽子を片手に持つたきりで、ほかには何一つ携帶品とてない。

しばらく、入口の側の寢床から、いろいろな顏が起きあがつて、じろじろストーヴの方を覗いた。一應の檢査が濟むと、それらの顏は懶さそうに、安物の蒲團の蔭に沈んでしまふ。

凄さまじい鼾を搔いて、奥の方では眠つてゐる者がある。もう一つのランプが、その人達の寢像を深く畝つた畑のやうに、ぼんやりと糊かしてゐる。夜具の間からはみ出た、ゴム長の爪先が、鈍い光でランプに反照してゐる。早番の者は、着のみ着のまゝに、靴穿きで眠るんだ。

ごく少數の人達だけが、尹といつしよにストーヴを圍んでゐた。朝鮮人は、珍らしかつた。

「船頭は、起きてこないぜ。怪しいもんでなけりや、明日會ふてさ。――困つたな、蒲團がないんだが。」

幹部部屋へ行つた者が、鼻の先きをまつ赤にして歸つて來た。

尹は、硬くなつた。

「よろしいです。私はここへ眠ります。どうぞ關はんで下さい。昨夜もツンドラの上で寢たんです。」

「よし、蓆を一枚持つて來てやらあ。――もう石炭はねえのか？飲場の爺、、、けちな野郎だなア。――」

誰かが、かう云つて、倉庫の方へすたすたと出て行つた。尹は、よほど疲れたらしく、周圍の者に何か訊ねられるごとに、鳥のやうに澁い眼をしばたたいた。それが、立ちながら眠つてゐるやうであつた。

翌る朝、二人の人夫廻はしが、朝番の人間を起こしに來た時には、尹は一枚の蓆にくるまつて、仔犬のやうに、ストーヴの前で丸くなつてゐた。

「手前か、昨夜飛び込んだ奴は――？」

額に疵痕のある、兇狀持ちらしい顏をした人夫廻しが、六尺棒の尖端で、尹の靴の底をぐわんと一つ毆ぐつた。

すべて、、、、、、、、であるかを知らうとするには、、、、と會はせるに限る。尹は、がばと撥ね起きた。

「は、はい――さうです。」

人夫廻しは、たゞ、その優越感を對手に示せばいいのだ。

「よし、鮮人だな。もつと眠つてろ、今に親方が會つてやる！」

奥のうす闇を、棒で搔き廻はすやうにして、ほかの一人の人夫廻しは、誰彼を呼び起こしてゐる。

「おウ、疋田ツ！疋田ツ！起きろよ、起きろツ！　――何、尻が痛いツ？　べらぼうめ！　贅澤云はれに、高い錢出して連れて來たんぢやねえぜ！　起きろツ！　こん畜生、なま拔かしやがると、ひつぱたくぞ！」

その日の朝番の連中が、濱へ出拂つてから、朝鮮人尹は、ピストルの閃めく幹部部屋へ呼び込まれた。

船頭の奥野は、痩せぎすの體軀を、ベンチの上へ角度を多くして掛けながら、部屋中を煙草の煙で滿してゐた。

「親方、この野郎です。」

同行した、向う疵が、ぐいと尹の肩を押し遣つた。

「お前、朝鮮だつて？」

奥野は、煙幕の裏から、顏の半分を顰めた。

「はあ、さうです。尹と申します。」

「何しに來た？」

「私國營に雜夫してゐます。非常に待遇惡るいので、不平云うと、毆られました。逃げたのです。」

「いや、俺の聽くのは、ここへ何しに來たといふのだ。」

「働かせて下さい。何でもいいです。日本人漁場の方働きいいです。これから忙しくなるでせう。……」

「ヘン、うまく化けてやがらア。おい、三木、こいつを身體檢査しろ！　こんなのは、よくロスケに煽てられて赤化宣傳にやつて來る奴だ。――そのルバシカが怪しいや。裏を、裏だ！」

三木の敏捷な指先から、取り出された物は、ポケットのチルオネッツ・ルーブルが皺くちやになつて三枚、それからコペック銅貨が五つ。ほかに、どんな縫目を探ぐつても、煙草の屑一つ出て來なかつた。

「煙草吸ふかね？」

船頭はバットを箱のまますすめた。

「いえ、吸はんです。」

「ふむ――それで、お前は、このカムチャッカでは、一つの漁場の脫走者は、必らずもとの漁場へ送

り屈けにアならんことになつてるのを知つてかね？――つまり、お前はもう一度逃げて來た工場へ歸るんだ。こちらから、業々人をつけて屈けるんだ。さういふ厄介を、お前は俺達に掛けることになるんだ。それを知つてるか？」

「いえ、ちとも存じません。……」

「國營は、どこの工場だ？――」

「ウスチ・カムチャッカの第一工場です。」

「歩るいて來たのか？」

「は、私、足速いです。」

「大變な野郎だな……すこし怪しい。三木、こいつをふんづかまへて置け、すこし俺が吐かしてやる。」

三木は、尹の兩腕を、背後からぐいと擡げた。小さな朝鮮人は、器械體操の鐵棒に兩腕を「觀音開き」にしようとして、後半身が利かぬときのやうな恰好になつた。立ちあがつた船頭は、ストーヴの下へバットの吸差しを投ると、ちよつと險はしい眼を表に配ばつた。外には漁夫達が好奇心から部屋を遠卷に覗いてゐる。

「おい、お前達、そこへ立つちやいかん！　ここを覗いたら承知しねえぞ！」

かう云つて、彼は、新しいバットへマッチを擦ると、すばすばと早口に吸ひ出した。折から、飯場の方へ急ぎ足に通つて行く副船頭を見つけた彼は、齒から煙草を拔き取ると、

「青木！――おい、青木、その邊へ誰も立たんやうに、見張つとれ！」

と命じて、一歩、尹の方へ近づいた。

朝鮮人尹は、人夫廻しの腕の中で、鴨のやうに胴震ひした。

飯場で、いつも汁鍋の前で、二本の杓文字を爭奪し合つてゐる群集も、今日はひつそりとして、耳を濟ましてゐた。或る者は熱い飯湯氣の間から、眼を細めて、幹部部屋の前に棒を突張つてゐる青木の姿を瞶めながら、急いで箸を動かしてゐると、別な人間は、この機を幸ひと、汁の果の南瓜をこてこてと掬ひ上げながらも、幹部部屋に、ひ――いッといふ聲がすると、その半分を鍋の中へ取り落した。

「貴樣ッ、ほんとに、宣傳しに來やがつたのぢやないのか？――ほんとか？」

船頭奥野の疳走つた聲が響いた。

一同は、互に顏を見合はせて、背の高い奥野が、蒼い顏に反ッ齒を剝きながら嚙みつくやうに、對

手を攻めてゐる姿を、眼の裏に描いた。それにしても、朝鮮人の悲鳴を擧げてゐるのは、何をしてゐるからだらう――？

もう一度、船頭が何かを、長たらしくがみがみ云ふと、今度は、朝鮮人の方でヒステリックな聲を張り上げた。

「私は、日本國民です！――朝鮮日本に合併されたです。日本國民の私は、日本國民の貴君から虐待される理由ない…です！　さういふことするから、朝鮮人、、です！」

稍しばらくの間、飯場の空氣には、蠅の唸る音しか聞えなかつた。

次に、人達は、昂奮した蒼い土色の顏の尹が、警官にでも護送されるやうに、靑木に片腕を取られて、飯場へ遠れて來られるのを目擊した。

「溫和しくすて、めしを食へ。食つたら、じつとして番屋に待つてゐるんだ。いいか？」

靑木は、亂暴したのが尹でもあるかのやうに、かう云つて、飯場の片眼の爺さんに、何かを云ひつけた。

尹は、終日、外へも出ずに、じつとしてストーヴの傍にしがみついてゐた。まるで、石炭爐べに傭はれたやうに、一度の食事を攝つた以外には、人の出はいり毎に、石炭を小さなスクープで掬つては火の中へ投り込んだ。

「どうも、ありや、鮮人だなんて云ふけんど、日本人らしいつてさ」

ツンドラの上で、網を繕つてゐる漁夫達は、そんなことを噂し合つた。

「人夫廻しの丸山がペトロさ行つたちうのは、ほんとかね？」

一人の前齒の缺けた男が云つた。

「あ、ロスケの巡査引張つて來るだとさ。」

「だつて、あの丸山ぢやロシヤ語が出來めえに。」

「なに、むかうにあ、ちやんと通辯が傭つてあるんだよ。」

「ペトロまでは、よつぽどあるそうだね――十里とか云つたつけな。」

「十二里と聞いてるがな。」

「一日たつぷりかかるかな――もつともこの日脚ぢや大丈夫だろ。」

「馬鹿云へ、誰が歩るいて行くものかな。俺先刻、ランチで丸山とほかの一人で出て行くのを見てるんだ。陸傳ひに行つたら、大變だ。河があらあ――。」

濱では、鹽叺の運搬をやつてゐる連中が、人夫廻しの眼を忍んで、こんなことを囁き合つてゐ

た。

「ロスケの漁場ぢや、迚も待遇がええちう話ぢやねえか？」

「それぢや、何故すて、あの朝鮮が逃げて來たかしら？」

「さあ、親方の話ぢや、赤化宣傳だろて云ふがな。――朝鮮人だなんて、實は日本人が化けたのだろと云ふ話さ。」

「ともかく、俺の知つてるもんが昨年、何とか云つたな、何とか兄弟といふ會社へ一夏稼いだが、仕事は樂だし、一日たつた八時間しか働かない上に、しこたま金を殘して歸へつたよ。隣村んもんだがな。そりやロスケは勞働者を大切にするそうだ。何でも、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、云つて、偉らくソノ、、、でも、、、に限つて、ちやほやするそうだ。――だとも。困るのは、パンだつてな。何しろ、大勢日本人が働いてるもんだから、米のめし位焚かせたらよさそうなもんだが、そこはさうは行かねえらしい。」

「しかし、あの鮮人の野郎は、怪しい奴だな――。」

夕番の交替に、第四回目の夕飯が出される。これは、一日の正餐だ。飯場でも、この夕飯には、新しい焚き立ての飯と、別な南瓜を切り込んだ味噌汁と、古るい澤庵の上へ六七本の新しい澤庵を切つて笊の上は側へ撒布し、一人當り半四位の干鰯を汁鍋の中へ擲き込む。同じ味噌汁でも、永住的な澤庵でも、かうして出されて見ると、多少の變化はある。その變化は、本質的には何等の變化を伴はないことだとしても、早朝から三回も、同じ物の殘滓に、水を注ぎ足したり、下から引繰返へしたりして食はされてゐる勞働者達にとつては、全然メニュウがちがつたほどの變化である。

從つて、日盛り六時頃の夕飯は一段と雜沓する。

最後の一人が夕飯を食ひに出た時、朝鮮人尹も、赤く火膨れのした手の甲を擦りながら、飯場まで出て行つた。しばらく彼は、茶椀と汁椀とを入れた大笊の前に立つてゐたが、それが空だつたので箸だけを持つて、日本人勞働者のあさましいほどの食慾の亂舞を打戍つてゐた。

「どうした、茶椀がねえのか？」

一人が親切に尋ねると、彼は、悄氣た顏をして、

「あとでよろしいです！」

と答へた。

そして、もう一度、番屋の蓆の前に、恨むやうな眼でこちらを見返へつた彼は、それつきり、何處へ行つたものか、ストーヴの側には姿を見せなかつた。

夕飯が終つて、三人の年増の女漁夫を加へて、いつもの猥褻組が、前方のストーヴへ陣取り掛けると、脚氣の氣味で早く臥ようとした男が、蒲團をめくつてから、不審そうに一枚の紙片を手にして讀んでゐた。

自分の箸だけは、火事があつても持ち出す心掛けの秋田者の田中も、枕の下へ箸箱を安置しに歸へると、そこに挾まれてある活字刷の紙片が眼についた。

二人は別々な寢床から、蓆の隙を洩れる光でそれを讀んで、互に顏を合せると、苦し紛れにするやうな微笑を泛べた。

「おい、おい、こりや何だい？――誰だ、こんな物置いて行つたのは？」

かう仰山な聲を張り上げたのは、脚氣と田中ではなかつた、入口のストーヴに近い寢床を整理していつもの「おいちよかぶ」を始めようとした、熊谷と呼ばれる盛岡からの渡り者であつた。

「はてな？」

熊谷は、紙片の裏表を引繰返してから、讀み上げた。

「日本人勞働者諸君！

諸君勞働者ハ、誰ノ爲メニコノ露領かむちやつかへ來テ勞働スルノカ？

思フテモ見給へ、コノそゔいえーと・勞農ろしあ社會主義聯邦共和國ニオイテ、、、、、、、、、、、、、、、、、日夜ハゲシイ勞働ニ從事シテ、ノコシタ莫大ナ利益ハ、、、！見ヨカノ、、、、、株式會社ノ如何ニ英國資本閥ト提携シテヰルカヲ！英國ハ正ニ勞働者國デアルトイフダケノ理由カラろしあニ、、ヲ挑ンデルデハナイカ！

醒メヨ、日本人勞働者諸君！　兄弟、勞働者達！

醒メテ、諸君ノ勞働ノ利益ヲホントウニ諸君ノ物トスル爲メニ、コノ漁區ニ於テ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！

、、、、、！

コレコソガ諸君勞働者ノ、、、、、、、、、、、デアル！

ろしあ沿岸カラ、、ノ、、、、ヲ追拂へ！　漁業ヲ諸君ノ手ニ取リ戻セ！

日本人勞働者諸君、眼ヲ覺マセ！　諸君ニハ、ガ一人シカナイコトヲ知レ。……――卽チ、、、、、、、デナイモノハ、ドノ國デモミナ手ヲツナイデ、、、、シヨウトシテルコトヲ！

、、、、、！　、、、、、、！

盛漁期ニオケル、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！

コレコソハ諸君ヲ幸福ニスル唯一ツノ道ダ！

熊谷は、事實上、皆までこの撒ビラを讀まなかつた。後半は、別に讀み手によつて、より高らかに讀み上げられた。それが讀み終られた頃、熊谷は船頭奥野以下の幹部五人を案内して、もものしく番屋へ闖入して來た。

奥野が第一にしたことは、撒ビラをまだ手にしてゐた宇田川といふ東京者を、いきなり棒で毆りつけることだつた。この一應の手續を履行したあとで、齒を尖がらせた彼は、同じ棒を采配のやうに揮つて、幹部連に番屋全部の家捜がしを命じた。

「この野郎、こんな物、讀み上げる奴があるか！」

不平そうに、涙を泛べて立ち擧がつた宇田川の手から、猿臂を伸ばしてビラを毟り取つた船頭は、喉から吐くやうにかう對手の言葉を封じた。

「太い鮮人だ！――野郎、どうしたつて逃がしはせんから、青木！　誰か青木を呼べッ！」

同じやうなビラは、何時どうして撒かれたものか、めいめいの蒲團や枕の下には、一二枚づつ必らず挿入してあつて、聚めて見ると百八十五枚からあつた。

奥野はその一枚をポツケツトへ捻ぢ込むと、あとはストーヴへ擲き込ませた。

「みんな、暫らくここを動いちやならんぞ！――それで、ちよつと聽きたいことがあるが、誰かこのうちで、あのヨボの逃げて行つた方向を見た人間はないか？」

かう船頭が、烈風を喰つた煙筒のやうに喚めいてゐる傍ら、一と隅にゐる青年は、手早く先刻のビラを紙撚にすると、蓆と丸太との間に挾み込んでゐた。

その青年は、右の眼に烈傷を帶び、額の方々が青く腫れあがつてゐた。

「はツ、何か用ですか、大將？」

緊張した場面へ、青木の圓るい脂鼻が、深い襞を見せて這入つて來た。

5

間もなく、ツンドラの春――夏がやつて來た。

ベーリング海の、最初のひとうねりの波が、鏡のやうに、午前二時半の日の出を反映したと思ふと急に氣がかはつて雨になり、蒙々とした濃霧のそとに、太陽は追ひ出されてしまひ、やがて、再度の氣がはりから、午前十時頃になると銀ののべ板のやうな日光が、黑い海、曝れた大地を、烈しく燬き

つけて、それが夜の九時頃まで精いつぱいに火力を弛めないのである。

かうした日數のあとで、ツンドラには、錦繪のやうな夏が來るのだ。

この季節の特色は、人間の想像力を馬鹿にした、大自然の極端に派手で豪奢な復活祭であることにある。

數十、數百年以來の、生きては死に、死んでは生きた草の根で覆はれた、部厚な絨氈地層に、溫度は酵母のやうに作用して、一夜で、猛烈な色彩のさつきや、つまとり草や、千鳥桔梗や、リンネ草などが、花卉類の原始色を極度に誇張して咲き揃ふ。黃金の蓆、血綿のやうな團塊、紫に、碧空の色に。——その上を、ゆるい水車小屋の唸りのやうに、小粒な蠅や虻が、芳香に醉つて飛びまはる。

これは又、オーロラとちがつて、心から勞働者を親しませる。

しかし、この場合にも、純粹に美しいものに對して、人間の本能の持つ鑑賞力は、大部分彼等の主觀的狀態によつて抹殺されてしまふ。百七十人の或る者にとつては、花が開かなかつたも同然である。また、その一部にとつては、富豪の花卉園の横を素通りしたも同じである。花が美しければ美しいほど、彼等は悲しむ。咽せるやうな匂ひ、幻覺的な虻の唸り、それらは勞働者を複雜に苦しめる。彼等はその上に寢ころんで、遊び狂ふであらうところの、鄕里の子供たちを思ひ出す。若い日の、日向の多かつた戀愛時代を思ひ出す。その花を摘んで、ただ何となく歌をうたふ、まだ會つたことのない若い娘を考へる。そして、それらのことは直接彼等の網繕ひとも、倉庫の整理とも、濱の井戸掘りとも、濱デツキの築造とも、鹽叺の運搬とも、機械の据附とも、船底のタール塗りとも、米磨ぎや椀洗ひとも關係がないのである。

たまに、雜夫の連中が、人夫廻しに小突かれながら、ツンドラの奥深くまで、枯木や古材木などを燃料にするために拾ひに行くときに、この狂人じみた、北極の俄か造りのパラダイスの美しさに醉つて歸る。

彼等の一隊が、漁場から、ペトロパウロスクの方へ、四五町も奥へ行つて、幅三間ほどの淀んだ小川に出遇はした時である。集めた古材木や、曝れた船板を、路々へ積み重ねてそこまで出た彼等は、小川へ來たことが、一つの合圖でもあるかのやうに、腰を下ろしてやすむことにした。

「ハラショウ！」

一人の、いつも「日露會話階梯」といふ、片假名附きの會話の手引きを懷ろに入れてゐる男が、かう怪しげな發音で云つて、ごろりと草の中へ寢ころんだ。寢ころんだと云つても、その實、草の中へ見えなくなつたと云つた方がいいかもしれない。バツトの煙が、花の間を縫うて、糸のやうに立ち騰

る。

「暑いね。」

かう云つて、もう一人が赤毛布の裏をつけた、ぼろぼろの絆纏を脱ぐ。その下にも、同じやうな、襤褸絆纏が着込んである。

もう一人は、函館以來、底が、洗濯屋のアイロンのやうに擦り減つた、ゴム長を脱ぐ。

四人目の男は、犬が平原に向つて訴へるやうに、ただ棒立ちになつて追分けを歌ふ。

「……せめて、歌棄、

磯谷まで――」

人夫廻しの「杉山さん」は、わりに寛大である。人間、ごぼごぼと濁つた音を立て、膨れあがつた夏の川が、あざやかな、きつい原始色の花花の間を、まつすぐに流れてゐるときに、さういつも函館に納簾の下つた大きい店を持つ山崎德太郎商店の利益だけを考へてゐるわけには行かない。のみならず、杉山君は、齒ブラシ髭を蓄へてゐるだけあつて、とかく若い者と共鳴したがる自由主義思想の持ち主なのだ。だから、雜夫達は、こと更に彼を「杉山さん」と呼ぶ。

「どうだな、かう日和がいいと、おいらも、のこのこロシアの内地へでも歩いて行きたくなるよ。――

――ペトロまでだつて、これで十里そこそこなんだからな。あすこは、今漁場のさかる時期だから、さぞごつたかへしてゐるこつたらう。」

これには誰もこたへる者がなかつた。云ひ合はしたやうに雜夫達は、幹部連を警戒した。ことに、撒きビラ事件からといふもの、朝鮮人に内通して、連絡をとつた者がありはしないかといふ嫌疑があつたので、船頭以下の六人は、いろいろな形で勞働者の間に、探ぐりをいれてゐたからである。

一向に自分の氣持ちに反應するものがないのを見てとると、杉山君は、川の方を向いて大きな欠呻をした。紫の煙が、彼れの手元からまつすぐに立ち上つて、その大きい鼻孔を撲ぐるやうに掠めた。つゞけさまに、彼は二つほど、烈しい嚏をした。

「ロスケの工場は、八時間勞働、八時間遊戯――それに八時間睡眠と來てゐて、まるで、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を見せつけるやうなものだ。機械もアメリカ製の最新式を使つてゐるしお湯へも這入れるし、本も讀ませる。おまけに女工達とどんなにふざけまはつても天下御免と來てやがる。いいな！――俺達の漁場の婆アどもを見あがれ！」

この獨白は、すつかり諦めてしまつた杉山君によつて、誰の返答をも要求しない、一とくさりの感想として、空氣の中へ吐露されたのである。

「まつたくでがすな、あのうつ一寸ふめる代物は、まづまづ松代チユう娘つ子ぐれえなところでがすペをん。」

女の話になると、意外に杉山君は反響を得たのである、反響した男は、仙臺者の小野寺といふ、在郷軍人であつた。

「杉山さんなどは、色男だから、仲々あの八人が大騒ぎしてるやうですね。‥‥」

「冗談、」杉山君は苦笑で言葉を切つた。

「――あんなあばずれどもと、何とかするんなら、逃げ出した方がましだよ。君達こそ、船の中で、みんな、、、づつとられた組ぢやないかね――あいつらア、、、、、みたいなものだよ。」

杉山君は、案外くだけて笑つた。

もう一人が、妙な手つきで何か猥褻なことを話し出さうとした途端に、のつそりと、一人のロシア人が、一同の頭上に現はれた。

「おお、ロスケだ！」

ロシア人は、大きいパイプで煙草を燻らしてゐた。その鼻を中心に、いろいろな細い皺があつまつて、それが一圖になくなつたと思ふと彼は笑つてゐた。

「日露會話階梯」が、まつ先に名乗りをあげた。

「ズドラフストウイチエ！」

「日露會話」の第三頁が、たしかに「今日は！」といふ言葉のロシア語を、さういふ風な小むづかしい發音で指定してゐた。

「ダー・ダー・ヤポンッエー！」

「何といふんだね？」一人が「日露會話」の袖をひいて訊ねた。

「おい、序に、この間逃げた朝鮮人は、お前の方の宣傳部から寄越したんぢあないかと訊いてみろ？」

杉山君は、命令的に、かう「日露會話」に要求した。

「日露會話」は、「食堂へまゐりませう」から「何卒お湯をさしてください」「いや、ありがたう、滿腹です！」までめくつてみたが、一向に、杉山君の註文に應じたやうな言葉は見當らなかつた。

ロシヤ人は、しきりに小さな本を、めくつては眞つ赤になつてゐる日本人を、好奇心から瞰おろした。

「ヤポンツェー・トリコ・アレンダトルヰ・ザ・ルイボロビイ。――インペリアリステー・アレンドウエー

ト・ゼムリー・オト・ラボチューフ・ノ・ボーチェト・ツイナー・トロチェーブニフ！　ハツは、ハツは！」

「ありがたう――即ち、スパシーボ、までで、ここは終りだ。糞ツ！　こんな本は、何の役にも立ちあしない！」

かう云つて、青年は、本を蹶きつけると、どつかと草の上へ腰を下ろして、漫然とした笑みを湛へながら、對手を打戍つた。

「いまのは何と云つたんですか。は？」

仙臺の在鄕軍人が「日露會話」へ訊ねた。

「あれか、あれは君、君達日本人は、はるかに北海の怒濤を蹴破つて、國家のために艱難辛苦を厭はず、年々數千萬圓の利益を國家に齎らして歸る――すこぶるよみすべき、忠君愛國の民である！　てなことを、ぺらぺらとぬかしただけの話サ」

青年は、すこぶるの機智で、笑ひながらかう云つてのけた。その實、ずゐぶん苦しかつたのである。

「ヤポンツェー……といふのは、俺達日本人のことだ。それだけは解るが、あとは皆暗號電報といふところかね。――」

杉山君は、腹の底まで日光を入れるやうに笑つた。

ロシア人は、草の上に投られてある「日露會話階梯」を、亘きい赤い手で拾つた。同じ亘きい、赤い指は、しきりにその頁をめくつてゐたが、

「鮭」

といふ字へ來ると、いく度もその原語を發音しつづけた。次には、

「漁業」

といふ字を發見して、それを彼等の眼の前に突きつけた。

「ルイボロビー！」

それから今度は、「鑵詰」である。一同の頭が、小さな本の上へ聚まる。その上で、ロシヤ人は肺臓の大きさうな笑ひ聲を上げた。

「工場」

それに、もう一つの字が加はる。

「國營――「國營工場」

稍永いことかかつて、ロシア人は、

「勞働條件がちがひます！」

といふ言葉へ、巨きい爪の痕で、アンダ・ラインした。

「ははア、こ奴、俺達へ、國營へやつて來いと云つてるんだな！　宣傳だよ！　これこそ赤化宣傳だ！」

杉山君は、急に齒ブラシ髭をなでながら、外りかへつた。

「しかし、こんな宣傳なら、ちつとも恐ろしくないね。――大體、、、、でやかましく云つてるのは皆こんな種類の、何でもないことなんだからな」

突然、日本人の一人が、大きな聲で叫んだ。

「レニン！　トロツキー！」

その聲に應じて、ロシア人は、茶褐色な蝸牛の殼のやうな瞳を圓くした。彼は、しばらく懷疑的に、さう叫んだ男を瞶めてゐたが、やがて、大きく肩を搖すぶりながら、誰へともなくかう云つた。

「ニチウオ！」

さう云ひ放つたかと思ふと、この異樣な大男は、何の愛想もなく、靴を鳴らして草を踏みわけながら、ツンドラの上を、歩み去つた。外國煙草の、強い香りが、日本人一同の鼻孔を撲つた。

「ロシア人て、妙な國民でがすな。」

仙臺の在鄕軍人が、この短い晝飯前のエピソードに、結末をつけるやうに、眞面目くさつて、かう斷言した。彼等に接した、ロシア人は、決してこの一人だけではなかつた。

翌る日の朝、突然、沖へ、赤旗をたてたランチが現はれて、作業に從事してゐる漁夫達の間を縫つて、二人の役人らしい者と、一人の兵士と、朝鮮人らしい通譯が、幹部部屋をさして這入つて行つた。一人のロシア人は、G・P・U・の士官で、もう一人は稅官吏、二人とも顏の半分を濃い髭で埋めてゐた。

「あれだけ髭イ生やしてゐたら、よつぽど寒さがちがふだべに。」

濱では、そんなことを云つて笑ひあつた。

幹部部屋では船頭の奧野が、青木ともう一人の人夫廻しの丸山等を參謀格にして、壁の武器に凭れながら、「外交」を始めてゐた。

この「外交」には、多分のウオッカも流用された。酒量の強いロシア人は、咽喉へぶちまけるやうにウオッカの盃を乾した。

「この間、この青木君をさし上げた通り、ああいふ宣傳をする人間は、ぜひ貴國政府で取締つていた

だかないと困りますな！　あの後、あの尹といふ不逞鮮人を摑へてくれましたか？」

船頭は、自分の不慥かなロシア語をすつて、朝鮮人らしい通譯に、皮肉な長たらしい質問を出した。

どこと云つて顏に特長のない、眉毛の薄い通譯は、流暢なロシア語で、ごく客觀的に奧野の言葉を、青い帽子を被つた、國家保安部の士官へ渡した。すべて、これから、この部屋には、同じ話柄が二重に反復された。

「朝鮮人が、貴方の漁區に對して、勞働問題に關する多少の宣傳をやつたとしても、それは貴方がたの御注意を要する事柄であつて、ソヴィエト・ロシアは、それに對して何等の責任を負ふわけにはいきません。況んや、その、、、が、、、、、である以上は、私達政府と何等直接な關係がないことはあきらかではありませんか。それとも、何か、その男が私達の政府と直接關係があるといふ確實な證據がおありですか？」

ロシア人は、ちよつと腰のピストルへ手を當てて、片手を揮ひながら、通譯の方を向いて熱心に話した。

青木は、これには返事に窮して、コップの一つへ溢れるほど透明な酒を注いだ。稍あつて、彼は、

脫いである壁の外套から、例の撒きビラを取り出して、その皺を伸した。

「これには、ご覽の通り、明らかに貴國政府を擁護する言葉が書いてあると思はれますがね。」と云つて、彼は、大事な書面でもあるかのやうに、新聞ざらへ刷つたこのビラを通譯へ手渡した。

通譯は、青木の言葉を繰り返してから、二三語士官と話しつゞけて、今度はそのビラの飜譯にとりかゝつた。

人間でいつぱいになつたこの小屋の空氣の中を、强烈な酒の香を慕つて、眞夜中の醉漢のやうな虹が飛び廻はつた。

「――あらゆる資本主義制度の下に苦しんでゐる勞働者は、、、、、、、、、、、、、、。又、それが當然でもありませう。しかし、ソヴィエト・ロシアに對する友愛や、同情などの意志の表示と、ソヴィエト・ロシア政府それ自らの行動とは、鮭と蟹ほどの相違があります。こんなものは、てんで問題になりません。――もし、本官が、貴方がたの御困難に對する同情の一端として、御忠告申上げたいことがあるとしましたならば、よろしくこの文書を本國の會社へ御送りになつて、なるだけこの文書に於て、暗示してゐるやうな部分、即ち、、、、、、、、、、、、、、、會社の重役達から命令してお貰ひになることでせう！」

こんな頼りのない押問答の結果、奥野は、三本のウオッカと、半ダースのサッポロ・ビールとを空にした。士官達が檢査濟みのあと出て行くのを見送るより外はなかつた。この男、悲しいかな、赤色勞働組合といふものの存在を知らなかつたのである。

6

「――今日、いよい上恙なく、この漁場に於きまして、網卸ろしが出來たといふことは、偏へに皆様の協力一致の努力の賜物であります。そのことは、私ども幹部一同、山崎德太郎商店に代つて、厚く皆様に御禮申上げる次第であります。今更、私風情が申上げまするまでもなく、賢明な皆様の疾くに御承知のこととは思はれまするが、抑々このカムチャッカの漁業は、我が大日本帝國が、かの日露戰役の際、數千億圓の國帑と數十萬人の同胞の血を流しました犧牲によつて、名譽ある戰勝の記念として獲得しました利權であつて、思へば、實に、その因つて來たるところの意義は深く、その事業の持つ價値たるや尊いものでございます。御承知でもありませうが、ここは名にし負ふ北極の端、東にベーリング海をめぐらし、西にオホーツク海を控へ、露領カムチャッカの土地にいたしまして、我が海國男子を以つて誇る、諸君日本帝國臣民達は、勇敢にも他國の領土に於て、水産業の第一線に立たることにございます。――然る所以を持ちまして、諸君の一擧一動は、實に、、、、そのものの一擧一動とも云ふべきほど重大な意義を持つものと考へられまする。諸君が各自の勞働に身を委ねられ、專心專意これに從事されることは、とりもなほさず、、のために、日夜、、を撞んでらることと同じなのであります。諸君は、實に光榮ある産業界の一部隊、前哨兵にも等しいのであります。本年の漁獲高が、必らず大豐漁であることを豫想いたしまする私共は、皆さんがその豐漁を齎らすことによつて、直ちに我が、、のために、、を盡されることになる、といふことを切に感じまして、今からその實現の日の一日も早からんことを祈つて居る次第であります。――でありまするから、吳々も皆さんのうちには、、に對する、、、、最も忌はしき、、、、、、、、を爲す者、徒らに、、、、、、、、、類ひの輩の煽動に耳を藉さるることなく、自分の家に對して奉仕するやうな氣持ちで、誠心誠意この漁場に於てお働きが願ひたいのであります。……」

ここで終るのかと思ふと、船頭の奥野は、もう一くさりのスピーチを附け足した。

「……お働き下さつた結果によつて、本會社と雖も、わづかに個人經營の會社ではございまするが、かの、、漁業や、その他、田代三吉、八島八郎、萩布宗太郎その他の諸君にも負けないやうに、給金も增して上げまするし、魚もどつさりお土産に差上げまするから、何卒精いつぱいにお働きのほどを

ここに會社に代つてお願ひいたします。――ええ、網卸ろしとは、ほんの名ばかりでございまして、何も御馳走はございませんが、この次ぎの一萬石祝ひを樂しみに、何卒一杯召し上つて戴きたい。」

この切口上な挨拶から、一合づつの瓶と、五個のぼた餅とからなる祝宴が始まるのである。その晩は、毛唐くさい身裝の好きな奥野も、紺の香のする新しい印絆纏を着た。衿には「山崎德太郎商店」と書いてあつた。

女達には、酒の代りにサイダーとかりん糖、ぼた餅などが出た。一合の酒は恐るべき速度で、疲れ切つた勞働者の體軀の纖維へ浸み込んだ。糖分に飢えてゐた彼等は、咽喉が痞へるほど、がつがつと甘い物を貪つた。酒の飲めぬ男は、一合の瓶で、一皿の餅を買つた。餅の嫌ひな男は、一皿の餅で二三本の酒を掠めた。誰一人として殘すものはない。脚氣に罹つた三人の男は、何とかうまい言を云ひくるめられて、忽ち割前を掠められてしまつた。

「、、の爲めだ――もつと醉つぱらへ！」

「俺らア。、、、、、、の第一線だ、およし、さあこつちさ來よ！　抱いてやるぜ！」

「會社の利益は、俺達の利益だとよ。松代つこ、さあツンドラの上さ行つて二人で寢んべ！」

だんだんに呂律が廻はらなくなつて來た。この網卸し祝ひは、入人の女の爭奪戰になりかかつた。

その間、げえげえ吐く者もあり、他人の蒲團の上へ小便をする者もあつた。

「……おやぢこれ見ろ、

、、、、だよ、何んてまがいんでしよ……」

などと、鉢卷をして唱ひ出す者もあつた。隅の方に連れこまれた女が、赧い顏をして一座の方を見てゐると、急に撥ねかへつて逃げて來るのもある。番屋の外では、晩くまで女達を追ひ驅ける男の犇めきが聞えた。幹部達は、いい加減に座を切り上げて、部屋へ歸ると、改めて、筋子や蟹罐を肴にウオッカを飲み直した。

「酒と女と――さへ當てがつて置けば、野郎共は、當分大丈夫さ！」

これが、山崎商店代理奥野の哲學であつた。

醉つたまぎれに、熊谷の「おいちよかぶ」に釣り込まれて、先借りの分までせしめられる者もあつた。何もなくつて、軍手や、帽子まで張る男もゐた。もしものことがあつてはいけないと云ふので、副船頭と、丸山とが、番屋の廻はりを黎明近くまで警戒した。二人の外套のポケットは、ピストルとポッケット・ウイスキーとで重かつた。

かうして、彼等に許された亂醉の一夜が明けると、――凄さまじい雪崩れを打つて、魚群の襲來す

る最初の朝がほのぼのと明けた。

鱒は、鮭と先を爭つて、産卵のために川をめがけて殺到した。海は、澁茶を煮つめたやうに褐色に變じて、海豹は魚を追うて、コンマンドルスキー邊から、大擧陸をめがけて押して來た。熊は、人間の居ない場所をねらつて、川岸に發ね上がる魚をあさり廻はつた。

大きな半島には、鋭い鞭のやうな、夏の最初の光線と共に、騷々しい生物の移動と生存競爭が始まつた。その中には、人間といふ飢えた動物も居つた。

7

網は沖へ張られた、縦四間、横十間ほどの長方形の箱のやうな、目の五分角の、糸の嚢へ魚の這入る個處だけ眞ん中を圓ろく刳り拔いたもので、底は五間も海底に浸つた。網の幅だけ浮木が現はれてゐて、それを目安に、漁夫は漕いで行くのである、一艘の川崎船には、二十人から乘つて、それには部長が音頭をとる。網を手繰り上げる時間が一時間、漁があつたとなると、日に十五六回は出動する。一と網の漁獲高は、大概一千尾ぐらゐのもので、それを船へすくひ上げて、發動汽船で岸まで曳いて歸る。魚は大きい奈で、船から直ちにウインチで捲き上げられ、それが、空中で水を切りながら濱デッキの上へ算を亂して開けられるのである。沖へは、一と網ごとに三十人づゝ出た。それ等の勞働の結果は、陸の百三十人ほどの勞働によつて、次第に食料品の山脈を築いて行くのだ。濱デッキでは四十人からの漁夫がマキリを持つて、魚の腹を引裂いた。小さな踏臺みたいなものに腰を掛けて、その前にある箱へ、筋子は筋子、鮭は鮭とべつべつに投り込まれた。デッキのすぐ傍をトロッコが通つてゐて、割かれた魚を滿載しては、濱の方へ運び出した。筋子笊は、一尺五寸ほどの口徑を持つた不潔な容器であるが、それに魚の血みどろな卵を充滿して、四人の雜夫が山樵夫のやうな「背負ひ子」で筋子を運んだ。トロは六臺あつて、一臺に二人づつ附いた。鹽漬にされるのは鮭だけで、鱒は奈で罐詰工場へ運ばれる。トロで運んだ鮭は、一時、鹽の山からシヤベルで投り出される荒ら鹽の中へ埋まる。廣大な鮭の山が一町ほどの長さに盛り上がつて、それが烈風の當る濱の砂丘のやうに、幾つも幾つも高まつて行く。

罐詰工場では、最も幼稚な、不衛生な、機械力と關係のない作業が始められる。高い木馬のやうなテーブルが設けてあつて、四人の漁夫が、一尺五寸ほどの庖丁で、絶えず首を振りながら、押し寄せて來る鱒の大群を、罐の大きさだけに切斷して、血綿の流れる兩側の滑り台の上を、三人づつの女漁夫へ落してやる。無數の、蓋のない空罐を持つた女達は、臓腑の破片といつしよに落ちて來る漁肉

を、黑い垢の溜つた爪先で罐の中へ押込む。一人の男が、罐の蓋とはんだとを持つて、ごく原始的な手附で鰛の罐詰を製造する。一とわたりはんだの附いた生魚の罐が擂ふと、その男は、背後の醜い大坊主のやうなボイラーの中へ、それを積み上げる。亜鉛一枚奥の機關場では、唯一人の機械技術の獲得者である、薄瘢痕の男が、グーヂ・グラスと腕時計を見くらべながら、スチームを上げてゐる。錆の附いたボイラーに、錆の附いた鐵蓋が載ると、一間の高さを蓋附け人が土足のまま下りて來て、

「おう、室田さん、やつてくれよう！」と叫ぶと、薄瘢痕の室田が栓を捻つて、蓆張りの工場へスチームを通す。大坊主は、吸入器を當てられる子供のやうにじつとしてだんだん汗をかく。蓆張りの工場は燒けるやうに熱くなる。無數の蠅が、カムチャッカ全半島から、このうす生臭い、血だらけな人間の汗と體臭と溫室のやうな溫みに充滿した作業室へ魅惑されて、蓆二枚ぶりの入口から、雨のやうに飛び込んで來る。工場の外側、即ち蓆の外側には、嗅覺の强さうな蠅の群が、鉄のやうにべつたりくつついて、何かの隙を狙つてゐる。罐詰は、一定の熱量を與へられた上に、もう一度取り出されて、冷却した上で、空氣拔きをされる。恰度レッテルの貼つてある邊に、はんだの痕跡のある、田舍廻はりの「鮭罐」といふのが、この漁場あたりから出る鰛の、ナポレオン當時とさほど變つてゐない製造法の、罐詰なのである。筋子部屋には、四人の漁夫が、魚の胎兒を鹽漬けにして、大樽へ詰め込むといふ殘酷な作業に、血だらけになつてゐる。かうした樽詰は、この山崎の漁場では、一と夏三百樽ぐらゐしか出ないのである。罐詰は、ごく大漁で六百箱、落ちて四百箱ぐらゐしか內地へ輸送出來ない。

鮭は、濱の鹽に埋められたまま、十日から十五日ぐらゐまでそのままにして置かれる。ときどき熊が來て、その鹽鮭を浚つて行く、その間に蠅が鮭の身へ卵を產み附ける。蛆が湧く。さういふ魚は、內地へ來ても肉に締りがなくて腐つてゐる。そのあとで「形付け」が行はれる。これは八人づつの漁夫が一組になつて、鮭の山を、一日に一石づつ整理して行く。一石は鮭にすると八千尾、鰛はその二倍ぐらゐに相當した。その整理の方法は「鹽切り」と呼ばれて、魚の肚へ鹽を詰めるのである。一日で卸ろし立ての軍手の指がぼろぼろに擦り切れるほど、粗い劣等な鹽が使はれる。魚の肚へ鹽を詰めると、それを一石づつ四角な山に積む。八疊四方ぐらゐの山が濱には五十も六十も要塞のやうに築かれる。それ等は、積み上げられるや否やしつかと菰掛けされて、歸りの汽船を待つのだ。

——魚を漁獲して、それ等を食料品にまで生產する過程を、百六十三人の勞働者は、眼も鼻も耳も無い動物のやうになつて、單純な激勞を、無數に、機械的に繰り返した。彼等を、勞働する動物にするために、七人の幹部は、彼等よりも、もつと機械的に、もつと無神經に叱鳴り散らし、動き廻り擲

きつけ、威嚇して歩いた。

わけても、この盛漁期に、魂の底まで醉つぱらつてしまふのは、圓い鼻と、凄い眼の持主である副船頭の青木であつた。彼は、血を嘗めた熊のやうに暴れまはつた。この男の持つてゐる野獸性は、最初の一と畚の鱒の群を見たときから、狼のやうに猛り立つた。彼の眼は血走り、鼻のくびれは深み、棒を握つた拳には血管が膨らんだ。當るものは突き飛ばし、躊躇してゐる者は蹴り上げ、少しでも命令に不服な顏をする者があると顏が歪むほど毆りつけた。怒ることがこの男の勞働の能率を增すことであるかのやうに、彼は働きながら怒り、怒るとますます他人の氣づかないことにまで飛びまはつた。まるで、彼の行動は、非常に腹立たしい仕事の中を、どうにかして早く切り上げようと焦心つてゐるかに見えた。鮭は、確かにこの男を狂人にした。

青木の殘忍性の、當面の摘發者は、番屋に寢てゐる三人の脚氣患者と、一人の淋病やみとであつた。彼は朝の二時頃から、自分の受持ちでもない人夫起こしに呶鳴りこんだ。

「やい、この穀潰し奴！　貴樣らが寢そべつてけつかるために、昨日は一石からの鮭を取り逃がしたぞ！　鮭は生き物だ。鮭つ子はあ、手前らみたいな怠けもんとちがふ。鮭には鰭があるぞ、泳いでるんだ。ぐづぐづしてゐたら、來年まで泳いで逃げて行くんだ。——起きろ！　起きねえか、この出來損ひめ！」

かういふ前觸れで、彼は床の上を樫の棒で撲つ、續けさまに、撲つた。青膨れた顏をして、患者の一人が、蒲團の下から手を合はして拜むと、憐愍といふ贅澤な感情の餘裕を持ち合せない彼は、長く伸びたその男の髮を引つ掴んで、蒲團の上へ坐らせると、背後から、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。男の眼からは、水のやうに涙が流れる。三分芯のランプの下で、周圍の人達は、朦朧としたその暴動の輪廓を見、皷膜を剪くやうな騷動を聞き、身體中に蠢く虱を自覺しながら起き上がる。かうして四人のうちの一人は、無理に出された沖仕事の最中に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。百六十三人は、百六十一人の勞働者になつてしまつた。それにも拘らずに、病人は次ぎ次ぎと殖えて行つた。

一日五回の米食は、勢ひ米食者特有の脚氣病を蔓延させた。そちらにもこちらにも、靴を脫ぎ、股引を外づし、下穿きをまくり上げて、脛を壓して見る者が多くなつた。それと同時に、この不完全な漁場の司厨部では、さながら勞働者を窘しめるための陰謀でもあるかのやうに、野菜を斷らしてしまつた。馬鈴薯と玉葱が、味噌汁の鍋から消え、南瓜が最後の片影を沒してから、暫く若芽の味噌汁がつづいた。若芽の味噌汁から、この唯一の副食物は、急激に飛躍してサンペイ汁となつた。この妙な

名前のスープは、頗る經費節約を主眼としたもので、それを調理するには、大鍋へ水を一杯沸せばよかつたのである。水の沸騰したころ、最も自分の勞力を經濟的に消費しようと心掛けてゐる三人の老人は、手鼻をかんだ手で、昨年の鹽鱒を、滅多矢鱈に切りきざんで投りこむのである。これがサンペイ汁。漁夫達の或る者は、それを「いつぺい汁」と稱した。それに、澤庵と云へば、第三函館丸が、百七十人をここへ上陸た日からの下積みが、鹽を吹き、黴を吸收するごとに、ぢやぶぢやぶ洗はれて、は又澄ました顏をして筵に納まるのである。そこで、漁夫達は夜陰に乘じて澤庵を盜んだ。又、味噌をくすねて、ストーヴで鱒を燒いて食つた。偶には、急を追ふに夢中になつた海豹を、網の中で撲殺して、その肉を食ふ者もあつた。臭い海獸の肉は、ひどく下痢を催させた。――總じてこれらの惡食は、榮養本位の勞働者達に壞血病を起させた。ちよつとしたマキリの切り疵でも直ぐに膿んで、腫れが關節へ傳はると、局部を中心に毒藥のやうな光りが皮膚一面に漂つた。

かういふ不健康のための各種の陰謀がめぐらされてゐる傍ら、勞働者の腕時計を踏み碎くほど時間に對する錯覺を持つた幹部達は、時と燃料と勞力の節約を思ひついて、絕對に入浴をさせなかつた。事實、一度、網を染めた時に、百六十三人は、〻〻との粉を煮立てた湯の中へ入浴させられたことがあつた。湯が熱かつたためではなくて、彼等は、湯に含まれた染料のお蔭で、非常に血色のいい勞働者となつて現はれた。それも網卸ろし以前、カムチャッカへ着いてたつた一回の話である。虱が湧く。かぶれが出來る。醜惡な體臭が、彼等の一擧一動から噴霧器のやうに發散する。彼等は、猿のやうにものを云ふごとに體を掻いた。ちよつとした仕事の手隙きがあるごとに、兩手は猛烈に旋回運動をつづけた。眠つてゐても、身體を掻くことだけは忘れない。漁場をこぞつて、悉くの人間が、食事にも會話にも、作業にも、生活の全部を、妙な手つきをするために捧げた。まるでその手つきをしないのは人間でないやうに。しかし、人間は習慣である。やがて、このがりがりと皮膚を掻く音、むしむしと着物を押へる恰好、擽ぐられた女が逃げ出すやうな背の筋肉の運動、それらも珍らしくはなくなつた。そして、それが珍らしくなくなつた頃に、この漁場へは病氣が眞劍に領分を擴張しはじめたのだつた。

五人、六人――と脚氣が殖え、濱デッキの連中は日に三人づつも怪我人を出し、梅毒や淋病の發生する者が憂鬱に寢そべる。かうした病院の內容を持つた作業場が完全に實現すると、そこには、〻〻〻〻〻〻、甚だしい個人的侮辱を齒糞とともに吹きかける、獰猛な七人の「醫者」があるだけであつた。この漁場では大概の病氣は一度罹つたら最後、それはツンドラの彼方を意味した。ツンドラの彼方は、同時に、箱作りが板を惜しみ惜しみ拵へる窮屈な棺箱を意味した。それは同時に、その上

に樹てられる細長い木の札を意味した。木の札に、その男の漢とした原籍と姓名だけは殘る。しかしあまり木の札が小さいので、その男の病名も、その、、、、、、到らしめた七人の惡魔のやうな「醫者」のことも書いてはない。

病氣に罹らない者も、髮は刈らず、髯は伸び放題に伸び、ろくに顏も洗はないところから、ギリヤーク人の家長のやうにぢぢむさい、黑光りにひかる、痴鈍な、睡眠不足な顏になつて、一人として人間らしい血色の者はなくなつてしまつた。臭い、垢光りのする、木の葉を綴り合はしたやうな襤褸をうちふり、猿人類のやうな勞働者達は、仕事の前に絶望的に手足を動かしながら、何一つ考へ直す力もなく、毀れて水の浸み込むゴム長をぺかぺか鳴らしながらよろめき廻はつた。

人間の窮乏狀態とは無關心に、孕みきつた魚類は、青黑い氷河の押寄せるやうに、夜も晝も川を慕つて雪崩れこんだ。網が張り裂けたことも、一度や二度ではない。狼狽した人間は、大自然の無盡藏な寶庫から溢れ出る。魚の形をした「富」にむかつて、人間の企て得るあらゆる手段を竭して、その獲得と、獨占と、保存とのために、お互ひに憎みあひ、格鬪し、腹立たしい謀計で欺かねばならなかつた。

網揚げである。朝から時化氣味な空は、船を出すときには、沖の標木が見えぬほどの密かい雨になつてゐる。海は、この白い混沌の奥から、大太鼓のやうな地鳴りを打つてゐる。少し經つと、礫を八方からぶちつけるやうな雨になつた。風が加つて、底氣味の惡い波濤が、白い卷紙のやうな頭を見せて、むくむくと流動する丘を拵へては、急に深い谷底にせり代る。漁夫達は網の兩側に船を寄せて、骨を切るほど冷い網を手操りにかかる。魚は、透明な青黑い脊を見せて、だんだん縮小して行く自分達の隱れ家に狼狽して、互に彈きあひながら、水底を逃げ廻はる。目脂を溜めた部長が音頭をとつてかう歌ふ。

「徹夜徹夜で……エヤホウ、
扱き使はれて……エヤホウ、
いくら俺らだつて……エヤホウ、
堪りあしねえ……エヤホウ、
函館さ歸つたら……エヤホウ、
船頭の鬼め……エヤホウ、
みんなでぶん毆れ……エヤホウ、
ぶんなぐつてやるべえ……エヤホウ」

この悲痛なコーラスに、東京者の宇田川は、一段ときんきら聲を張りあげて卽興をやつた。

「協力一致で‥‥エヤホウ、
國家のために‥‥エヤホウ、
御國のためなら‥‥エヤホウ、
、、、、、、‥‥エヤホウ！」

と、八分通りあがつた網の傍へ、部長の合圖の櫂を逆さにしたのを見つけて、揉まれながら到着した發動汽船から、船頭の奧野が桐油紙で包んだ肩を聳やかして、屹と一同を睨め廻はした。

「資本家がなくなつたら‥‥エヤホウ、
、、、、、、、‥‥エヤホウ」

歌はつゞく。奧野は痙攣的に、長い手鍵を握つた片腕をぶるぶる震はせて、口から、唾といつしよにバットの切れ端を海面へ吐き棄てた。

8

人間はどしどし仆れた。

それに反比例して鮭は殖えた。

百六十一人の勞働者のうちで、滿足に手足の動く者は、百三十人位しかなかつた。あらゆる境遇に適應する本能を持つた女達だけは、土地に馴れて、風邪一つ引かなかつた。

寢たまゝになつて起きあがれない者は、どんなに人夫廻しが亂暴をしても、するがまゝにさせて置いた。病氣は、彼等をして敎へられざるガンディストにした。人夫の動員が利かなくなると、船頭以下六人の幹部と、百六十一人の間に喰ひ込んでゐた古參勞働者とは、彼等の本性を遺憾なく曝け出した。いたる處に私刑が行はれ、、、、、、、、、、、、、、靑膨れの若い者が、通路の上で泣き喚いた。新參の勞働者の中にも、次第に不安と凶事の豫感が働きかけた。あらん限りの力を絞つて、盲目的に働いてゐる瞬間、思はず、深い陷穽のやうな睡眠が襲つて來る。ふと、手をやすめたと思ふと、鼻が酸つぱくなるほど、、、、、、、、、、、毆られてゐた。幹部達の樫の棒は、屢々の亂用から、、、、、、、、、、、、、。奴隷のやうな恐怖心が人達の外皮として發達したとすれば、その一枚下には血管のやうな反抗心が次第に膨脹して行つた。幹部達の嚴格な、搾取的な組織力にも拘らず、組織それ自身がだんだん毀れて行つて、雜夫が漁夫に廻はつたり、腹裂きが船へ乘つたり、筋子部屋の連中が鹽切りへ廻はされたりした。病人や半病人が動員されるために、人夫廻しは餘計に

氣を張つて、自然と自分でも勞働者の職分へまで手を出すやうになつた。奥野と青木とだけは、この狂ひ出したやうな漁場の絶對專制政治の二大柱として、さすがに一歩も讓るところなく鬪爭の渦中に頭を擡げて歩いた。しかし、何とその手の血みどろなことよ！

眠られぬ夜がある。たつた二時間の睡眠時間であるとは覺悟しながらも、若い漁夫達の間には、暗默のうちに約束が出來てゐるやうに、こつそり番屋を抜け出す者がある。三人、四人、五人……それが夜ごとに殖えて、三十人ぐらゐの集會者を持つやうになる。三十人の集會者が寄つた頃には、この小さな團體の中に秘密な申合せが出來てゐる。彼等は、着陸當日氣絶するほど毆られた青年のポッケットに保存されてある撒きビラを中心に、いろいろな復讐を計畫した。そして、その大部分が衝動的な、むら氣な、個人的報復であつたがために、次第に淘汰されて行つて、各人に共通した、全般に利害の一貫した、一つの決議が、そこに下されたのである。

それは、要求書の形をとつて、青年戸田によつて讀み上げられた。

「要求書

一、作業時間の短縮。勞働は八時間以上を課せざること。

二、病氣の者は、速かにペトロ市より醫師を呼びて診察すべきこと。

三、味噌汁に馬鈴薯其他の野菜物を混ずること。コレは絶對的に必要だ。

四、幹部七人の不法なる打擲及び暴行を全廢すること。

五、病臥中と雖も必らず一定額の賃銀を支拂ふべきこと。

六、賃銀は、全漁獲額の今年度相場による卸値段の半額を、漁夫雜夫、、、、、、、に分配すべきこと。

右六件を、山崎德太郎商店借區漁場に於て、、、、、、、として最も必要なる保護條件として、我等一同これを要求す。

漁夫及雜夫有志」

このごく幼稚な形式の要求書は、夜、番屋のランプの下で「日露會話階梯」の萬年筆で、汚い書簡箋へ認められた。翌る朝、第二回目の朝飯の拍子木の鳴るのを合圖に、三十人は一團となつて幹部部屋の入口へ立つた。

頻りに帳簿の上へ蹋みこんで、何かを記入してゐた奥野は、一と目に不穩な空氣を見てとつて、すう、つと背を伸ばした。伸びあがつた彼の咫尺の距離に、磨きあげた兇器があつたのである。人間だけは當てにならぬとしても、これらに狂ひはない。

「何だ、何しに來た？――」

彼は尖がつた顏から、優秀な齒を剝いた。

「これですか、私達有志の間で、よりよりかういふ決議をしたのです。非常に困つた擧句、やむを得ずとつた手段ですから――是非讀んで戴きたい！」

宇田川は、一同を代表して、テーブルの上へ、その拙劣な、しかし誠意に滿ちた紙片を差し出すのである。

かういふ場合に、かういふ紙片を讀む資本家や、資本家の代理人の表情は、近代の社會では一つのタイプとなつた。それは、先づ、彼等が鼻の先で笑ふことである。次ぎに、、、、、、、卑猥な文書へ眼をやるやうに、頗る輕蔑すべきものとして、眼から一段と紙片を遠ざけて、ざつと要求條の番號だけを讀み通すことである。最後に、その表情の形式として、不可抗的にそれを讀んだ人間の唇が、大が牙を剝くときのやうに、少し宛釣り上がることである。その釣り上がりの結果、白つぽい笑ひが、その男の顏の半分を歪める。船頭奧野も、ほとんどこれと寸分ちがはぬ表情を踏襲した。

「――こりあ何だね？　お前達大勢かかつて、やつとこれだけ字が書けるといふことを見せに來たのか？　笑はせるねえ！　この漁場が始まつてから、勞働爭議なんて、たゞの一度もなかつたんだぞッ！」

ここまでは、稍尻上がりながらも普通の人間の應對であつた。それから急激に奧野は、弓弦のやうな眉毛を引絞つた。

「馬鹿ッ！　――出て行け！　ここは貴樣らの這入る處ぢやないぞ！　まごまごしてやがるとぶつ放すぞ！」

この早口の怒號とともに、彼れの右手には兇器が光つた。三十人の有志は、ちよつと見えない手で瞼を毆られたやうな顏をした。

「讀んで見給へ！　君は、讀まずに俺達を追ひ拂はふたつてさうは行かねえんだ！　もう君達のこけ脅しには飽き飽きしたよ！　俺達に正當な理由があるからこそ、この要求書は書かれてるんだぜ！何も、晝日中、大勢かうやつてだてや狂言で押しかけて來たんぢやねえんだ！　惡りいことは云はねえから、ずうつと讀んで見な！」

宇田川は、盛んに人さし指を使つて、奧野へ肉迫した。見てゐると、まるで、指一本で對手の兇器と擊ちあひの眞似をしようとしてゐるかに思はれた。

「これか、」奧野は、冷藏庫の奧から笑ひ出すやうな聲を立てた。「こんなもの！　かうしてやらあ……」

痩せた骨張つた指の間に、不眠不休で有志達が文案を練つた要求書は、いいかながらのやうに引き裂かれてあつた。

「破きやがつたな！　この野郎！」

二人の男が、宇田川を押し退けて、船頭の前へ突進した。それは、雜夫の濱本と、秋田者の田中とであつた。

「破いたがどうした！」

奥野の疳高な聲は、もう一つの遙かに強度の爆發性を伴つた響と、すれすれになつて空氣を劈いた。轟然とした反響と共に、、、田中は斃れた。一同は何を意識することもなく、先づ煙硝臭い、あとからあとからと湧く煙の層に驚いた。彼等は床を鳴らして、戸外に飛び退いた。

「撃て！、、！　手前、、、、、、、、、、！　、、、、、、、、指を啣へて引つ込む俺達と思つてるか！　さあ、かうなつたら、、だ。いや、、、、、、だ！　この漁場へあやめの花が咲くまで、俺達は根絶やしにしてやつて見せるぞ！」

宇田川は、袢纒の袖をまくつて啖呵を切つた。戸田と濱本とは、瞼をひくひくさしてゐる田中を抱へてよろよろと番屋の方へ歩み出した。彼等も亦疲勞し切つてゐたのである。銃聲を聞きつけて、全漁場は針で突つかれたやうにびくんとした。次ぎの瞬間に、これほどこの濱に人間がゐたかしらと思はれるほど、濱デッキから、飯場から、小舍小舍から、老人とも若い者とも見分けのつかない、髯むくぢやらな人間が、番屋の前の廣場へさつと聚つた。

そこで、昂奮した戸田は、眼鏡のない細い眼を腦天まで釣りあげて叫んだ。

「諸君――、、、、、、！　沖へ出た者は船を戻せ、デッキの連中は魚をずたずたに切り裂いちまへ。鹽切りの連中は、手當り次第に魚を海へ投り込め。機關場はスチームをあげるな。女達は、さつそく飯場へ兵糧の用意をしろ。手の空いてる連中は、手當り次第に獲物をとつて番屋へ聚まれ。諸君、よく聞けよ！　今、僕達の仲間である、、、、、鬼のやうな船頭の手にかかつて、、、、、、、やられたんだぞ！」

もう一度、彼れの記念すべき鳥打帽が、人達の頭上に烈しく揮り廻はされた。

その瞬間から、俄かにこの漁場は解體した。解體作用は、意外に迅速で、崩壞的であつた。

走つてゐたトロが滑走を止めた。レールは地圖のやうに靜かになつた。鹽の山の中に、變挺な墓標のやうなシャベルが突つ立つた。樽からはみ出た筋子が、ひとりでに、生き物のやうにべつたりと砂へ落ちた。半分釣るし上げた畚を、途中で突つ離したウィンチは、暫く肩胛骨の外れた職工のやうにぶらぶらして、舷と砂の上へ等分に鹽水を撒き散らした。ウインチの動力である、機關部屋ががら空きになつたからである。青年戸田の指令したやうに、濱デッキの漁夫達は、鮭をめちやくちやに切らなかつた。その代り數萬の銀蠅が魚をあさつてゐると、、、、、、、、、、、、、、、、、。平常から憎まれてゐる炊事番の老人達は、釜に飯を殘したまま、幹部部屋の向うへ行つて震へてゐた。鑵詰工場では、腐敗しかかつた物が、慌てて腐敗し出した。鑵をいつぱい詰めたままの大釜は、煮えたぎるほど煮えたぎつて雪がカムチャッカへ來て、それを冷凍するまでは、さめまいと思はれた。女漁夫達は、幹部部屋と飯場の中間に塊まり合つて、大地震のあとのやうに、口を圓めながら八人いつしよに聲を殺して話し合つた。この時だけは、番屋に寢てゐた脚氣患者も、破風症患者も、淋病も、梅毒も、起き上がつたり、飛び出したり、泣いたり笑つたりして、ことの外番屋を騷々しいものにした。はつきりと、二つの階級に百六十八人は分裂した。幹部の組と、勞働者の組と。これは最初の日に、奥野が組み合せたよりも、より單純な組み合せであつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、――古參の半分かたは、わけが解らなくまごまごしてゐるうちに、青木の樫の棒で事務所の前へ追ひやられた。ほかの半分は、手を休めるために、居なりで番屋の近くへ屯ろした。濱デッキを中心に、鮭の山々へかけて、むらに散らばつた連中が、一と塊まりづついろいろなことを喚きあつた。だが、何と云つても、、、、、、、、、、、番屋の中が一番人混みがしてゐた。自然と、飯場が雙方の交戰區域にならざるを得ない。一人の男が、事務所の筋向ひの倉庫から、女達を手招ぎした。人夫廻しの杉山君であつた。

「危いから、こつちへ來い！」

女達は、幹部に從順であつた。わけても杉山君は、今こそ、朝鮮の貴族のそれのやうに伸びてはゐるが、ちよつぴりした齒ブラシ鬚の持主であつたのである。彼等は、猫のやうに背を圓めて倉庫へころげ込んだ。

番屋の中では「日露會話」が、聲を張りあげて戰線の狀態を報告してゐる。

「今、幹部部屋にゐる奴等は、、、、と見做していい。奴等は、總勢で、七十人を少し出るぐらゐだ。俺達と、俺達の方へつかうとしてゐる人間は、女を除いたあと全部だ。これから、俺達數人は、まづ

手に這入るだけの、、、や、、や、、や、、を、この番屋へ聚める。そして、人間の數に應じて、喧嘩する者へそれを割當てる。濱にある、、も持つて來よう。それから彈丸除けには磯船を横にすることだ。出來るなら、このウィンチの鍵を、事務所の屋根へ引つかけて、あすこを根こそぎぶち毀はしてやりたいんだが――誰かこの危險な作業に志願する者はない？　塊つて行けば彈丸の二三發も食つたつて犧牲が少しで濟むといふものだ。あつたら手を擧げてくれ！」

「俺がやる！」

手を擧げたのは、薄痘痕の、漁場で唯一の機械技師であつた。しかし、彼は孤獨ではなかつた。彼は單に口火の切り役であつたに過ぎない。十本ほどの手が、手の持主の正直な顏を說明して空中に突き出された。

だが、「日露會話」のこの突飛な計畫も、志士を募つただけに終つた。

奥野の不正直な時計で十一時頃、思案に餘つたやうな顏をした老漁夫達を先に、奥野、青木と杉山とを除いたほかの四人の人夫廻しが、手拭をふりながらおづおづ飯場まで歩いて來て、疲れたやうな聲を絞つた。

「おーい、誰か、話の解る奴を三人ほど寄越せ。別に亂暴をするんぢやないから、安心して出て來いよ。話がつくものなら、お互ひに相談づくで行かうぢやないか！」

飯場では、元氣のいい聲が笑ひ出した。それに釣り込まれて元氣のない聲も笑ひ出した。

「何だ、めしの上の蠅みたいな聲立てるなつてよ！」

一人がかう云ふと、再び笑ひが傳播した。

飯場の前では、丸山の聲がいよいよ悲痛な調子を帶びた。彼は、額の疵へ血を集めて叫んだ。

「――そんなことを云はないで、ちよつと出て來な。惡いことは云はねえ、お互ひに爲めになるやうに話し合ふから、さう喧嘩腰にならないで吳れよ。……船頭さんだつて、非常に後悔してるんだ。決して手荒らな眞似はしないから、代理の者を事務所まで出してくれ！」

「船頭さん糞喰らへだ！　函館の裁判所で話をつけるとさう云へ！」

戸田は眞つ赤になつて蓆の折目から、子供がラヂオ放送の眞似をするやうに、鼻にかかつた聲で叫んだ。

「しようねえ奴らだな！……」

丸山達は、唇を嚙んで呟きながら、いつたん事務所へとつてかへした。

どちらも、飯場を緩衝地帶として、釜に入つた飯を中心に對峙した。ただ、番屋側には、眼の前

の生魚がいくらでも手に入つたのである。

長い沈默ののち、亘萬の鮭がこの漁場を素通りすることに、すつかり氣を腐らした奧野が、十杯目のウォッカを、半分口からこぼしてから云つた。

「よし、やつつけろ！　あのひようろく共を抜きにして、この漁場を開くんだ！　そして見付け次第にあいつらは、擲いて擲きのめして、それでも、氣を失はない野郎は、體軀へ鉛の芯を通してやるんだ。——俺らあ、どうあつたつてこの夏を失策じつちあ、山崎の旦那に合はせる顔はねえ！　さあ、皆びくびくしねえで、ここにありつたけの、、、、や、、をかつぎ出して、飯場で腹をふさいだら、仕事に取りかかれ！　それから、丸山、お前御苦勞だが、ウスの方へ一と走り行つて、無電を打つて貰ひてえな。百人でも、二百人でも、腕つ節の揃つた若けえのを急に狩り集めて送つてくれえつてな……いや、待て、そんな氣の長げえことをしてゐたら鮭はゐなくなる。仕方がねえ、泣きを入れて隣りの漁場から、雜夫を少し廻はして貰ふか。——ええツ、こんなことをぐづぐづしてゐるひまに、魚が逃げて行く、川口のロスケの工場へとられてしまふ、金が塊つて泳いで行きあがる！」

奧野の命令は、だんだんに獨白的形式を帶びて來た。しまひに彼は、起ち上つて髮を掻き毟りながら、凄い眸で、そのへんに棒立ちになつてゐる連中を睨みつけた。

「青木、青木は何處にゐる？——間抜けめ、青木を呼んで來い！」

かう云はれた人夫廻しの二人が、へどもどして副船頭を呼びに、人をわけて外へ出た。青木は、一時間ばかり前にそのへんで呶鳴り散らしてゐたが、何處かへ姿を隱してしまつた、と云ふのが、そのへんをほうづき歩いた二人の最後に突き留めた報告であつた。

青木はゐなかつた。——

それもその筈である。この熊のやうな悪漢は、濱の鮭の山の蔭で、、、、、、、「、、、、」、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

最後に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、戸田は、彼れの死骸を、、、、、、、、、、、、、宇田川の耳元へ囁いた。

「、、、、、口ほどにもねえ！」

「嫌に温和しくなつたな！」

宇田川は、額の汗を手で切り落しながら、亂れかかる長髮を、ぐいと後ろへ投げた。

「おい、どうやら、青木を呼んでるぜ！　こりあ、かうしちあ居られまい。逃げよう！　どうせ、こんな腐つた漁場なんざ惜しくはねえよ」

「日露會話」は、二人をうながした。三人の足元には、、、。

「どつちへ行く？――」

戸田は、足を暗示的に動かしながら、二人へ訊ねた。「日露會話」は、無數の蠅を飛ばしながら、奥地の方を指さした。むんむんする腐魚のいきれの彼方に、秀麗なカムチャッカ連山が、海よりも蒼く聳えた。

「ツンドラを横切つて、奥へ奥へと行くといふと――白樺の森がある。毛唐の眼玉よりもまつ蒼な湖がある。そこには、ヤークックや、ギリヤーク人の部落が散らばつてゐる。ソヴィエト・ロシアの北方の開拓者が、俺達勞働者を喜んで迎へてくれる。こんな、尻の穴の小さい、、、、、、の腐つた鮭なんど喰はなくとも、、、、勞働と、もつと、もつと、、、、、、、があるんだ、どれ、三人で、一と股ぎにモスクワまで伸すか！」

たしかに、この男は、語學の初歩的研究者であつたとともに、、、、、、、、、、、、、第一級生程度のピオネールであつた。

もう、彼の破れたゴム長は、白樺の森への第一歩を踏み出してゐた。

そして、その震へる拳には、大概の會話には間に合ひさうにない、怪しげな「日露會話階梯」の一巻が、ピストルのやうに握られてあつたのだ。

そのとき、番屋の方に當つて、もやもやと大勢の話聲が聞えて、それがばつたり止んだと思ふと、船頭奥野の聲としてかういふのが聞えた。

「おう、番屋の連中――俺あ負けた！　酒を出すから、あつさりと今日の始末は飲み流してくんな！」

その聲を聞いた三人は思はず顔を見合はして、首を縮めながら鮭の山の下を、足早やに走り出した。

太陽の黒點

1

太田爲吉は、跛であつた。

勞働者に生れついた彼は、組合幹部の徽章をぶら下げたり、轉轍手の赤旗を振つたりすることが出來なかつたために、三種の職業に從事してゐた。もつとはつきり云へば、毎日三種の安價な商品を三人のちがつた行商人として、賣つて歩るいた、といふ方が正しいかも知れない。つまり、普通の家庭で朝の新聞を開く刻限までに納豆を商ひ、午前中は學齡未滿の兒童を顧客にして飴を賣り、電燈のつく前後にゆでだし饂飩の車を曳くといふことが、それであつた。

この三種類の商賣は、それを商ふ方法に確乎とした分岐線のない小商ひにちがひなかつたが、それでも、一人の脚の不自由な人間が、一日に三人を兼ねるに十分なほどの商法上の約束と變化はあつた。爲吉は長いことこの仕事をつづけて來た。——納豆は、原價二十五錢の十本が、辛子だけ自分持

ちで五十錢になつた。これは問屋で配達してくれる代りに殘品は引取らない。飴は、氣紛れた子供對手の商品なので、二十錢も仕入れると、まるまる賣れて、三十錢と儲からない。饂飩の方は、車、原料、鈴まで向う持ちで簀の子一枚に三十玉の、三枚以上を捌くことは不可能である。一と玉の純益は五厘、とんとんに行つて、三枚四十五錢以上の純益はなかつた。そこで、彼は、朝は聲を資本にせいぜい二十錢ほどの利益を得、晝までには鉦と聲を資本に二三十錢の賣り上げを見、晩は運が良くて五十錢近くの儲けを——都合、一日、約一圓弱の收入をもつて暮らしてゐたのである。

この蟲眼鏡で見なけりや見えないやうな收入をもたらした勞働の合間には、彼は、そのために鄕里の田を失つたほど一生の邪魔物になつてゐる左の脚を曳摺つて、古新聞の一面に貼つてある家の中を絶えず歩き廻はる習慣を持つてゐた。

最初の合理的な目的が、寒さと風を防ぐことにあつた家の大部分を保護してゐる古新聞紙は、次第に、爲吉の生涯に重大な役割を演ずることとなつて、今は更らに合理的な第二の目的を帶びるやうになつてゐた。つまり、習慣の屋内散歩の暇に、退屈しのぎに讀んだのが、いつの間にかそれを讀むことが日課になり、しまひには、それらの新聞紙は、人生の研究資料——爲吉の社會觀となつてしまつたのである。新しい新聞を讀むことの出來ない彼は、襖、障子、壁板、便所、押入、天井の嫌ひな

く貼りこくられた、三四年來の古新聞を讀んで、世の中のことを知つた。

そんなわけから、爲吉の頭腦には、ヴィタミンAといふものも、勞働爭議といふことも、社會主義といふことも、あまり明確には系列されてゐない、むしろエレメンタルな知識體系としてもうろうとした存在を營むでゐた。

『清朝遂に絶ゆ』といふミダシの下には、どうして支那の先代の王さまが、馮玉祥といふ男のために皇位を剝奪されて、一平民となつたかが書かれてあつた。さうかと思ふと、『防火宣傳の映畫』を見て放火をした子供もあつた。『五年目で出獄そのまた泥棒』とか『警官廿餘名の怠業』などといふ記事は、別な新聞にある天文學の講話と略同じ程度に、彼をして人類生活の複雜なわりに單調なことを思はしめた。皮肉なことには、いつも妻君の枕元には『誘惑される女』があり、自分の寢る場所には『生きた地獄』といふ記事があつた。

『震災のどさくさに妻を燒き殺ろす』とか『不景氣に祟られて親子五人の身投げ』とか、『爭議遂に暴動化す』とか、『血に餓ゑた鼠ども』とか、『名古屋の入人斬り』とか――かういふもの凄ごい事件が大小縱横の活字で、彼れの視力の達する範圍に、まるで彼一人に犯罪の秘密と記錄を托して置くかの如く潛伏してゐるのが、彼の家の構造であつた。煤けて、細かい記事の大部分は不明になつてゐたが、

今では、どこの釘の傍にはどんな戰爭があり、どこの壁板にはどんな學說、どんな殺人があつたか、場所と期日と出來事とが、學者の頭に海藻や昆蟲の名が泛んで來るよりも速く懷ひ出だせたのである。わけても、『東京朝日』の次のやうな記事は、讀むごとに、彼れの體を、亙きい機關車の側を通つたときのやうに非常な熱をもつて溫めずには置かなかつた。

『……小兒國有の理想の一端がはしなくも此處に面白く現はれて來たのである。僕は將來のソヰエトの小兒は總べてあんな工合に養はれて行くのではないかと考へて見た。幼兒と十歲未滿の兒童と十歲以上の青年期に入るまでの少年少女が極めて面白い工合に按配され共同の家屋、共同の食堂、共同の庭園に樂しく生活しつゝ、勞働の出來るものは養蜂、養鷄、耕作又は花園の手入れ、編物、手工等に至る迄自分に一番趣味のあり可能性のあるものをやらせる。勞働の遊戲化は經營者の特に意を用ひた處であつて勞働は決して苦い仕事でない、舞踏や唱歌と同じやうに人生になくてならぬ一種の享樂だといふことを道德的に說かずして實地にやらせてゐる。……資本主義の諸國家の家族制度は餘りに個人主義的（家族を單位とする、從つて相續財產を中心とする）に出來上がつてゐるのであるから擴充せられた規律ある共同生活を行ふのは極めて下手である。それに拘らず青年が一定の年齡に達すれば勞働者にせられたり兵隊にとられたりする。其處に個人主義的に敎育された

勞働者兵隊が共同奉仕をするのに大變な無理が出來る。從つて爲政者はどうしてもその二元的な精神を調和さすためにゴマかしの服從倫理を敎へなければならぬか、或ひは宗敎を以て瞞着しなければならぬ。だからソヰエト制度の將來では小兒は國有とする。國家で養ひ敎育して一人前の人格者に仕上げてやるやうにならねばならぬ……』

この記事に、續き物らしく、貼附られてある三疊の間にも、その他家のどの隅にも『十』と『十三』章としかなく、題は『ソヰエト露西亞で感じたこと』としてあつて、その下に『黒田禮二』といふ人間の名が記してあつた。恐らくそれは新聞社の通信員とでもいふ人の名前らしく思はれたが、もし、その人と何かの機會で爲吉が出遇はすやうなことがあつたとすれば、彼は、その文章の一字一句まで書いた當人よりも良く暗らんじてゐることによつて、黒田禮二氏を動かすことが出來たであらう。

どうして、こんな見も知らぬ外國のことに彼が特別な感激を覺えたかといふに、その理由はきわめて簡單な左のやうな二三の生活事實にあつたのだ。

例へば、食事の際である。爲吉の家庭から飯時といふものを取去つたなら、何のために彼等が一家族を成してゐるかわからないと思はれるほど、食事は一家の重大な興味であつたが、その最も華かで幸福であるべき場合に、彼と彼の妻とは、がつがつした小氣味良いほど動物的な食慾に支配され、一杯でも茶碗をよけいに啜らうと箸を握つて暗鬪してゐる三人の子供達を、上からじつと見おろしながらすこぶる絶望的な、涙ぐましい微笑を交換するのであつた。

それから、産兒の問題である。現に、彼の妻の艶子は、人間の女として孕み得る責任數を超過して、十歳を頭にした三人の子供達と一人の乳呑兒と、おまけにもう一人懷姙してから五ケ月にもなるらしいのだ。

「人なみな暮らしさへ立ててくれるんなら……わたしはいくら子供を産んだつて構はないんだけどネ。――いやだよ、御産だけは、考へて見てもぞつとする！」

かういふ論爭は、ほとんど夜ごとにこの夫婦の間に繰返へされる。いたましい性的な葛藤である。まだ三十になつたばかりの艶子は、多産と營養不良と激勞とで、すつかり面窶れがして、彈力のない四肢を出來るだけ疲勞のない方へ、溫かい場所へ、ものを考へない生活へと運んで行かうとしてゐる大きい水母のやうな女であつた。子供を一人生むごとに、彼女の高い鼻は益々高く、益々間拔けて見えた。

次には、子供の敎育であつた。善良なる國民の一人として、爲吉は子供達の普通敎育に對する父としての義務は痛切に感じてゐた。しかし、實際のところ、長女ひさ子と長男の力一は、彼の意志から

通學してゐるのではなくて、學校で慈善的に通學させてくれてゐるのである。筆も紙も讀本も、みな受持の教師が教員會議に提出した事情報告に基いて、學校の資金のうちから給與された。

この爲吉が、共同の家屋、共同の庭園、共同の食堂をさへも與へて子供を國家が育て上げてくれる場合を、涙ぐましい氣持で想像したのも無理のないことだらう。――しかし、悲しい哉、それは外國のことで、わが『東京朝日』の『黒田禮二氏』しか目擊してゐない邦のことであり、それも、もう貼られてから三年あまりにもなる古新聞の上の事實であつたのだ。人間には、幾分なりと、新聞を疑ふ本能さへもあるのだ。

……そこで、かういふ矛盾した心理狀態にある太田爲吉が、更らに多くの矛盾を包有した環境――十三軒の町の中に見出されるのである。

2

東京の近郊でも、彼れの棲んでゐる町ほど不思議な町はなからう。

その町といふのは、高い赭土の崖と、荒れはてた無住寺の境内とに挾まれた、恐ろしく窮屈な谷あひにあつて、戸數はずうつと前から十三軒しかなかつた。

谷のまん中には、いつも犬の糞と紙屑と石鹼水の溜まつてゐる、火傷した顏のやうな廣場があつて周圍に、壁や廂を勝手な方へ突出して建て散らされてあるのが、その十三軒であつた。

この町の不思議さは、その不思議さを知らない町の人達からはじまつた。寺の境内は、その雪崩れを打つた墳墓の勾配と、爬蟲類の多い籔や杉の密林と、墓地そのものの有つ憂鬱性とをもつて、一日の一定時間を、町から尊い日光を遮斷しただけではなく、絶えず町の近代化を脅かすことを怠らなかつた。この無住寺の正門からかけて、市電の終點にいたるまでは、この界隈でもかなり繁華な場所なのだが、町の誰一人として、無住寺の境内を突切つて、せめて簡單な抜け道でも穿がたうと思ひつくものさへない。況してや、生さて活動して、それぞれの勞働と税金とを收めてゐる人間の住宅區域が江戸時代の古るい骨屑を埋めた面積よりも遙かに狹い、と感づくものなぞは皆無であつたのである。墓地を五町も迂廻した、その實、この町からは直徑四五十間の距離まで、瓦斯や水道や電話が來てゐるのに、谷あひへ追ひつめられたこの種屬だけは、平氣でさういふ生活必需品を要求しようとは思はないのだ。

一方、崖の上には、太い起重機のやうな電柱が突立つてゐて、それから數條の電線が、小さな町を宙に攫み上げるやうに、谷底の十三軒の屋根へ手を伸ばしてゐた。その崖のむかう側には、日あたり

の良いなだらかな傾斜に、ラヂオを曳いた紅瓦の住宅や、ピアノの鳴りひびくバンガローなども隱見するが、それらは崖の下とは正反對の方向――文明の方をむいてゐるので、町とは外國ほどにも關係がない、町には、崖のむかうを見わたすほど高い建築もなかつたし、それに、ここの住氏は、物乾竿以上に高いところを瞻上げるやうな習慣を持たなかつたのである。

そこで、たつた一つある共同井戸はいつも同じ赭土色に濁つてゐ、廣場から蒸れ出す水蒸氣は殺人的であり、各戸の便所から發散する排泄物の臭氣はあらゆる食物に加味し、震災以後牛小舍を建てなほして六軒に分割した爲吉等の長屋には、永遠に牛の糞の臭ひが惡る甘く漂つてゐた。

十三軒のうちの一軒は、町の入口のメリヤス工場であつて、煤つぼけた不眠症のガラス窓の下には毎日十四五人の女工が、柿の蔕のやうに頭を鳩めて、どこから註文があるのか、誰も穿きそうにもないほど大きいズボンや、ダリヤ色の都腰卷などを無限に製造してゐた。工場の向ひは、鼻紙や懷爐やサックを商ふ紙細工のやうな煙草屋であつた。この二軒の入口を潜る拍子に、寺の突端から折れて來る路は、全然道路といふものの性質を失つて、軍隊の機動演習に踏み固められた田圃のやうに、必要のある地點へ最近距離をめがけて分岐してゐるだけで、桃色の消毒紙の散つてゐる三軒の藝者屋の戸口と、筋向ひの、無住寺の境内へがんどう返へしの抜け孔を持つてゐる『梅鉢』といふ料理屋と、廣場の隅の井戸端から牛舍を建てなほした六軒長屋へ通じてゐるに過ぎなかつた。

六軒長屋は、箱屋と同棲してゐる常盤津の師匠なるものの家からはじまつて、爲吉の古新聞で張つてある家で終つてゐる。この兩極の間に、いつも窓を半分開けて何かしてゐる栗山といふ男の家と夜警の爺さんとその娘の家と、爲吉と隣り合つたおちやら姐さんの家との四軒が挾まれてあつた。これらの長屋から奥へ墓地寄りに、土盛一尺ほどの優越感を誇つてぽつんと建て離されてある平家が、或る請負師の妾をしてゐる『とんぼ』姐さんの家であつた。メリヤス工場、煙草屋、三軒の藝者屋、あいまいな料理屋、六軒長屋、一軒のしもたや――總じて十三軒。このほかに、爲吉の長屋と隣つて、崖の下に設けられた鷄小舍を除いては、造營物といふものは絶對になかつた。この統計が示すとほり、崖の下の町は、藝者屋町としてはあまりにみすぼらしく、それかと云つて貧民窟にしては地價や家賃の高か過ぎる――謂はば、そのどちらよりも劣つてゐる。最下級の藝者屋町――淫賣窟であつたのである。

この淫賣窟で、實際に淫賣窟なみの職業に從事してゐたのは、『梅鉢』の女將と抱へ藝者、三軒の藝者屋の女達が七八人、それに、名義上、常盤津とか長唄とかの職業を出して男の集會所を開いてゐる『御師匠さん』達や、爲吉の隣りのおちやら姐さんなど、――都合で十三四人はあつた。そのほかの堅

氣な連中は、この夥しい『婆あ藝者達』の勢力圏内に、辛ふじて自分達だけの職業を固守することによつて、その存在を認められるに過ぎなかつた。この町でも、やはり數は勢力であつた。いつも窓を半分開けて何かしてゐる栗山といふ男は、ときどき外へ出て行つては、ひどく醉つぱらつて歸へつた。夜番の爺さんは、夜になるとこつそりほかの町へ柝を打ちに出た、爲吉は爲吉で彼獨自の生活方法があり、メリヤス工場は無限に同じ型の腰卷とスボンを縫ひ出してゐたのである。

この町の人達の特色を擧げるとなると、私達は何を措いても、先づ彼等の無責任と利己主義とを擧げねばなるまい。その一つの例は、『梅鉢』の流し元にある塵埃箱から食み出る、ぬるぬるしたよごみがいつも共同井戸から廣場へかけて、犬や野良猫や掃除人夫の散らかしたままになつてゐるのだが、つい眼と鼻の近間に、自分の家の銅壺や廊下を半日がかりで磨いてゐるお主婦が、一向に魚の腸や竹の皮や鷄の脚については懸念しないことである。それから、井戸端を水源地として爲吉の家のうしろの溜桶へ流れる仕組みになつてゐる、土管を半截にした泥溝であるが、これには、いつも長屋中の使ひ水があふれて、その小さな洪水の氾濫した沿道には、飯粒、人間の痰、魚の頭、大根の尻尾、菜つ葉のきれなどといふうす汚い廢殘物が、女の長い髮の毛に堰き止められたままになつたり、蚯蚓の死骸と同じ色に腐つたりしてゐても、誰一人としてそれを掃き流さうと試みた前例がない。土管はところどころちぐはぐになつて、そこから滲み徹つた汚水は、地層を腐蝕して床下に侵入し、息の塞まりそうな臭氣の中に、あらゆる種類の蟲けらを培養してゐるのである。次に、この町のたつた一つの共有地とも云ふべき廣場であるが、そこへ立てかけられた高低十組の物干柱には、恥も外聞もなく町のどこからでも見とほしのつくやうに、一見眉をひそめさせるやうな色彩の不潔な腰卷や、露骨に隣り合はせた男物の猿股や、道化じみた男の襯衣などが毎日空へ高々と陳列される。それから、この物干柱に圍まれた廣場には、雨が降らないときは、どこから集まるともなく、あらゆる顏つきの子供達が、朝から晩まで椋鳥の群よりも騷々しくむらがり立つてゐる。それらの子供達は、ただに廣場を排泄物や騷音や紙屑などで穢すだけではなく、彼等獨特の實社會の模倣を行ひ、泥棒ごつこ、戰爭ごつこ、探偵ごつこ、めんこ、賭け獨樂、『阪妻ごつこ』にいたるまで、ことごとく人間の世の淺ましさを演じつくし、その上に、內輪もめで家の蔭や他人の軒下から大聲で惡態をつきあふのである。彼等は仲間うちで、めいめいの盜癖を奬勵しあふやうな道德を尊重し、隙さへあれば誰の物でも掻つ拂つて、墓地の奧や廢寺の廊下へ遁げ込むで分配し合ふ。警察權に見捨てられたやうなこの町では、深夜が夜の引明けまでも、男女の痴話喧嘩があらうと、三味線を鳴らそうと、花札を引かうと、絕對にそのうちうちの勝手であつた。もちろん、刑事は巧みにさういふ時間以外のと

きしか、この町へ這入つて來なかつた。師匠達の掻き鳴らす三味線や、料理屋藝者屋の亂痴氣騒ぎや、子供達の不斷の喧騒などは、崖と寺の境内とに三方を塞がれたこの町に反響し合つて、いつも何かの騒々しい取引に聲を張りあげたり、どうにかして人の注意を惹かうとして手當り次第に器物を鳴らしたりしてゐる、場末の市場のやうな感じを與へた。

どんなに長屋の亜鉛屋根が破損し、皆が塵埃捨場を荒らそうと、どんなに危險なガラス屑が廣場に散らばつてゐようと、どれほど『桔梗屋』の前にさくら紙が落ちてゐようと、この町の女達から、化粧の本能だけは奪ひ去ることが出來なかつた。だが、化粧といふことは、この町では衞生と婦人美を無視した、文字通り他人を一時的にあざむく意味の化粧に過ぎなかつた。それは、大概の場合、錢湯で三日前に結つた髪へ更らに臭い油を加へることであり、頸から上だけを白く、あまりにも白く塗り立て、脂ぎつた足や、まつ黑な爪の變形した手は、全く自分と關係のない誰かの肉體でもあるかのやうに、自然のままに放置してゐる種類の美容術であつた。それと同樣に、この女達は、半襟と上衣一枚だけは比較的高價な物を着てゐたが、襦袢腰卷足袋履物などは、ほとんど實用性をさへ失ひかけた品物で間に合はせた。同じことが、彼等の會話、食物、流行、支出收入、心理生活のすべてにも行亙つてゐた。そこで、性質上、清潔で派手であるべきこの町から、いろいろな汚らしい裏面が暴露した

『桔梗屋』の二階には梅毒第三期の瀕死のとも奴が毎日女將に虐待されて——死ぬのを待たれてゐた。『梅鉢』の抱への秀きちといふ藝妓は、何かの腫物のために、決して電燈をともしては、、、、しなかつた。『中村屋』の女將は、首に出來てゐるぐりぐりを隱さうとして年中手巾を卷いてゐた。覿面に、女達の不節制の祟つた例として、とんぼ姐さんの息子は痴呆症で、鰐口のやうな唇から留度なく涎を流してゐた。どこから來るのか、新しい田舍女が來たと思ふと、半月ほどで忽ち町の化粧法を覺え込み、眼藥を買つたり、洗滌劑を入れた罎を下げて病院通ひをしたりした。——

太田爲吉は、この十三軒の町を人間の創造し得る最極限度の地獄だと思つてゐた。しかし、人間はどんな地獄の底に於ても何等かの方法で經濟生活を營んでゐるものだ。爲吉と彼れの一家は、この地獄のどんづまりの牛小舍を建てなほした長屋に、一年半以上もの家賃の滯納を來たしてゐたのである。

——私達は、ここで、爲吉のことと前後して、崖の下の鷄小舍のことを語りたい。それには、どこの町にもある鷄小舍といふものでさへも、この町では一つの不思議な存在であるといふ事實を、私達は見逃したくはないのだ。

第一、この小舍は爲吉の、三疊のつい窓の下にあつた。

3

その鷄小舍といふのは、何かの殘忍な大機械で、一と息に削り去られたやうな崖の二隅へ、ぼろぼろな亞鉛枚と、姙婦のやうにたるみきつた金網とを結はひつけ、單に家禽の脫出を防ぐといふだけの原始目的をもつて設けられた小舍で、それの創造主は、その小舍のやうに頭の單純な、爲吉とは壁一重隣りの、年增藝妓のおちやら姐さんであつた。

それが出來あがつた當座は、金網も亞鉛も新しく、姐さんの評判もよかつた。

「……あれがうまく行けあ、下手な情人など持たんでもいいわけだからな。」

彼女のだらしなさを知り拔いてゐる爲吉でさへも、その當時は隣家へとどかぬほどの聲でかう艶子へ語つたものであつた。もちろん、かういふ利殖の方法が、突如、町の傳統を破つておちやら姐さんの頭腦から發明されたについての驚嘆の裏には、この町の反語として、彼女が黑ん坊のやうに黑く、年配も惡あがきをし出す頃合ひの年增である癖に、どうも男に緣がうすくて、いつも旦那に遁げられる女なのだから……といふ意味も潛めてあつた。

鷄はレグホンといふ種類であつた。雞でも生やしてゐそうな、逞しい一羽の雄鷄と、白い肉感的な三羽の雌鷄――營利事業となるとどうしても一夫多妻でなけりやいけない。それらが輸入されてから町の景氣がぐつと引立つやうに見えた。關係のないやうなことだつたが、爲吉の家の夫婦喧嘩でさへも、爲吉の置き處が、鷄小舍の方へ幾分移つて行つた。家禽といふものが、どんなに人間の社會へ貢獻するところの多いものであるかは、飼主の姐さんが急に早起きをするやうになつたり、サックを賣る煙草屋に『うみたての卵あり□』と書いて卵の所在地とは反對の方を指さしてゐる指標が出たり、『梅鉢』へ御用を聞きに來る鳥屋が鷄卵の値下げを斷行したりするやうな、有機的な變化よりも、むしろ、町に漂はすところの牧歌的な効果にあつたといふべきであらう。飽食した雄鷄が、鷄冠を振り立てながら、日ねもす蓄音機の西音洋樂のやうな音吐で、騷々しい崖の下の町へ、豐饒と幸福の歌を唄ひかける――それを聞いてゐて、心から伸び伸びとする村落的情緒にそそられぬものがない。更らに又、雌鷄のくらツく、くらツくこう、こう、といふ家族的な聲を聞いてゐると、何かの聯想から、どんな無賴漢でも自分を生んだ母親を懷ひ出さずにはゐられない。町が町であつただけにかういふ微妙なユニアンスはむしろ途方もない錯誤としか思はれなかつたが、おちやら姐さんでさへも淫賣業者以外の何かの家庭的な本能を持つてゐたことを證明しただけでも、それ相應の價値があつたかも知れない。『うみたての卵』と小さな看板を揮毫したお禮として、爲吉一家が大小四つの卵を寄與され、それ

らを四日がかりで食べたことなども、恐らくその餘德の一つであらう。

二た月のうちに、幸福はレグホンの一夫三妻を見舞ひ、小舍には眞綿の團塊のやうにふくふくした歩行するのが不思議に思はれたほど玩具の雛つ子に似た、七羽の生きた小さな鷄が姿をあらはした。雛つ子のどれがどの母親の直系であるかは判明しなかつたが、いづれも兩親の茶褐に白まだらを遺傳してゐて、鷄としての立派な將來が彼等に約束されてゐた。それらを孵へすまでの姐さんの苦心と、孵へし終へてからの助産婦的雄辯とは、最も良く爲吉夫婦によつて耐え忍ばれた。彼女は留度なく話すのである、まるで話してしまはないと忘れてしまふ惧れを感じてゐるやうに。——もちろん、泥水稼業にはうんざりしてゐたこの七羽の雛つ子が七七の四十九羽に殖えて見なさい、大小五十二羽の鷄を引率して、お天道さまがどこから上がつてどこへ落ちるか見定めのつくやうな原つぱの一軒家を借りなきあならない、さうなりや差し向き爲吉さんに小舍の掃除やら何かをお願ひして、毎日オムレツにチキンカツだけ食べてゐる、——かういふ話に聞き惚れてゐると、艶子の洗濯石鹼がひとりでに鹽の水へ溶けてしまふのであつた。

しかし、鷄の運命といふものは、人間が禽獸の一部を家畜化して以來、人間の社會組織と密接な關係のあることは、おちやら姐さん以外の大概の人が知つてゐる事實であつた。雛つ子が生れて、七七四十九羽どころか、野良猫のために二羽誘拐された頃から、何といふわけもなくおちやら姐さんの本職の方が揮はなくなつてしまつた。それには世の中全體が幾分不景氣になつたといふこともある。現に、爲吉でさへも毎朝納豆が六本しか賣れなくなつてゐた。それにしても、姐さんがあまりあけすけと泥水稼業を呪つたことが、檢番の方へひびいたといふこともあつたらしい。さうなると、彼女もべんべんと鷄ばかり可愛がつては居られなくなつた。姐さんが躍起となつて稼ぎ出してから今度は、ほんたうに世の中の方で不景氣になり出した。世の中が不景氣になるといふことは、町の女達にとつては寺の角を曲がつて二三町先きの檢番から形式だけにも來る迎ひの者が來なくなるといふ現象以外に何もないのであるが、それが、彼女達には、檢番といふ制度が世の中を不景氣にしてゐるとしか思へなかつたのである。前から、檢番といふ制度に、不自由と不經濟を感じてゐたじまへの女達や、そのためにいつも血稅を絞られてゐた連中は、一圖に、彼女達に小遣錢にさへもつまらしくならせてゐたものは檢番であるといふことを觸れまはつた。そして、必然の結果として、町には『、、、、、』が殖えた。『梅鉢』でも、師匠連の家でも、『桔梗屋』でも、無屆で女達が、、、、、。おちやら姐さんでさへも、町の外の安待合と結托して。ひそかに檢番の方は迂回して淋しい裏道から通つた。待合で都合の悪るいときには、構造の點に於てそれと甲乙のない自宅へ大びらに客を連れ込んだ。爲吉の一

家に皮肉な悶着が起こつたのはその時分からである。長屋は、同じ床つづきであつたところから、支へる重量が、床板の抵抗力を超過した場合には、震動は遺憾なく周圍に波及した。爲吉が昂奮して夜もろくろく眠られないことが多くなつた。それと同時に、艶子の顏には、妙に良人の人格、全存在をすらも侮蔑するやうな表情が見えた。おちやら姐さんの方では、大部分醉つての上の亂業であつたとしても壁一重隔てた自由勞働者の家族には、兩性の最も深刻な問題が鬪はれつつあつたのである。

爲吉は、壁を恨らんだ。そのむかうにゐる黑ん坊のやうな年增藝妓を恨らんだ。牛小舍を分割して貸す大家を恨らんだ。

そのうちに、多産的な艶子が懷胎した。

爲吉は失望した。彼は人生を呪つた。

町の女達の非公式振りがあまりにはげしかつたので、土地の三業組合から嚴重な抗議が出た。それにしても、場末の三業組合の勢力をもつてしては、不景氣といふ對手は少し大き過ぎた。組合よりも直接に、女達は不景氣の支配下にあつた。かういふ町の狀悲の下で、鷄はばつたり卵を生まなくなつてしまつた。彼等は單純な生物であつただけ、人間の女よりも食物と生殖力との相關現象をより直接にあらはした。姐さんは打ちつゞく亂醉と朝寢と貧乏とで、ろくにくだけや野菜物は愚か水さへもあてがはなかつた。雌鷄と雛つ子とは、長屋の溝板を傳はる人間の跫音に喊聲をあげて金網の目へ突貫した。しかし、大概の場合それは跫音だけに終つた。たまに、爲吉などが近づいて見ると、鷄どもは、首を幾度も兩方へ傾けて、いぢらしいほど彼れの手に食物があるかどうかを確かめるのであつた。彼は一種の義憤を感じた。

「鷄を——あんたはどうするつもりですかね？　あれぢや、ひぼしになつちまひますぜ。」

彼は、二三度、午後になつてもまだ眠つてゐる姐さんを起こした。姐さんはその都度何とかしてくれと云つて、云ひわけばかりに、爲吉に小錢を渡した。見るに見かねて、或る日、爲吉は『梅鉢』へ相談しに行つた。そして、その頃から『梅鉢』の殘り物や小糠などを、艶子が鷄小舍へ運んで行つてやることに定められた。

「今朝は卵を生まなかつて？——」

二三日經つとそんなことを姐さんが、艶子に訊ねた。聞き咎めた爲吉は堪らなくなつてかう頭から怒鳴りつけた。

「卵を見たけりや、姐さん、朝早く起きなけりや駄目ですよ！」

「それがちつとも生まないんですよ、この頃は。」

爲吉の妻が側から自分のせいでもあるかのやうに辯解した。

「鷄よりも、此女の方が早く生むかも知れませんよ――お蔭さまで！」

「……あら！」

姐さんは顏の筋肉を螺旋形に歪めて、勝手元から家の中へ姿を消した。

かう云つた狀態が、しばらくつづいた。そのうちに、或る騷々しい晩、姐さんはどんな理由からか、狐のやうな、金緣眼鏡をかけて、頭髪をまん中から分けたにやけた、若い男を長屋へ引つ張り込んでしまつた。その若い男は、夜が明けても、亦その次の日が暮れても、一向に長屋から去らうとする風がなかつた。

「なんだい、あのにきび野郎は？」

「朝つぱらから、二人で呑んでやがる。いい氣なもんさね。」

「世話はねえ、黃鷄は自分持ちと來てゐる――。」

「ともかく、やーな奴ネ。」

この町には、ほかの完備した自治體のやうな表向きの審議機關はなかつたが、蔭へまはつては、かなり突込んで他人の私行所有權をも批判する無形の評議會があつて、その決議によると、若い男は場末の洋食屋のコツクでもあらうといふことになつた。その情況的證據として廣場に夥しい茶斑の羽毛が散亂し、鷄小舍の雛が三羽減つてゐたといふ事實が指摘された。その雛が、もう二羽だけ姿を消したときにはそこにさまざまな物議が湧かざるを得なかつた。第一に默つてゐなかつたのは爲吉である。――何のために、妻が料理屋の流し元から汚い物を運んだり、水を掬んだり、鷄舍を掃除したりして鷄を養つてやるのか？　あの狐のやうな若い男と年增女の酒盛の看を提供するためか？　人を馬鹿にするな！――そこへ狡猾な『梅鉢』のお主婦が妥協案として、鷄を全部買收してしまはふと云ひ出した。しかし、その値段が法外な安値であつたものか、姐さんは殆んど喧嘩腰で、そんなに他人の鷄についてやきもきしないでも投つといておくれと云ひ切つた。

さうなると、意地にも鷄の世話をするものがなくなつた。ときたま狐のやうな若い男が生米や麥をばら撒いたりする樣子は見えたが、小舍はまるで投り放してあつたところから、惡食に下痢した鷄の排泄物の殘滓と泥とが生燒けのケーキのやうに堆積して、その上へ、腰を拔かした病人のやうな雌鷄がべたりつ坐り込んでゐることは珍らしくなかつた。間もなく、二羽の雌鷄が小舍から見えなくなつて、坂の下の『鷄屋』の籠の中へ姿をあらはしたといふ噂が、眼の敏とい子供達によつて報告された。小舍に殘つた三羽は、みな毛虱に襲はれて、體ぢうを掻け廻はる痒痛に悩へかね、互ひに咬み合つ

たり金綱へ體を擦りつけたりするので、棗のやうに赤剝けのした皮膚を曝らけ出してゐた。羽並の美しかつた雄鷄は、すつかり脫毛して、翼と胸骨は今にもうすい被膜を突破りさうに飛び出してゐた。煙草屋からは、いつの間にか『うみたての卵』の札が取去られた。かうなると、鷄小舍は、夜となく晝となく、この町にうろうろしてゐるあらゆる陰險な動物どもによつて狙はれた。對手の落ち目を窺ふのは動物の本能でもあつたし、それにこの町の動物は、ひどく空腹であつた。その間、鷄は、泥の中から『巢守り』のガラス玉をほぢくり出したり、崖の赭土や小舍に散らばつた羽根を突いたり、己が排泄物をさへ啄つたりして生きてゐた。最後に、飢ゑは、逆上した母親を驅り立てて、たつた一羽の雛つ子を襲擊させた。雛つ子は一とたまりもなく臨終の痙攣を黃いろな痩せた脚に刻んで斃れた。殺ろして見ても、さすがに、わが兒の屍へだけは嘴を刺さなかつた。血みどろな鷄冠を振りながら、雄鷄はけたたましく啼き立てた。自分の行爲を恥ぢたやうな雌鷄も、雄鷄と聲を併せた。

三疊の窓から、この光景を眺めてゐた爲吉は、

「くそツ！」

と叫んで、いきなりおちやら姐さんの茶の間と隣り合つた壁板へ細長い體をどしんと打ちつけた。壁のむかう側には、目ざましと茶壺とが長火鉢の上へ轉ろがり落ちた。男と女の金切聲に對して、彼は、壁越しに、

「鷄を見ろ！」

と罵り返へした。

翌朝、廣場の隅には、又、羽根枕を毀はしたほどの雌鷄の羽毛が散らばつてゐた。最後に生き殘つた雄鷄は、それ以來、急に老衰して、中風に罹つた人間のやうに絕えず體中にかすかな痙攣を見せ、いつも白い眼を瞑つてゐるので、眠つてゐるのか死んでゐるのかわからなかつた。しかし、たしかに生きてゐたことは事實であつた。何となれば、夜の六七時頃になると、彼は突然怯えたやうに眼を瞠いて、血を吐くやうな刻を告げたのだから。

4

この憫むべき家禽と、人間太田爲吉との間には、別に直接の有機的な關係がある筈はなかつた。しかし、最近、爲吉は、世界で一番よく自分に似てゐるものは、その中風患者のやうな、ひとりぼつちの雄鷄であるやうな氣がしてならなかつた。客に對して物を賣つたり、問屋の番頭と話したりしてゐながら、彼は、よく自分のみすぼらしい、

左の脚を曳摺つた姿を心に描いた。さういふ空想は、いちじるしく彼を臆病にするやうだつた。尤もその姿は決して、鷄ほどにみじめなものではなかつたが、居酒屋の壁のやうに褪せた色合の袢纏に包まれ、頸に箱を釣るし、草履のやうにすりへつた下駄を穿き、いつも何かを口走りながら町を歩るき廻つてゐる自分のどこかに、あの鷄と共通した本質的な何物かがあるやうな悲哀に撲たれるのであつた。

實際のところその雄鷄よりも彼は淋しかつたのだ。ただ彼に於てはほんたうに淋しい人間のやうに、それを口に出して云はなかつただけである。

單調な一日の生活を調べて見ると、よくそれがわかつた。——長屋で高く鳴る時計と云つては長唄の御師匠さんの家の柱に一つあるだけだつた。毎朝、それが、二軒むかうから、四つ打つと、爲吉は機械のやうに、がわりと跳ね起きた。納豆は、夜前に會社から屆けてくれたのを、艶子とてんでの籠へ分けて、いつでも持つて行けるやうにしてあつた。顔を洗ふと直ちにその籠を頸へぶら下げた。家を出しなに、疲れはてて腐つたやうに眠つてゐる妻を、子供達の眼を醒さぬやうに搖り起こした。町へ出ると、ぽつぽつ割引電車を利用する人達が、淡い電燈の下を歩いてゐた。納豆を賣り込むのは、割引電車を利用する家庭に限つた。——職工や、安月給取りや、電車の車掌の家族。かうしてものの

十二町も歩いた頃には、町の表面から靄がとれて、すべての物にくつきりした光と影が浮き出し、從つて、納豆といふ商品にもあかあかと幻滅的な日光が照りつけるのである。彼は疲れて、自分の家へ歸つた。それと前後して、いつも幾らか彼よりも賣高の尠い艶子が、ほかの町から鼻を赤くして歸へつて來た。子供達はまだ眠つてゐる。だが、彼等の朝飯はまだはじまるのではない。爲吉は飴代を差引いた金を殘らず彼女へ渡した。渡された金と、自分の方の賣り上げとを、掌の皺の中へ大事に疊んで、艶子は白米屋へ行くのである。夫婦は寺の角まで同行して、そこで別れた。爲吉の頸には、今度飴屋で貸してくれる木の箱がぶら下がつてゐた。飴屋は長い坂をのぼつた光つた町にあつた。箱の中では、彼のぎくしやくした歩行に伴つて、鉦が兵隊の軍器のやうに鳴つた。飴屋はいつも爲吉や彼の同類を歡迎するやうに、店を開いて待つてゐた。飴屋の主人は、粉つぽい手で、品物を三本づつ一と摑みにして、莫大な取引きをでもするやうに、仰山に數を讀んだ。その傍らには、牛の角のやうな器械が、ひとりでに飴を伸ばしながら廻轉してゐた。三本が原價一錢、それを、小旗の景品を添へて一本一錢づつに賣るのだ。赤い繪具をなすりつけた小旗はそくの三錢五厘であつた。坂は昇りよりも下りに倍骨が折れた。爲吉は、左右の肩で鉈を取り、右脚を挺子にして、滑るやうに無限の傾斜を下へ、下へと降りるのだ。息切れがして、何かにすがりつかうとして手を差伸べる頃に、やつと平ら

な町通りへ降り立つてゐた。一度などはそこに待合はしたやうに、顏も髮もまつ白な婆さんが立つてゐて、

「お取り、今日は、連れ合ひの亡くなつた日だもの――。」

と呼びかけて、穴のあいた五錢白銅をくれたことがあつた。彼は、往々乞食とも見做されることがある。ソヰエト共和國の子供國有政策を知つてゐる、彼が！

ほんのすこし前までは、生命のない古ぼけた扉や、迫害的な門の連續であつた町へ、今度は爲吉は全く新鮮な人生觀で眼を配るのである。この場合の心理は、野犬撲殺人が、犬のゐそうな横丁や露地や蔭つぽい廣場などを物色してゐるのと大差はない。彼は、小さな撞木で鉦をかんかん叩いて、一種の狩獵的本能から暫らくその邊を窺つた。もしこのとき、小さな顏が、町のどこかの隅からちらりとでも露はれたなら、彼は急に活氣づいて『サノサ節』や『ストトン節』を大聲で唄つた。

「おくれ！」

「頂戴な！」

小供達は、嚴密に彼の職業と人柄を檢査したあとで、そつと手を出すのであつた。一本三厘五毛の小旗は、たしかに彼等の購買慾をそそらすには置かなかつた。二人が三人になる。爲吉は、賣れ出すと、むやみに大聲でたわけた歌を唄つた。卑猥な歌――十三軒の町は、その學校みたようなものであつたのだ。子供達は、赤い小旗を振りながら、工場の罷業團のやうに、猥褻な歌を唄ふ男についてまはつた。新しい參加者があるごとに、子供達は獨自の宣傳で互に勸誘し合つた。飴は子供達が朝飯を終へ、最初の小遣をねだつた一時間と、晝近くとが書入れどきであつた。しかし、非常に飽きの早い彼等は、いつも同じ飴屋から同じ飴を買ふことを拒否した。もし爲吉の方で、執拗に同じ區域をまはらうと主張したとすれば、彼は

「やアい、跛の馬鹿飴い！」

「跛、跛、ここまで御出で！」

「買つてやらないよウだ！」

と云ふやうな、腹立たしい非買同盟に出遇はした。いつも區域を變へる必要があつた。

飴が終ると、爲吉は、あらゆる商工業組織の篩からふるい落されたやうなそれらの銅貨を數へながら、頭のてつぺんまで空腹を感じて家へ戻つた。家では妻が餉臺の前で待つてゐた。子供達は、遊びに出るものは出、學校へ行くものは行つてゐた。爲吉は、飴箱を長押の一番高い釘へ吊るして食事にかかつた。あかるい餉臺のむかうに、ぼりぼり漬物を嚙み、騷々しく諸粥を啜る妻のすさまじい食慾

を目擊してゐると、いつも彼は、そのあさましさと同時に、憎むべからざるものを憎んでゐる氣まづさを自覺した。

三時頃には、饐ゑ臭い、ひやりとした製麵會社の瘤だらけな土間に立つてゐた。メリケン粉と水と機械力で、長い算盤を彈いてゐる會社は、社是として、一と玉の饂飩から、賣子と同じく五厘しか儲けないといふ利率の均等主義を誇つてゐたが、その實、個人賣子は一と晩に五十玉とは賣り得ないところを、會社は、雜多な手を經て、瀑布のやうにこの機械麵を市民へ供給してゐたのだ。爲吉の藍色の手車は、朝晝と同じ陰鬱な輪廓の、しかし今は黃昏の迫つた町を、締まりのない舌のやうな鈴を鳴らして、低く遠くまでさまよつた。夜の七時頃、會社の店先へ車を留めると、帳場では賣れ殘りの分を控除して、一と玉につき原價一錢五厘づつを請求した。帳場へ拂つたあまりは、爲吉の全收入であつた。

一日の日光が收縮すると、勞働者の慾望は先づ胃の腑の一點に集中される。彼は寺の角を曲がるときから、臺所で諸を刻んでゐる俎の音を聽いた。途中で、乞食のやうな力一と留吉とが南京袋を抱へて、薪を拾つて歩るくのに出遇はすこともあつた。家族のものが、幽靈のやうにぼやけた影を投げながら、その癖、影の主はみなこちんと壘の上へ硬まつて、熟心に彼の歸へりを待つてゐることもあつた。赤ん坊が、どこかうす闇の宙間に、腑甲斐ない人生を罵倒するやうに泣きわめいてゐることもあつた。

「歸へつたよ、――ほら、米代！」

もの賣り人の常として、町へ出てゐるときは、顏面筋肉の上だけでも樂天的に口輕るくしようとする僞造心理から、また全く脫けきらぬ爲吉が、戸口でかう高らかに叫ぶと、惣ちそこには無數の小刻みな動作を經た歡聲があがつた。父、母、子供達四人――家族はここにはじめて一日の最初の會見をするのだ。しかも、父親は米代を持つて來た！

米屋へは五六丁あつた、使ひはひさ子の役である。もつと近間にも店はあつたが、遠い方では、量もよかつたし、ときどきは子供に菓子や果物などをくれた。一家はひさ子の歸へりを待ちあぐむ。途中でこぼすといふ憂ひもある。誰か貧乏人に掠奪されるといふこともあつた。その間、子供達は、父親の命令でいろいろな角度に缺けた食器類を母親の手から受け取つて、餉臺の方へ運んで來る、石油罐で拵へた竈の中には、町の四方から蒐集された燃料はいつぱいにつまつてゐる。皆はひさ子の顏が見えるまでは、不安を紛らはすために、いろいろに手足を動かす。米屋から家まで何分かかるか、母、親は時計がなくともちやんと時間を知つてゐた。……ひさ子が來た。米、米が來たのだ！爲吉の一家

は、約束したやうに臺所の竈の前へ集まる。ろくに磨がれもせぬ米が、釜の中へあけられる。その下へ點火するのは、爲吉の嚴かな役目であつた。この家では、一個一錢もするマツチを、好奇心に富んだ子供達に玩具にさせることは許されない。竈の中には、杉の葉、木屑、古下駄、バナナの皮、ボール紙などが不規則な火焔をあげる。それらは大部分、火にならずに、家中へ黒い白い怪物となつてどぐろを卷くのだ。次男の留吉が、竈の口へ小さな手を翳してせがむ。

「ごはん、まだア？　早くよう、母ちやん。」

すると、いつもきまりきつた教訓をもつて、長男が弟をたしなめた。

「先きにお糊を取つてそれから。」

糊は末女の赤ん坊へ母乳の代りに與へるのだ。艶子は三人目の子供から乳がばつたり留まつてゐた。粥が笊から掬ひ取られると、次に、俎の上の蘿蔔が、一と撮みの鹽といつしよにふり撒かれ、更らに糊の二倍强の水が釜の中へ注ぎ込まれた。それがふつふつと沸騰するまで、爲吉は、簡易食堂で食はせる、白つぽい粒の揃つた焚き立ての丼飯や、もつと上等な、黒い櫃へぎつしり詰まつて、蓋を取るとぷーんと稻の香のする飯などを想像して食慾を刺戟した。粥が出來上つた。母親が上澄みと下のどろどろを掻きまはすのも待ちきれずに、子供達は各自の茶碗を差し出して、熱い汁を立てながら啜つた。

「一度でいいから、俺あ鹽鮭で焚立ての白い飯が食つて見たいな！」

爲吉はよくこんな贅澤を云つた。

かういふ混沌とした熱い流動物ですらも、腹へ詰められるだけ詰めたあとには、食後の滿足といふものはあつた。その滿足を出來るだけ長びかせながら、爲吉は、頭を抽象の世界へ走らせて、毎晩のやうにソヰエト・ロシアには子供達のための共同の食堂があつたのだと考へるのである。

――かういふ日々の生活は、彼に一種の社會觀を與へた。それは、もし彼の隣りの鷄小舍の雄鷄が社會觀といふものを持つてゐたとしたなら、その社會觀を極度に人間大にした度合と相似てゐた。爲吉には、どんな人、どんな家、どんな町を見ても、それらが彼の商品に對する購買力であるとしか思へなかつた。そして、彼自身、鷄小舍の金網の目から飼主の投げる餌を待つてゐる鷄のやうに、それらの町や横丁や裏通りを、いろいろな聲音で觸れまはることによつて、誰かがそれに注意を惹かれて、購買力を發揮するのを待つよりほかはなかつたといふことを知つてゐた。行商人として の彼の活動範圍は、つまり、鷄の活動範圍を幾十倍にか擴大した區域に過ぎないといふ事實が近頃ややはつきりと彼の頭に萌して來たのである。

さう考へることが、鷄でなかつた爲吉に、人間的な淋しさを誘つたことは爭はれない。

5

——と、同時に、不景氣といふ大きな力は、決して、鷄小舍の中とごく小量の物質だけで均衡を保つてゐる爲吉の一家だけを、切離してゐるわけではなかつた。

それは、實際、眼に見えて、十三軒の町を、日一日と萎縮させつつあつたのだ。それは先づ、首にぐりぐりのある女將によつて經營される藝者屋「中村屋」をして、こつそり町から夜逃げさせた。時間的に考證すると、それは、おちやら姐さんの鷄小舍に、鷄が三羽しかゐなくなつた當時のことであつた。「桔梗屋」、「ときわ」、「中村屋」と、三軒ならんだ藝者屋のうち、赭土の崖へ喰ひ込むやうに建てられてあつた最後の一軒が「中村屋」である。あとから債權者の一人によつて發見された空家の中には無數の紙屑と、鼠のやうな古い髢と、しづく一滴も出て來ない「富久娘」の空樽とが發見された。空樽は直ちにその債權者の押收するところとなつた。

藝者屋が一軒廢業したといふこと、それだけでは、町へ不可抗的な不景氣が侵入したといふ事實を立證すべくあまりに根據が薄弱であるが、その際、何よりも町の人達を脅かしたことは、今まで殆んど誰一人として氣がつかなかつた、この町の地主の出現といふことである。地主といふのは坂の上の町の、「仁丹」のイルミネーションの眞下にある、第×××銀行といふ、妙な數字で築き上げられた名の小さな銀行であつた。銀行の支配人をしてゐる、「仁丹」の紳士のやうな男が、「中村屋」の逃亡した一週間後に三人のこの町の家主達や藝者組合の役人達と會合して、酒を呑んだり藝者をあげたりしたあげく、恰も當夜の遊興の費用を、思ひつきで、町の人達に負擔させようと試みたやうに、地代の値上げを彼等だけで申合はせたのである。家主達としては、既に、彼等の借家人の大部分が家賃滯納をしてゐる際であり、その上地代まで値上げをされたのでは立つ瀬がなかつたので、一齊に家賃の値上げを協議した。——銀行がどうして地代を値上げし、家主がどうして家賃をせり上げたかについては、他人の私行をせんさくするに妙を得た、町の無形な評議會と雖も、はつきりした理由を突き留めることが出來なかつた。彼等はただぼんやりと、「中村屋」のぐりぐりの出來た女將の顏を懷ひ泛べて、何か彼女の逃亡と、値上げとの間に神秘な關係があるらしいとだけ推測するよりほかはなかつた。個人個人を擬ふことが出來ても、團體とか社會とかは、仲々疑ふのに骨の折れるものであつた。

家賃は、二割增——その噂が事實となつた時には、切口の見えない致命傷を負ふたやうな狼狽が、どの家にも起つた。

家賃が上がつて十日目に、長屋に住んでゐる夜番の爺さんと、その養女が、寺の杉の樹で首を縊つて死んだ。家賃の問題と緊密な關係がないと云へば云へたかも知れない、又、あつたと云へばあつたのである。ともかく爲吉は、その事件のあつた翌日の晩、お通夜をしようとして、爺さんの家へ行くと、やはりその家にも古新聞がべつたり貼つてあつて、ちやうど爺さんの死骸の頭の上に大きい字で「太陽の黒點」といふ記事があつたのを見たのであつた。何げなくその古新聞の記事を讀んで見ると、在來まで相互的に何等のつながりのないもうろうとした智識體系にしか過ぎなかつた新聞紙の上のいろいろな出來事や、事件などの間に、共通した動機があり、どこかに聯絡があるものだといふ革命的な見方が彼れの頭腦に閃めいたのであつた。外國の或る博士の說として、複雜な氣象的關係から太陽の表面に逆發する黑い瓦斯柱の增加と人類社會の景氣不景氣は常に重大な關係を有つ——と書いてあるのがその記事であつて、單純な爲吉をして、即座にその新知識を轉じて、老人と娘は「太陽の黑點」によつて縊り殺ろされたのであると結論させてしまふほど、記事はわかり良く書いてあつた。太陽の黑點——即ち不景氣——即ち地代家賃の値上げ——即ち老人親子の縊死——かう手取早く考へたところが、誰がさうでないといふ反證を示してくれるだらう？　だが、太陽の黑點と否とに拘らずほんたうのところ、爺さん親子の死はすこし常識に外れてゐた。爺さんは、腰のすこし曲がつた、眼窩の深い、胡麻鹽髯の、無口な厭人主義者で、長屋の交際は愚か、晝はめつたに井戸端へさへも姿を見せないといふ——やはり、どこか偏屈なところのある老人だつた。長いこと、長唄の師匠の向う隣りに住んでゐて、誰もこの老人がどの町へ柝を打ちに行くのかを見定めたものがなかつた。養女といふのは、十八九の色のあさ黑いはつきりした顏立の娘で、毎朝、町の角のメリヤス工場へ通つて、ズボンと腰卷を縫つて手間を稼いだ。その娘が、家賃の値上げ以來、工場の方の都合で、何の前觸れもなく、ほかの五人の女工とともに馘首されてしまつたのである。本來、このメリヤス工場といふのも、企業的基礎のあいまいな代物にはちがひなかつた。彼女が工場へ出なくなつてから、爺さんの家には酒のことや何かで、何となく龜裂の這入つた瀨戸物のやうな雜音が娘との間に湧き立ち、それが自然寢と近隣へもひびくやうになつた。

この二人の死因について、町の評議會が內偵した事情を物語ると、ざつとこんな風なこの町らしい原因があつたのである。——老人は、その頃、長唄の師匠の家に、彼の出勤する時刻の前後に、師匠が若い男を連れ込んでふざけてゐるのに氣を腐らしてゐた。三十五六の、謂はば女盛りの師匠は、毎晩のやうに、その男を家へ誘つてはその隣りのおちやら姐さんに負けぬほどの亂痴氣騷ぎをした。長屋の構造がもつとも一と棟の牛小舍を改築したもので、各戸が互ひに造作の一部分を共通してゐる

關係から、自然と人間の模倣性をそそるやうに出來てたのである。爲吉の一家が窘しめられたやうな惱みが、七十近いこの夜番の爺さんを亘きい手で押へつけるやうに囚へてしまつた。それは、つまり、不景氣によつて自宅へ客を取つたお師匠さんも惡るかつたし、それと同時に、不景氣によつて解雇された養女が爺さんの陶醉狀態にある間知らず識らずに彼れの性的昂奮をそそつたといふ、不景氣が二樣に作用した結果であつた、一體この夜番の爺さんの家には、蒲團といふものは、冬になると一着分しかなかつたのである。畳は爺さんがその中に寢て、夜は娘がそれに代つた。ところが、一夜、夜番の爺さんは、柝を打ちに町へ出る代りに、娘に買はせて、それを飲みながらいい氣持に醉つてしまつた。、、、舌を吐いて、別々な杉の木へ首を釣つてゐたのである。――かう云つて見れば、やはり、爲吉の推理法のやうに、どこかに太陽の黒點と關係のないこともなからう。

警察から檢死官や警部が來て、一時は他殺のやうな噂も立つたが、事件は、嚴重な屍體の檢索とともに、人性の不可解事の中へ自然消滅を遂げた。

そこで、町の中には、貸家が二軒になつた。この忌はしい事件は、あらゆる悲劇のやうに、卒然として出態して長いこと、町の人達の氣分を支配した。夕方になると、どんな子供達も、寺の境内へ足踏みするものがなくなつた。人達は、はじめて、この十三軒の町を脅かしてゐる陰慘な墓地の持つ、原始林的な壓迫を感ずるやうになつた。迷信の強い「梅鉢」の女中は、夜二階の窓から、怖わ怖わその木立の間をすかして見ると、拍子木を持つた爺さんが、よぼよぼと墓地の勾配を降りて來るのを見たとさへ言つた。

同じ不景氣が、一種の按分比例によつて、いつも桃色の消毒紙の散らばつてゐる、「桔梗屋」にも分け前を持ち運んだのを見遣がすわけに行かない。

「桔梗屋」は、溫室のやうな恰好をした、その癖、日受けが一番いい筈の地位にありながら、いつも小寒いやうな感じのする頭でつかちな家である。無理に二階の後方を、「ときわ」の縁先まで持ち出し、強いてメリヤス工場の窓を覗くまいとして西側をすつかり塗り潰したせいかも知れない。その女將は、眼の飛び出た、干鰯のやうな四十女であつたが、女達が客を連れ込むときにはひどい癲癇を起こした。町の無形の評議會は、ここでも雄辯に、彼女が秘藏してゐる狎と彼女の間に性的愛着のあるなど

といふ、、、、、、の非常識な噂を成立さしてゐたが、私達は、そこまで好奇心を銳くする必要はあるまい。だが、これだけは、この女將について語り得る。——彼女は、何かしら彼女だけの理由から、、、、、、、、、、、、、、、、、あつたとも奴といふ病人へ向けたのであつた。とも奴といふ藝妓は、まが二十五六の、さほど醜い女ではなかつたのだが、數多い男のうちから、、、のやうに出來てゐ、眼からは絶えず、黄ろい、、、、、、、、を流してゐた。爲吉は、よく自分の四疊半の障子を開けなくとも、紙の破れ目から斜かひに覗かれる、「桔梗屋」の裏側の一室に、髮の脫けさがつた、眉毛のない、篦のやうな顏の彼女が、欄干につかまつて、脊髓を鋸で挽き割るやうな咳をしてゐるのを見てぞつとするのであつた。一度などは、ちやうど家の眞下を通りかかつて、不圖、二階の方を振り向くと、日向に何等の羞耻心もなく、着物をはだけて、體の腫物の、、、、、、、、彼女を目擊したことがあつた。そのときのとも奴は、首筋一面に、赤い天然痘のやうな腫物がふき出、青筋の立つた手首には、赤インキの斑點のやうな腫れが見え、ぺちやんこになつた顏の半分を、燒けた毛糸の屑みたやうな亂れ髮が掩ふてゐた。かうもわざとらしく二階から、、、、、、、、、、、、、、、、で出してゐる彼女には、恐らくこの種の稼業の最下層の苦惱を通過した女でなければ味はふことの出來ぬ、虛無的な健康に對する憎み、美に對する呪咀が、そのままあけすけと表現された、といふ捨て鉢氣分があつたものにちがひない。——このとも奴に對する女將の態度は、この町に於てすらも殘忍であると思はれたほど無情冷酷なものだつた。それは、つい最近まで、この重態患者であるとも奴が、、、、、、、、、、、、あさましい事實によつても、證據立てられる。事實上、彼女はとうの昔に抱への資格を剝ぎ取られ鑑札は沒收されてゐたのだが、身動きさへならぬ重態であり、それに、身内といふものの皆無な彼女が、芝居に出て來る孝行娘のやうに手を合はして泣きついたので、二階の納戸へ、押込んだぎりにして、ろくに食物もあてがはずに警察への屆けはいい加減にして、投り放しに飼ひ殺ろさうと目錄んだのがお主婦の腹であつたらしい。彼女は自分では一度も顏を出さずに、納戸の中へ敷きつぱなしの汚い床の中にとも奴を放置して、わづかに日に二回、自分の食事のあまり物を、小婢に運ばせてやつたのであつた。それが、ともするといろいろな事情から、平均して日に一度の食事すら滿足に納戸へは運ばれなかつたといふことになるのだ。

お主婦の千代が、顳顬をびくびくさして、やたらに煙管で火鉢の緣を叩きながら、

「まだ、今日もくたばらないのかい？　ほんとに、なんてまあしぶとい淫賣だらう？」

と、小婢をつかまへて口汚く罵つたりしてゐるのが、臺所で洗濯をしてゐる艶子の耳へ這入ることが

あつた。しかし、とも奴は決して死ななかつた。彼女に與へられた生命力は、お伽噺のやうな女將の呪咀だけで、蠟燭の火のやうに消えるわけはなかつた。彼女は生きた。、、、、、、、、、、、に身の皮がこびりついても生きた。そして、この生きた死人である彼女に、環境は絶えず慘虐な惡戯をして窘しめることを忘れなかつた。

それは納戸といふ特別な室の設備が、わづかに紙で拵へた襖といふもの一重をへだてて、、、、、、、、、、、次室へつづいてゐたといふ、ごく簡單な家の構造から起つたことである。彼女は、每夜のやうに、惡夢のやうな次室の現象に反感と呪ひを感じた。ことに、この淫賣窟でのどん底まで落ちた彼女達をさへも道德的に窘しめたのは「桔梗屋」の半玉の「しめ子」である。しめ子は、三日間連續的に、、、、、、、、、、、、、、、、、儀式を擧行すべく餘儀なくされた。しめ子といふのは十七になつたばかりの、氣取りやのいつもつうんと濟ました顏をしてゐる。お主婦の氣に入りであつたが、町のむかうの料理屋の鈴半のお主婦の斡旋で、一夜は或る材木屋の隱居へ、もう一夜は下町の遠くからこの界隈へふらりとやつて來た見ず知らずの嫖客へ、更らに、坂の上の吳服屋の若主人へ、それぞれ初見得としての馬鹿騷ぎをしつくしたあとで、、、、、、、、、、を取つたのであつた。とも奴は、三晩つづけて、、、、、、、、、、、ゐた。しめ子の執つた痴態は、たしかにあまりにも詐欺的だつた。お主婦の入智慧によつたものにちがひないが、、、。とも奴は、三晩目には、蠢く齦を嚙みしめて、男といふものの他愛なさを罵り、女の底知れぬ惡魔性を呪ひ呪つた。

「噓つき？——大噓つきツ！」

彼女は、怺えきれずに、三晩目にはかう襖のむかうに對して叫んだ。しかし男はぐつすり寢込んでゐたし、その聲に眼を醒ましたしめ子は、

「姐さん、何を寢呆けてるのさ。」

と大人びた聲で云つて、寢返へりを打つだけだつた。

すべて、これらの事情は、町の人達の噂であつたとともに、爲吉の妻が、その家々の勝手元の掃除やら、洗濯やら、風呂の水掬みに手傳はせられた關係から、直接に見聞きして、いち早く爲吉の耳へ入れた報告である。かういふ十三軒のむらな諸現象は、新聞記事のやうに、ちやんと纏まつてはゐなかつたが、その一つびとつを突詰めて行くと、やはり、學者が不景氣の原因の一つを太陽の黑點まで持つて行くやうに、何かの大きい社會的原因に遡ることが出來たのだ。見やうによつては、十三軒の町

總體ですら、一つの大きい鷄小屋であり、そこの住民はみんな半死半生の雄鷄であつたり、飢ゑに苛まれて自分の子供を突き殺ろした雌鷄であつたりするやうに考へられぬでもなかつた。――鷄を飼はうとしたのはおちやら姐さんであつたが、さて、この人間の鷄小舍をはじめたのは、どこの誰、社會の何か――そこまでは、わが善良なる爲吉にはわからなかつた。それを知つてゐる男はこの不思議な町にたつた一人あつた。彼の名は甚作、姓は栗山、彼れの家の窓はいつも半分しかあいて居らず、その下で、この男は、世間の資本家を欣ばすやうな「十圓で千圓儲ける法」などいふ雜誌の記事を書いて、年中貧乏してゐたのである。

六

どうして、栗山甚作と爲吉が知り合ひになつたかは、やはり、太陽の黒點といふものの手引によつたと云つてもよからう。

或る晩、彼は、納豆屋の店員が品物を配達してくれるのを待つてゐた。冬期にさしかかつて、食物の腐る惧れがなくなると、納豆の賣れ行が激減するので、いつそ當分のうち、納豆の方は打切らうと思ひ、その談判をしようとしてゐたのであつた。

そこへ表の戸を開けて、ものを訊く男があつたので、出て見ると、納豆屋の店員とは似ても似つかぬ粗つぽいまん丸な顏の男が、垂氷のやうな水洟を光らせながら、土間に立つてゐるのに出遇はした。

「栗山君？――や、お宅とはちがひますかな？」

「栗山――ですか？　うちではありませんが。」

「ここは皆同番地なんですね？」

「この長屋だけはさうですよ。わかつた、貴方の尋ねてゐられるのは長屋の端から二軒目の人ですよ。顏の長い、眼鏡を掛けた、何か物を書いてゐる商賣の・・・・」

「さうです。その男ですよ。――このならびのむかうから二軒目なんですね？」

これだけの短かい會話を交はした爲吉は、出て行きしなに、その男の足のくるぶしが凍傷したやうに青膨れになつてゐるのを見た。大體他人の足に對して、彼は普通人以上に神經質なところがあつた。翌る朝になつて、何げなく爲吉がその長屋の前を通ると、いつも半分閉まつてゐるそこの窓が、からりと開いてゐて、そこからもうもうと立ちあがる煙の中に、昨晩見た圓顏の男が口笛を吹きながら廣場の隅の塵埃溜めを漁つてゐる野良犬を呼んでゐるのに出遇はした。栗山がこんなに早起きをす

ることは絶對になかつた。

「やあ、昨晩は失禮。わかりましたよ。――君は、何をしてゐるのですか？」

その男は、かう狎れ狎れしく爲吉に問ひかけた。尤もはじめてこの町へ來た人間で、爲吉の頸に釣るされた飴箱と、彼の不恰好な跛との對照に不審を抱かないものはないのだ。

「これですか？　飴ですよ、食ふに困るので、こんな物でも賣るよりほかはありませんよ。これから問屋へ行くところです。」

爲吉は、何の特色もないその男のうす汚い顏に、强いてほかの部分よりも多少人間並みであるといふまでの、黒味の勝つた眼を瞶めた。それは正直な眼であつた。爲吉は、安心して話の出來る人間だと思つた。

「飴とは面白いね。でも、何かほかにないもんですか？――馬鹿々々しいぢやありませんか？」

「ところが、駄目なんですよ。脚が悪るいのでね。一度なぞは、大崎の大正電機へコイル卷きに行つたんですが、試驗のときは棒立ちになつて胡麓化せても監督の奴に作業中にめつかつてね、三日目に追拂はれましたよ。――栗山さんはゐますか？」

その男が何か云はうとして内を振り返へつた途端に、奥から太いがすがすした聲が、無雜作に爲吉へ答へた。

「あ、居るよ。――這入り給へ。君はよく働く人だね。」

家は、爲吉の家と寸分ちがはぬ構造で、破損の程度から云へば、むしろここの方がひどかつた。たゞ、最も爲吉の眼を駭かしたのは、この家は一面にあらゆる形の古雜誌で埋まつてゐたといふことである。古いビール箱を造りつけた机が一つ、その傍に煙草の吹殼で盛りあがつた瀬戸火鉢があり、卵の殼のやうに裂けた電燈の笠が、その二つの道具の上に舞ひ下がつてゐる――目ぼしい道具と云つてはこれだけだつた。栗山は、鐵緣の眼鏡を掛けて、臺所で古雜誌を引裂きながら七輪の火をおこしてゐた。

「全く、感心するよ、君には、毎朝よくあんなに早く起きられるもんだね。そりやさうと、僕んとこへは、昨晩から坊主頭の嬶が來てね、これで、當分は男やもめも淋しくはないといふところさ。」

彼は、どこか東北人らしい訛りを含んだ言葉で氣輕に話しながら、ちよいちよい眼鏡越しに對手を批評的に見る癖があつた。前から爲吉には、この男にいろいろなことが訊ねて見たい氣持があつた。しかし世の中で、何が一番爲吉をおどかしたかといふと、それは眼鏡であつた。彼は先天的に眼鏡を掛けた人間は、自分とは絶對に別な階級に屬してゐる高尚な人間だと思ひ込んでゐた。

「貴方は――一體、何をなさるんですか、御商賣は――その、文士とでもいふんですか？」

彼はやつとこれだけを上り框から臺所へむかつて云ひ掛けた。この臆病たらしい質問は、二人の男達の突放すやうな笑ひ聲で打消されてしまつた。昨夜の男は、歩るく拍子に、青膨れのした足で室内の雜誌類を蹴飛ばしながら、

「まあ、そんなところに蹋んでないで這入り給へ。」

と云つて、火鉢の傍へ、重苦るしさうに坐つた。爲吉は頸から箱をおろした。

「栗山は、かういふ大事業家だよ。」

彼は、机の上に載つてゐる大型の實業雜誌を開いて「腕一本の資本で五萬圓儲ける法」と書いてある記事を差して見せた。そのあとで二人は又聲を揃へて笑ひ出した。

「へえ――」

爲吉は、呆氣に取られて、雜誌を手に取つた。それは、或る種の實業雜誌で、老人に讀ませるやうな大きい活字で印刷してある、政治のことや、立身譚や、地方人向きの利殖法などを書き立てたものであつた。

「君も、金儲けがしたけりやかういふ學者に相談することだよ。」

その男は、癖らしい眥乏揺るぎをしながら、横から爲吉の顔をしげしげと見成つた。

「この雜誌には、何か太陽の黒點と不景氣の關係について書いてありませんか？――あのお天道さまに黒い星が見えるでせう、あれと世間の不景氣とが關係あるつてことを新聞で讀みましたがね。」

爲吉は、雜誌を押返へしながら、突然かう質問した。このとき、七輪を兩手に抱へながら、とつと臺所を走り出た栗山が、ちよつと眉をひそめて彼を瞶めたが、やがて、瓦斯のやうな苦笑を洩らした。

「そりあ、世の中を不景氣にするのは、太陽の黒點よりも恐ろしい奴がゐるからだよ。――そんなことを云ふ奴に限つて、太陽の黒點のやうに腹黒い奴らの手先にちがひないよ。」

「いや。栗山はね、」圓顔の男は、火に手を翳しながら說明した。「十圓で千圓儲ける方法だとか、日銀の金利はどうだとか、そんな大きなことばかり書いてゐる癖に、當人はいつもぴいぴいなんだよ。」

その日の午後にもう一度遊びに行つて見ると、栗山はどこかへ外出して留守であつたが、昨晩の男だけがぽつねんと障子の下に胡座をかきながら、バットを喫てゐた。どういふわけか、この男ほど他人を珍らしがる人間はなかつた。彼は、爲吉といふ人間を、まるで骨董商が道具を捻ねくり廻はすやうに、方々から眸めるやうな眼付をして見るのであつた。二つ三つちよつとした話をしたあとで、

いきなりその男は、爲吉の度膽を拔くやうなことを語つた。

「ね、君。君は――僕が、北海道の監獄から出て來た人間だと知つたら驚くだらうね？」

爲吉の頭は異常な速度で、自分の家の新聞記事を隅から隅へ搜がしまはつた。世間の出來事で、そこに貼付されてないものは殆んどなかつた筈だ。

「いつ頃のことですか？」

「君は、あの米騷動を知つてますか？」

「米騷動といふと、大正……ずうつと昔のことぢやないんですか？」

「まあ、寺內內閣當時だね。大正七年さ。――もちろん、米騷動とは別なんだが、やはりあれに關聯したことで、僕は網走へ收監されたのさ。それから、八年。見給へ、僕の手足はこんなにひどくなつちまたんだ。――しかし、まあ、お蔭で僕はあの大震災當時のどさくさは遣れたわけだがね。」

「すると、何ですか、貴方は、何か。その主義者とでも云ふ方の――？」

「まあ、そんなものかね。――つまり寺內內閣の總辭職を少しは手傳つた方かも知れんて。」

爲吉は、壁板の「東京朝日」の記事について詳しいことを尋ねて見たかつた。しかし、考へて見ると、八年も刑務所にゐた人間が、三年前のことについて知つてゐる筈もないと思つたので口を緘ぢた。

對手はしみじみと何かを思ひあたるやうに述懷した。

「だが、何だね、僕も長いこと牢獄にゐたんだから、ちつとあ娑婆へ出る日にあ世の中が善くなつてゐるかと思ふと、――變つてゐるのは、監獄のことを刑務所だなんて鹿爪らしく呼ぶことぐらゐのもんさ。それで監獄と刑務所との間に、どれほど囚人待遇法が改善されてるかといふに……へツ、いや全くあきれた世の中だよ！――俺は、考へても瞑が立つよ。何のために俺達がわざわざ辛らい思ひをして、ソノ犧牲になつてるのかと思ふとね。……」

「變りませんかね？――でも、世の中つて、そんなに早く善くなるものぢやないでせうが。――ひよつとしたら、惡るくなる一方の、」

爲吉は、西日を受けた古障子にぼんやり眼を向けた。

「そりや、僕達が急ぎ過ぎるといふことはないことはない。しかし、もうロシアあたりでは、民衆は成功してるんだからな。――ともかく資本主義といふものが、矛盾を持ちながら大仕掛にどしどし行きつく處まで行かうとし、惰力といふ奴でどうしても引返へしがつかなくなると、世の中も不景氣になる一方さ。」

かういふ話になると、この男は奥から奥からと蜘蛛の糸みたやうな議論を無限に抽出してくれる人

物らしかつた。監獄にゐながらやはりロシアのことなんかちやんと知つてゐた！「資本主義」なんてものも、野良猫の首筋を摑まへてゐるやうに、きうつと押へつけて話してゐる！

障子の表面がうす暗く蔭つた。爲吉は驚きの眼をもつて、そこに圓い人間の團塊になつて見える網走とやらを出て來た男を瞶めた。對手は、しんみりとした口調で云つた。

「君も貧乏人だね。貧乏人は何のために貧乏してるかを悟らんといかぬよ。それがはつきりわかれば、僕達に力が出て來るんだ。むが夢中で、何年何十年——一生貧乏したつて、世の中は平氣だからな。そりや、俺が、監獄へ這入つて、一人で焦燥つていらいらして、早く世の中を善くしたい、一日もこの格子と壁と板の間から飛び出したいと思つて、いざ出た、自由だ——と思つて來て見ると、一向に俺のやつた仕事が世の中に利き目がなかつたのを見ると、左程ちがつてはしないんだ。しかしだ、しかし、しつかりと理論を把握して、資本主義の行くべき必然な徑路を見ながら、それを一日も早く驅逐したいと思つてする貧乏も、、、も、ただぼんやりする貧乏や、、とちがつて、重大な主義があるよ。

雲切れがしたのか、障子の下の方がほんのりと白くなつて、そこへだけ掌で掬つたほどの日光が射した。腰高障子の一番下の部分に廣場の物干柱の一本が淡い影になつて泛んで出た。と、對手の男の、圓い鼻のあたりに無數の針で突ついたやうな孔があいてゐて、そこからちかちかと白つぽい太陽の光がぢかに射込んで來た。

「太陽の黒點といふのは、やはり先刻栗山さんが仰有つたやうにあまり不景氣とは關係のないもんなんですかね。私はその記事をこの隣りの夜番の爺さんの死骸の枕元に見つけたのですがね。まだようく私には腑に落ちないんです。」

爲吉がかう訊ねるまでには、障子は、もとのやうにあかあかとした陽を受けてゐて、對手の顎の下には、長唄の御師匠さんの襦袢らしいものさへくつきりした片袖を見せてゐた。その男は、噛んで啣めるやうに話した。

「はは ア、そんな理由かね、その太陽の黒點といふのは、——そりや君、人類が太陽系の一惑星であるところの地球の上に繁殖してるんだから、いろいろな天文學的な意味で太陽の影響を受けてることは事實なんだ。これで、この太陽といふ奴は、彼はかう云ひさして、からりと窓をあけた。「地球の三十三萬四千倍もある、恐ろしくでつかい火の玉なんだからね。つまり、太陽系つていふやつの親玉なのさ、こいつの引力で、地球だの火星だの月だのといふ星が、かうやつてぐるぐる一定の軌道を運轉してるんだ。この太陽の火力が鈍りあ、自然と地球の上にも人類は滅びてしまふだらう。ほかの

星でも、もう太陽の火力の及ばない、その星にも自分の熱がなくなつちまつて、とても溫かい血を持つた人間の想像出來ぬほどの寒さに襲はれてゐるのがいくらも空にごろごろしてるさ。さて、それだからと云つてだね、俺達はむやみに天體の何十億年か經つ後のことを今から心配して、現在の地球の上の問題を投つとくわけには行かんだらう？　いや、宇宙といふものを考へりあ考へるほど、俺達は人間の生命といふものを尊重しなけりやならん。そこで、人類が歴史を創めてからやつて來た馬鹿げきつた同志打ちや、國と國との小さな戰爭なんてものを、一日も早く切りあげて、協力して地球といふものの持つあらゆる力を開發して、當然いつかやつて來る大寒時代といふやうなものや、雪や暴風雨や洪水なんてものの、防備策をみんなで講じなけりやならないんだ。――いきなり、突飛に、太陽黒點が餘計に現はれたから、地球の上は一大不景況に襲はれるなんてことを云つたとしたら、それこそ栗山ぢやないが爲めにするものの宣傳にしか過ぎないんだ。人類社會に、不景況を來させるやうな仕組みがあつて、それが必ず何年目かに襲つて來るといふことがわかつてゐる現在だね、――さういふ經濟的根據を投つといてからに、それは太陽の黒點さまの仕業ですは、ちと齒が良過ぎるよ――そんなのは、ざらにある低級な科學的迷信だ。ともかく、不景氣はでたらめな資本主義政策によつて起るものだ。太陽の黒點、糞喰らへサー！」

云ひ終つて、その男は、メリヤス工場の屋根に引つかかつてゐる太陽の表面へ、挑戰するやうな拳をぬうと突出して見せた。

七

不景氣は爲吉の場合に於ても、二元的に作用してゐた。

彼の年來の三種類の商賣が、一向に振はなかつたことが一つの現象であつたとすれば、もう一つは心の中で彼の今迄の社會觀を、劇藥かなんぞのやうに腐蝕して行つた。この二つの現象は、決して離ればなれに爲吉といふ人間を表裏から攻めたのではなくて、そのどちらが先に來るともなく、相繼いで起つた破壞作用であつた。ただ、それらの內訌を來たした根本の原因は、やはり不景氣といふことにあつた。

彼は、納豆をやめるとともに、飴の方も手を引いた。ゆでだし饂飩だけはどうやら續けて行つたが、それも、成績はむらであつた。日中の間は栗山とその同居人の貝島といふ男に勵まされて、方々の工場や商店に、職業を探がしに廻つた。電車賃ぐらゐは栗山が持つてくれた。

崖の下の町から出て見ると、黴臭い、窖のやうな自分の家で考へてゐるよりも、世の中はけばけば

しい眼の眩むやうな服裝をしてゐる若い女も居れば、塗り立ての椀のやうな光澤の自動車も走つてゐた。高いビルヂングには、何千人といふ人間が、きちんとした洋服を着て、どこが不景氣といふ風が吹くかといふやうな、何やらめいめいの仕事を忙しそうにやつてゐた。活動寫眞はどこの町にも赤い旗を立ててゐたし、電車はどれもどれも滿員だつた。誤つて銀座あたりの大通りへでも踏み込まうものなら、カフェには綺麗な女が肥つた紳士に媚びてゐたし、呉服屋の百貨店の窓ガラスには飛び上がるほどの高價な正札をつけた雜貨や呉服が、大勢の通行人の足を留めてゐた。

「俺達が、あの崖の下の町で、あんなに苦るしんでゐるのに、ここはまたどうしたことだらう？」

爲吉は馬車馬のやうに跛を曳きながら、かう訴り訴り歩いた。

あるときは、錆びたボイラーの捨ててある河岸を歩いて、どろどろした漆のやうな川に水上生活をしてゐる石炭船を見た。頑丈な五十がらみの髯面の老爺が、腹掛け一枚で何所かの工場へ石炭を運んでゐた。舟の屋根の上には、竹竿が立ててあつて、赤ん坊の襁褓が乾してあつた。バケツの蔭から、二三人の赭い顔の健康さうな子供が笑ひ顔を出した。彼は、そこにも一團の家族のあることを知つた團欒といふものがある。彼等の晩餐の食卓は、どんなに幸福で、どんなに賑かだらう――彼は崖の下のあばら家に一生くすぶつてゐる艶子を考へた。ひさ子、力一、留吉、すゑ子――彼等の將來はどうなるだらう。

しかし、世間は表面の華美なわりに、中味はちつとも富んでゐなかつた。工場といふ工場には、一枚も「人員募集」の札がぶら下がつてはゐなかつた。職業紹介所には、いつ行つてもバラック建ての事務所から人間が喰み出てゐて、中に居る人間は、背後から押し潰されても痛い顔もせずに壇の下へ詰めかけ、役人がたまに持つて來る端切れ仕事を生命賭けで奪ひ合つた。獸のやうな咆哮が、一齊に手を差し伸べた勞働者の間から湧きあがつた。どんな紹介所でも跛の男を特に必要だといふ口がある筈はなかつた。「土方、仲仕、人夫、雜役夫、炊事夫、火夫、運轉士、工夫……」こんな名前だけの札がずらりと並んでゐて、それらが駄目だとなると、定まりきつて「樺太行」、「北海道行」といふ札順が眼につくのである。十日もあぶれたといふ朝鮮人の勞働者などは、まるで故意に紹介所が彼をボイコットでもしてゐるやうにかんかんになつて女事務員に怒つてゐた。

一日、彼は、ある工場の罷業團が、組合旗と警官を先に立てて示威行列をして來るのに出遇はした。それは折惡しく、彼が職業を求めに行かうとしてゐる工場であつた。實際、ストライキの示威運動に、職工の數よりも警官の方が多いのは驚くほかなかつた。それでも職工達は靜粛にぞくりぞくりと砂利路を踏んで爲吉の傍を通つて行つた。たまに突發的に嫌味を云つたり、歌を唄はうとした者は、

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、容赦なく檢束された。無言で、しかし、何かの充ち溢れた力に自信してゐるやうに、砂利を踏んで行く百人近くの勞働者を見てゐると、爲吉は思はず「萬歳！」と叫びたくなつた。しかし、さう叫ぶ前に、彼の眼には、抑へきれぬ熱さがこみあげて來て、意氣地のない泪がぼろ〳〵とこぼれ出した。彼は、顏を掩ふて横町へきれ込んだ。

「俺は、世の中から捨てられてるんだな。——俺にはストライキする權利さへないんだ。崖の下の町、さうだ、あすこでは、資本主義にむかつてストライキする奴は、死ぬよりほかはないんだ！」

かういふ氣持で、方々の町から、いろいろな實社會觀を持つて歸つて見ると、彼の棲んでゐる町は、まことに腑甲斐ない、まるで生活權を否定されてゐる、乞食——社會の寄生蟲みたやうな町に見えた。嚴密に云へば、それはたしかに寄生蟲生活を營んでゐるにはちがはなかつた。そこには、一軒のメリヤス工場を除くほか、どの家と雖も、社會の生活に關係した職業を持つてゐるものはなかつたのだ。——爲吉はその後栗山と貝島の議論に、かなり感化された自分を見出してゐた。

わづかに、勞働者や嫖客達の性慾を調節する目的だけで出來あがつてゐるあの稼業！　彼等は、それを營利事業とすることに於て、二重にも三重にも、社會の階級鬪爭を隱蔽しようとする目的に使はれてゐるのだ。しかも、さうした彼等自身が苦しまずにやつて行けるかといふに、不景氣になると最つ先に困るのは彼等ではなかつたか。何故？——社會のほんたうの生産に參加してゐないからだ。

彼は、日に〳〵、客足のうすれて行く「梅鉢」を見た。そこの三つに撮まんで出してある盛り鹽は日によつては誰にも踏まれないことすらあつた。「ときわ」の藝妓の金太郎といふ女は、借金を踏み仆して客の一人と駈落をした。おちやら姐さんを、蛭のやうに吸ひつくした若い男は、いつの間にかこつそりと町から遁げてしまつた。一説には食ふべき鷄がなくなつたからだといふものもあるが、それは冗談だらう。ともかく、姐さんは、毎日居るのか居ないのかわからぬほどひつそりとして、冬眠期に這入つた蛇のやうに出て來なかつた。町の二軒の空家は、どんなことをしても借り手がつかぬらしく、火が見えるとか柝の音がするとかいふ、女達の迷信の種を生むだけだつた。とんぼ姐さんの家では、毎晩のやうに請負師の旦那が來て、毆る蹴るの大喧嘩をやつた。家の地位が一段と高いところから、その喧嘩の內容が町中にひびき亙つた。この町でなくてならぬ物賣りの一人である花屋も冬期にさしかかつたせいか、前のやうに鋏を鳴らしてやつて來なくなつた。客かと思ふと、へんなもぢりを着たり自轉車へ乘つたりして來る借金の催促人が、いつも「桔梗屋」や「梅鉢」の前を出たり這入つたりしてゐた。艶子の働きも、仕事はいくらもあつても、一向金にはならなかつた。一體が派手で、一本五錢の大根を買つて貰ふにも十錢のチップを切つた連中も、その大根を手控へるやうになつた。

一夜、「梅鉢」の奥座敷に警察の手入れがあつた。車座になつて、花を引いてゐた檢番の連中や、町の女たちや、當のお主婦など八人が拘引され、現場にあつた二十五圓の現金が押收された。しかし、八人が二十五圓の賭博、とはこの町らしい小賭博ではなかつたか！　いづれにしても、この町が漸く警察署の眼を惹いただけでも、そこに何かの意義があつたのかも知れない。

町そのものが、かういふ白つ茶けた自壞作用を營みつつあつた間、この町とは何等の關係もない、お上の役所の別働隊として知られてゐる一つの財團法人が、この小さないぢけた町の地理に注目してこの地域内へ新しいアパートメントを建てようといふ決議をして、内々、それぞれの關係者に交渉を進めつゝあつたのである。それは、主として、時の政府が辛辣な財政々策を行つて八方塞がりになつてゐたので、人氣取り政策として勞資協調主義の、社會政策といふ美名の下に都會の家賃に窮しない程度の小市民を對手にして西洋式な共同長屋を建てる趣旨から出發した一種の非公式な官營事業であつた。

この町がすつかり全部その財團法人によつて買收される――かういふ噂が、どの新聞が書き立てるとなく洩れたと思ふと、それを一番早く知つたのは栗山甚作であつた。

「そんな子供騙しのやうなアパートメントを建てたところが、この不景氣が收まると思ふのかい！　それでもつて、女學生の寄宿舍みたやうな眞似をしたところが、失職して家賃の拂へない連中をどうするんだ？　アパートメントを探がしてゐる人間より、職業のない、めしの食へない、家族の養へない人間の方がどれほど多くゐるか知れやしない。」

或る晩、二人が昂奮して話し合つてゐるところへ這入つて行つた爲吉は、かういふ栗山の話を聽いて、何かしら彼の生涯にも最後の決定をすべき時が近づいたやうにどきりとした。

「ぢや、何ですかそのアパートメントを建てるために私達を追拂はふとするんですか？」

「きつとさうだよ。いくらかの涙金を出して、ここを引移れと云ふにちがひないよ。いいかね、そのとき、三十や四十の端た金に目をくれて、はいと云つて追ん出て見給へ、君の家族は差向きその翌日からどこに棲むか？家一軒借りるには、愚劣な敷金なんてものを取る惡家主が多いんだ。その涙金は敷金にも足らぬとしたら、どこへ行くんだ！いいかね、太田君、もしそんなことが持ち上がつたら、僕達は團結するんだ。そして、飽くまでここに住んでゐる權利を主張するのさ！」

人間の居住權の主張！

と貝島は、理窟つぽくそれを云つた。

八

艶子は、栗山と監獄から出た「前科者」とを、女として憎み得る限りの憎惡をもつて取扱つた。良人が、稼業の方はそつちのけにして、毎日ろくでもない長談議に耳を傾けてゐるのは、あの二人のためではなかつたか？　勞働者に何の理窟がいるものか――あんな下らないことを議論し合つたつて、この不景氣がどうなるといふのか、四人の子供達に何を食はそうといふのか？　このままで行くなら一家はみすみす乞食でもして、野斃れ死にするよりほかはないぢやないか？――かう思ひ込むと、彼女は顏を合せるごとに、あらゆる手段をつくしても、二人から爲吉を遠ざけようと試みた。二人の社會主義者は、彼女の主觀によつて、極端に漫畫化され、怪物化されなければならなかつた。およそ人間に生れた二人の男のうちで、栗山と貝島ほどに忌はしい、醜い、意氣地なしの、陰險な惡漢はなかつたのである。それも、一人は、監獄に八年もぶち込まれてゐた囚人ではなかつたか！

艶子のこの主張は、どんなことがあつても枉げらるべくもなかつた。家計が困れば困るほど、彼女の眼の前には、世の中を嘲笑つてゐる二人の惡漢の姿が、惡魔的に膨張して行つた。彼女の雄辯の下に、二人は飴屋の機械によつて伸ばされたり捻ねられたり粘ばされたりする飴のやうに變化した。

爲吉の一家は、實際幸福ではなかつた。米がないと云つては夫婦は喧嘩し、米が漸く買へたと云つては又喧嘩した。子供達は、父親がむきになつて母親を毆るのを、學生がラグビーの試合を見物するやうに囃し立てるほど、一家の不和は平氣で昂じて行つた。爛れた傷口を觸るやうに、双方のどちらかがたつた一と言云へば、それで今にも崖崩れのありそうな喧騷を惹起こすに澤山であつた。これらの荒みきつた貧乏の象徵でもあるかのやうに、まだ乳離れのしないすゑ子は、母親の背の上でめきめきと瘠せ細つて行つた。長女と長男とは、學校の先生が月に三回も呼びに來たほど學校へは出なくなつた。彼等は、貧乏によつて、ますます密接に母親の手元へひきつけられるやうに見えた。艶子は用のないときは、子供達をぐるりと自分のまはりに坐らせて、留度のない涙とともに父親の愚物であることを數へ込んだ。

どんなに節約しても、現代の世の中で、親子六人が、一日五十錢足らずの收入では食つて行けない。しかも、そのうちの四人は、無限大の食慾を持つた子供達である。不幸なる兩親は、自分達の食物を減らして子供達へ分けてやつた。しかし、子供達には、不景氣はなかつたのである。彼等は、兩親を斃してしまふまでも喰はうとした。その主我主義にも當然の權利はあつた。

かういふ間にも、無慈悲な思想が、ぐんぐん爲吉の頭に生長しつつあつた。それは、個人の生活、